

170

明治三十七年八月二十七日 午後二時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき〕

其後繪端書は澤山書くが送るのはやめにして仕舞た君は試験の準備で急がしい事でせう

先日高濱虚子に遇ふ十月からほとぎすの號をかへる其時同紙の上部四分一許の處へ廻り燈籠の様な影法師の行列を入れたい僕にかいてくれといふから僕は駄目だからといつて君の駱駝を見せたら君に逢ふ機會があつたら頼んで見て呉れといふ君の駱駝に感服したものと見える、一つかいてやりませんか

二十七日

御舎弟の停車場のスケッチを寺田寅彦に見せたらターナーの色彩の様だとほめました

171

明治三十七年八月二十九日 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき〕

御返事ありがたく候御舎弟でも無論よろしく候書いてやつて下されば高濱は大に喜ぶべく候

172

明治三十七年九月四日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ〔はがき〕

トラホームは長い病氣です然し死ぬ事はない藥なんかはあてにならない只急劇に醫して仕舞へばよろし漫性になると終涯かゝるあぶない

九月四日

阿矢仕醫學博士

173

明治三十七年九月二十二日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき 朝顔の花を五つ六つ大きく描きあり、其中に洗髮の女團扇を手にして横向きに立つ〕

試験が済んだら樂になりましたらう小生大多忙閉口

奈良の模様頗る面白く候

是は朝貌の幽靈なり

174

明治三十七年九月二十三日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町三十六番地同學會内野村傳四へ

ブリタニカヲ見レバアルダラウ

拜啓僕或人からたのまれてモロッコ國の歴史の概略をしらべる事を受合つたが多忙でそんな事が出来ない君二三時間を潰して圖書館に入り五六ページ書いてくれ給へ御願ひだから古來からの政體等の變遷が一寸分ればよい右至急入るから其積りで御願申す左様なら

九月二十三日

夏目金之助

野村傳四君

是非やつてくれなくてはいけない、いやだ杯といふと卒業論文に零點をつける

一七五

明治三十七年九月二十四日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき〕
虚子から手紙をこころして橋口君の所へ出て御願するのだが明日から用事で京都へ立つから先日願つた廻り燈籠の畫を僕から今一返願つてくれと言います、僕は橋口君の弟は今奈良へ修學旅行中だから駄目かも知れぬが何しろ今一返話して見様と返事をしました、ほと、ぎす來月の十日頃出版と記憶して居ます夫に間に合ふ様にかいてもらへませうか

二十四日

一七六

明治三十七年九月二十九日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ〔はがき〕
先達の君の發句は中々面白いうまいものだからと再興してやり給へ虚子に見せたらほめた

秋風のしきりに吹くや古榎

御朱印つきの寺の境内

老僧が即非の額を仰ぎ見て

餌を食ふ鹿の影の長さよ

二十九日

漱石

一七七

明治三十七年九月三十日 午後(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ〔自筆水彩畫繪はがき〕
大變な事が出来たといひながら大變な事を話さずに歸るのはひどい

一七八

明治三十七年九月三十日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき〕
漁師がふごをかつぐ畫は御説の如く面白く候
昨夜深江参り是亦落第のよしに候御仲間は澤山あれば決して落膽すべからず
今日は御令弟の御蔭にて色々説明を承りありがたく候

一七九

明治三十七年十月二日 午後零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき〕 木の幹
大小五六本大きな紅葉所々に散る、前景に洗髮の女横向に立つ、女の着物の模様は紅葉散らし

昨日はほと、ぎすの挿畫御送被下難有存候

早速虚子の所へやり申候御多忙中嘸かし御迷惑の事と存候 あゝの畫はほと、ぎす流の畫に候明星流に無之面白く存候先日虚子と連句をしたる時丁度あの様な句を咏みました

此は紅葉の精に候無暗に赤くて大俗極まる所が却つて雅趣ある所に候繪畫の戸迷ひしたる如き畫端書に候 以上

十月二日

一八〇

明治三十七年十月九日 午後三時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ 「自筆水彩畫繪はがき」
昨日の孔雀は結構に候僕なんかにはこんな思想は出ない
虚子が来て色々繪をもらつたといつて喜んで居りました

一八一

明治三十七年十月十一日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島達男爵邸内野間眞綱へ 「自筆水彩畫繪はがき」
君の畫端書は何を寫したのか知らぬがあれは實景だ留學中の事を思ひ出す僕はそのあたりをよくぶら
付いたものさ

君の連句を高濱に送つてほとゝぎすへ載せる事にした今度に出るよ見給へ「諸國一見」の句は甚だ佳
と思ふ、昨夜野村がきた柿と林檎を食はせてやつた 何か持つて來給はん事希望致候

「行春や未練を叩く二十棒

青道心に冷えし田樂

此頃は京へ頼たよりの状もなく

兀々として愚なれとよ

僧堂と焼印のある下駄穿いて

門を出づれば櫻かつ散る」

今に別莊を建るから君を番人にして月給百圓賜給すといふ辭令をあけます

金

一八二

明治三十七年十月十二日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ 「自筆水彩畫繪はがき」
鶏の畫は頗る瀟洒蕙齋の様な風があると思ふ發句の前の句は調が整はぬ後の句は「時雨るゝや庚申塚に
鳴く狐」としたるものになります、君中々見込がある少し發句をやり給へそして君の令弟にも是非勸めて
くれ給へ、わけはない少しやるとどき上手になる、畫の趣味のある人が發句をやつて發句的の趣味を西洋
畫でかいて貰ひたい、

白馬會に一人位發句をやる人があつてもよからう

一八三

明治三十七年十月十五日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ 「自筆水彩畫繪はがき」
夕風の句面白し笈と須須との配合も黒人じみたり然し時候がいつだか分らぬ發句に季のものを入れるの
は感情を強くせん爲なり「夕風に笈を下すや須磨の秋」とでもすれば判然する宴やんでの句も景色よけれ
ど是も時候がわからぬ故「春寒の細殿もるゝ灯影かな」と位に改正然るべきか
夜嵐の句も同様の非難あり且是は句調と、のはず秋風の句は季あれども景色明瞭ならず去りとて情趣も
見えず候むしろ考へて理に落ちたる句と思はれ候拙句に日の入や秋風遠く鳴つて來るといふがある是は別
段の句にてはなけれども理窟なき故まだよろしく候こゝに理窟と申すは「一うなりして古葉かな」と如何

一九七

一九六

にも秋風が一度吹くと木の葉がちると云ふ景色をことさらに人に示さんと工夫して不自然に陥入れるをいふ、人を泣かすも笑はすもさあ泣け、さあ笑へといふのは妙ならず泣き度ば笑ひ度ばと抛り出したる泣かせ方笑はせ方が上手のする所に候繪にてもどうです美いでせうと繪が故意に己れを廣告して居るのはキザではありませんか、牛の繪は昔しの俳畫を見る様にて面白く候妄言多罪氣にかけずにもつとどんく御作りあらん事を希望致し候

十五日

金

一八四

明治三十七年十月十七日 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より越後國古志郡六日市村字蛇山細貝勝逸氏へ

尊書拜見仕候征露帖とか御製作のよしにて小生發句揮毫御求め相成候處小生當時は發句を廢し候のみならず征露の句などは一句も無之候然し切角の御所望故舊句二句戰爭に關するもの相認め御送申上候一葉はかき損ひ候故裏にもものし申候御ゆるし可被下候子規の短冊は小生懸望せざりし爲生前親交の割合に存外無之只今僅かに二三枚有之候是とでも留送別の句にて皆小生の身上に關するものゝみに候へば他人に差上る譯に參りかね候右不惡御承知被下度候 以上

十月十六日

夏目金之助

細貝勝逸様

一八五

明治三十七年十月二十日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞洞へ

凡音とあり

〔封筒表側に「平信

先達は譯文の俳體詩御送拜見致しました處があれば白芙蓉のよりも甚だ劣りて見ゆる様なり翻譯などは駄目だから創作をどしどしやつて送り玉へそうして俳體詩の大家になるさ君のほめて呉れた俳想詩は寅彦も大變ほめてくれたが四方太が来て大嫌だといつた俳體詩を作り得るものがこんなものをどうして作つたといふ評は少々恐縮した、近頃尼が尼になる來歴の長い奴を俳體詩で虚子と試みて居るが中々困難でもつとも進歩しない、こんだ君と遠足でもして俳體詩の記行文でもやらうではないか、ちと落雁でも以て御出掛なさい 勿々頓首

十月十九日

金

奇瓢先生

一八六

明治三十七年十月二十二日 午後零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ

〔自筆水彩畫繪はがき 赤衣の少女白き鶏に餌を與へつゝあり、背景に木立と碧空

君がくると近頃は客が居る、君は勉強がいやになつた時に人を襲撃するのだからたまには此位な事があつてもよろしいと思ふ

此繪はまづいが色が奇麗だと思ふどうだ

一八七

明治三十七年十月二十四日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき
裸體の女の半身、背景は森〕

君の句の見付所は皆艶麗なる點なり君は奇麗な事が數奇と思ふ。句々皆前回よりは大進歩なり可賀く
不産女の句だけは俗なり故らなり、水牛の句新らしくて面白し、濡小袖の句配合物はよけれど鏡臺の上に
小袖あるは如何草庵の句よろし但し少々陳腐也、緋の袴の句はもつるやの四字わるし意匠はよろし、此等
の趣味さへあれば發句は何でもなしやり給へく

二十四日

一八八

明治三十七年十月二十五日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ〔自筆水彩畫繪はがき〕

此畫は昨日も一牧書いて橋口に送つた兩方共同様の出来である

後世の好事家一方を見て贗物といふ重野成齋なるものあり兩方共うそなりといふ原漱石といふ發句を作る
人は居るが端書に畫をかけた漱石とは別人である云々

一八九

明治三十七年十一月六日 午前零時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき
寺の屋根、右手に高く杉木立、左上に圓き月、月と杉木立との間に句あり〕

御示しの句趣好は皆取り所あり句法は未だ調はざるもあり、「城高し」の句難なし但し大なる景色也先日

のとは大に異なれり一番槍の句に季なし雜の句とすべきか今少し調子をと、のへ度ものなり、夜寒の篝火
といふより夜寒に篝かなとする方可ならんか萩たる、は何となく調はず姫瓜垣といふもの小生は知らず、
東屋には句法調へり然し「しのぐ」といふは夕立の如き感あり且東屋のある菊島ならば雨に逢ふとき母家
に歸り得るなるべし實際にあらず妄評多罪

〔繪の中に〕

名月や杉に更けたる東大寺

君の繪端書を散らしにしてワクに入れんと思ふ金ピカノ物を下さい先達ての梅の青軸に雀がまだあ
るなら頂戴

一九〇

明治三十七年十一月七日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ〔自筆水彩畫繪はがき〕

昨夜は御馳走になりました

今度は本郷座をおごる積りですか

蒲團を干してランプを明るくして長烟管でボン／＼やれば天下は太平と御承知あるべし

七日

金

一九一

明治三十七年十一月十一日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき〕

先達て頂戴したる繪端書黒ん坊の圖は傑作に御座候珍藏可致候、是はまづい方の傑作故御挨拶として進呈致候

金

一九三

明治三十七年十一月十二日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河壺町島津男爵邸内野間眞綱へ
拜啓金澤地方小松とか申す所に年俸九百圓英語教頭の口あり行く人なきや淡路の先生は熊谷へ移りたるや山口の美禰に口をかけて見んと思ふ如何其他のき度人あらば教へ玉へ
それから又寶亭へ行きましたボアソングラタンの方は如何
十一月十一日

金

綱 様

一九三

明治三十七年十一月十八日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ
先達は晚餐會の爲め失敬然し僕のフロツクコートの出立を見ろといふのに見ず歸るのも失敬だ
本郷六丁目二十五番地藪中といふ女髮結の隣りに新らしき貸二階あり一寸見て御覽

金 公

寅 さん

一九四

明治三十七年十二月一日 午前零時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口賢氏へ
又々名作を頂戴難有候額を作らうと思つてまだ作らない
是はミレの尼の鸚鵡を勝手に寫したらこんな頼ちんかんなものになつたのです

〔自筆水彩畫繪はがき〕

一九五

明治三十七年十二月七日 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口賢氏へ
先達ては難有^原二枚共洒落て居る
是は例の如く亂暴な畫なり然し傑作とほめてくれ、ば結構也

〔自筆水彩畫繪はがき〕

一九六

明治三十七年十二月十二日 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口賢氏へ
近頃多忙で畫をかくひまがない。皆舊作です。先達ての上野の冬枯は意匠は頗る面白い。鴉に少々文句をつけたい

〔自筆水彩畫繪はがき〕

一九七

明治三十七年十二月十九日 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河壺町島津男爵邸内野間眞綱へ
端書と雜誌と正に落手候今日は本屋の主人と皆川と若月の二氏參り候倫敦塔は未だ脱稿せず然しものに

〔はがき〕

なります御一覽の上是非ほめて下さい雑誌の批評は當つてるのか間違つてるのか分らない僕の事が雑誌に出る度に子規が引き合に出るのは妙だとにかく二代目小泉にもなれさうもないスキフトにもなれさうにな
い僕の様な善人をシニツクの様にかくのはよくありませんよねえ君

昨夜の牛乳は非常にうまかつた僕は是から牛乳生活をやつて横隔膜の呼吸法で大文學者になるつもりだ

一九八

明治三十七年十二月二十二日 午前零時(分不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ
一昨夜橋口の宅へ招かれて雁を食つた雁は生れて始めて食つて見た頗る甘ひ雁の羹は橋口の家に限る
去る本屋が大坂の蕪漬を送ると云ふて來た
倫敦塔は出來上つたあとから讀んで見ると面白くも何ともない先便は取り消す
浦島を讀んだある部分はうまいある部分はまづい残る部分はうまくもまづくもない
十二月二十一日 「封筒の裏に」

眞綱様

金

只今手塚がきた不相變ひけが長い
今日は是から攝津大塚をき、に行く、連中の中に女が二人居る

一九九

明治三十七年十二月二十二日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口眞氏へ (自筆水彩畫繪はがき 池、
縁の土手、土手の上左端に立木一本、垣、土手の向ふに赤き屋根見ゆ、鷺鳥が群がつて土手を池の中へ駆け下りる)
雁の御馳走は大變うまかつた此度はこゝに書いてある様な奴を一疋しめて食ひたい
空也堂の菓子は頗る洒落たものですな

二〇〇

明治三十七年十二月三十一日 使ひ持參 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ
昨日は失敬其節申上た大坂の蕪漬乍輕少御目にかけて候間御風味可被下候多いと石を壓す方があぢが變ら
んでよいさうだけれど少し許りだから夫にも及ばぬ事と存候
蕪を送ればとてかぶを食つて新年に羊にでもなりたまへといふ謎ぢやない度々櫻坊の御馳走になるから
御返禮と思つて差上りますのですよ

蕪居士

櫻坊大人 座下

二〇一

明治三十八年一月一日 午後(時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ

先達ての龍土軒主人の歌は頗る面白いから虚子の所へ送つた虚子曰く以て二月のほと、ぎすを飾るに足ると但し雁の肉我に何ぞは何とか改めたい皆川は返子へ行つて氣に喰はんとかで房州へ行つた當日來て洋書を二冊僕に托して君にやつてくれろといひ置いて行つた一冊はハーンの怪談で御蔭で之を通讀した猫傳をほめてくれて難有いほめられると増長して續篇續々篇杯をかくきになる實は作者自身は少々鼻について厭氣になつて居る所だ讀んでもちつとも面白くない陳腐な戀人の顔を見る如く毫も感じが乗らない。小野小町は僕も驚ろいたね。萬事控目が難有い 實は出鮎張る學問も精力も無いのだから已を得ざる譯だ猫傳中の美學者は無論大塚の事ではない大塚はだれが見てもあんな人ぢやない。然し當人は氣をまはしてさう思ふかも知れぬがそれは一向構はない。主人も僕とすれば他とすれば他どうでもなる。兎に角自分のあらが一番かき易くて當り障りがなくてよいと思ふ。人が悪口を叩かぬ先に自分で悪口を叩いて置く方が洒落てるぢやありませんか

昨日は傳四が來る寅彦が來る四方太が來る。晩に眼がさめたら百八の鐘をつく所であつた昔しなら感慨云々の場だが何ともない只聞いて居たら寐て仕舞つた。元日も好い天氣で結構だ。今日は何だかシルクハットが被つて見たいから一つ往來を驚かしてやらうかと思ふ 左様奈良

元 日

金

眞 綱 様

二〇一

明治三十八年一月二日 午前七時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河鹽町島津身爵邸内野間眞綱へ 「はがき」

今日はなぜ上らずに歸つた。傳四が來て雜煮を食はせろといふから一所に晚餐を食つた。君も雜煮を食ひに來給へ可成晩食の時が落付いてよい

本郷駒込千駄木町五七

夏目金之助

一 日 夜

二〇三

明治三十八年一月二日 午前七時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ 「はがき」
君年始をやめて雜煮を食ひにこぬか可成晩食の際が落付いてよい。

本郷駒込千駄木町五七

夏目金之助

二〇四

明治三十八年一月二日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ 「自筆水彩畫はがき 左端下に灰吹、灰吹から蛇が二匹出て棹を形成る、棹の中には男が机に頬杖をつく、机の上には硯と筆」

灰吹から蛇が出ました一寸驚かせるね

二〇五

明治三十八年一月四日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河鹽町島津身爵邸内野間眞綱へ
君がくれた猪肉で傳四を御馳走し。昨夜は又虚子四方太橋口兄弟を御馳走した昨夜は大分面白かつた是

も君の御蔭と敢て一書を奉呈して感謝の意を表するいづれ八日過になつたら來給へ皆川と三人で雜煮でも食ふかね。今朝小野君が來て英米名家詩抄といふのを一部くれた。

人のところへ手紙をよこすに名宛人の名前をかいて自分は姓丈かくなつてえのは失敬だよ。自分の事は大抵の場合には(眞綱)とばかりかいて姓もかゝないが禮義である。先方を尊敬し様とする場合には向ふの姓丈かいて名を略す或は其人の號をかく。自分の號を書くのは矢張失禮になる

第一號

一月四日

合場の敬尊

夏目様

眞綱

第二號

一月四日

合場の等同

夏目金之助様

野間眞綱

合場の意懇極
合場るやへ下日は又

一月四日

金之助様

眞綱

是が昔しの禮義であります

一月四日

眞綱様

金之助

二〇六

明治三十八年一月四日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地殿中野村傳四へ

昨夜は虚子と四方太と橋口兄弟を呼んで猪の雜煮を食はした。君はもう二返食つて居るから呼ばなかつた。虚子と四方太に君の文章を見せたら四方太曰く是は寫生文ぢやない三十七年十二月三十一日の雜錄だと傳四君にさう傳へてやり玉へと僕は此一言に避^原易してほとゝぎすへ出せとも云はなかつた 草々不一
一月四日

金

二〇九

傳 四 兄

1107

明治三十八年一月六日 午後零時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎氏へ

新年の御慶目出度申納候白扇會々報每號御寄贈にあづかり奉謝候拙稿屢御求めの處いつも御斷りのみ致甚だ濟まざる儀と存候間今日は無理やりに妙なものを作り供貴覽候御一笑可被下候何だか譯のわからぬものに候へば御取捨は御隨意に候 以上

一月五日

夏目金之助

井上微笑様

元日や歌を咏むべき顔ならず

胃弱の腹に三椀の餅

火燵から覗く小路の靜にて

瓶に活けたる梅も春なり

山妻の淡き浮世と思ふらん

厨の方で根深切る音

専念にこんろ煽ぐは女の童

黄なものを溶けて鍋に珠ちる

じと鳴りて羊の肉の煙る門

ダンテに似たる屑買が來る

1108

明治三十八年一月十日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町三十番地奥井信皆川正禮へ

拜啓只今野間眞綱君參り雉子一羽もらひ候間ひる飯をくひに御出被下度右御案内申上候 以上

一月十日

夏目金之助

皆 川 様

貴下

1109

明治三十八年一月十五日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ

其後何にも出来ないかね。どうも君の作は着想は面白い所があるが言葉が平凡な所が多い今一といきと云ふ處で氣がぬける。端唄でも俳體詩でも澤山作つて御送りなさい。

猫の續篇先達脱稿虚子に交付したり見て文句をいつて下さい。

今日頃から休業前の僕に返つた様だ。

鴛鴦博士とは艶な名だ

此繪端書は舊作です。

昔し大變な罪惡を冒して其後悉皆忘却して居たのを枕元の壁に掲示の様に張りつけられて大閉口をした夢を見た。何でも其罪惡は人殺しか何かした事であつた。
先達の雉子は大變うまかつた。

二二二

二一〇

明治三十八年一月十八日 午後二時四十分 本郷區千駄木町五十七番地より下谷區谷中瀧水町五番地橋口清氏へ「自筆水彩畫繪はがき」
猫の畫をかいて被下よし難有候。
可成面白い奴を澤山かいて下さい。
鬼と佛の繪端書は上出来と存候
〔繪の肩に〕

あるは鬼、あるは佛となる身なり
浮世の風の變るたんびに

二一一

明治三十八年一月十九日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河鹽町島津男爵邸内野間真綱へ「自筆水彩畫繪はがき」
君がほめて呉れたので倫敦塔が急にうまくなつた心持ちがする。然し世に稀なる文學者は少々驚ろいたね。何しろ此繪端書を以て御禮を申し上げねばならぬ。
支那の織物は僕がもらふよ。僕は太抵のものももらふ主義だ。
時間さへあれば僕も稀世の第^原文豪になるのだが。時が乏しいので、ならず死んで仕舞ふのは残念だか

幸福だか一寸自分には分らない

二二三

明治三十八年一月二十日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井館皆川正福へ
倫敦塔の御批評難有候實は稿を草する折は多少逆上の氣味にて自分でも面白いと思候處脱稿の上通讀したらいやな處が多く且今一いきと云ふ所で氣が抜けて居る様で我ながらいやに成つて居たのです。然る所本日奇飄先生から手紙をくれて大變ほめてくれたので又少し色氣が出た處へ君の端書が來たものだから當人大得意で以前の逆上に戻りさうに成つて來ました。
ダントの句は仰せの如く故意とらしく候。あれはあまり句が長すぎる爲もあります何だか知つて居る事を氣取つて無理に挿入した様な感じがある。少し氣ざと思ふ。あの句を二句位につめれば色彩として存してもよからうと思ふ如何。番兵を褒めてくれ手はないと思つて居たら飛んだ處から喝采が出て大に面目を施こす譯です。首斬りの段は一番面白いかね。僕自身はあそこが一番よく書けたとも思つて居らん。
倫敦塔で君を免職させるのは御氣の毒だから當分君を寐過させる様なものはかゝない積りに候。二月のほとゝぎすには猫の續きが出ます是は健康に害のある程のものではないから讀んで下さい。
先は御禮迄 匂々頓首

一月二十日

金

皆 川 兄
座 下

二二三

囚人が舟から上る所はわざと突飛にかいて驚かして見たのです。あれは突飛な所を買つてもらひた

二二三

明治三十八年一月二十三日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河盛町島津男爵邸内野間真綱へ〔自筆水彩畫繪はがき〕
織物到着難有候。あれは書齋の小机の上に敷て見たら丁度うまく一杯になつた。誂へた様で結構上等なり。あれは西洋物で全く支那物ではないと思ふ。I came up hand over fist, doing my five knots と云ふのは熟語ではあるまい。拳を握つてと云ふ意味ではないか「ノット」と云ふのはコブが出来るから云ふのではないか doing とはコシラヘルト云フ意味ではないか、猶よく考へて見様。
御禮旁御返事迄 匆々
Hand over fist ハ片方の拳を片方の手でつゝむ意味ではなきか

二二四

明治三十八年一月二十三日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井館皆川正福へ〔自筆水彩畫繪はがき〕
Coretti といふ字存じ申さず Correnti ト云フ以太利の政治家兼志士あれども綴が違ふ様なり。
僕の事を評するときは誰でも必ず上田君を引合に出す上田君は迷惑なるべし。あまり讀賣で學者の様に吹聴されると大學の講堂で講義がやりにくゝて困ります。白鳥子は一而識なき人なり先達で尋ねてくれた時は歌舞伎座へ行つて留守であつた。近い身より杯より却つて知らぬ他人の方が時々は買被つてくれるものに候。

君がほめたから倫敦塔を澤山書いて君を免職させ様と思ふがひまがなくてかけない。

二二五

明治三十八年二月二日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より仙臺市大町三丁目土井林吉氏へ〔自筆水彩畫繪はがき〕
〔上段に〕
君は僕の氣箴に驚くと云ふが僕は君の健筆に驚ろいて居る。此頃の文藝の雜誌に君の詩が載つて居ない事はない。何しろ大にやり玉へ筆硯萬歳可賀可賀
昨夜は雪 僕の前の家から火事が出て夜の間に焼けて仕舞つた。今朝起きて始めて知つた。雪中の火事は詩題になると思ふ。それを知らずに寐て居るのも詩になると思ふ

〔下段に〕
自分の肖像をかいたらこんなものが出来た何だ原が影が薄い肺病患者の様だ。君が僕を鼓舞してくれるから今にもつと肥つた所をかいて御目にかける現在の顔は此位だ

二二六

明治三十八年二月七日 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ〔繪はがき 表の署名には「千駄木 力學士」あり〕
漱石が熊本で死んだら熊本の漱石で。漱石が英國で死んだら英國の漱石である。漱石が千駄木で死ねば又千駄木の漱石で終る。今日迄生き延びたから色々の漱石を諸君に御目にかける事が出来た。是から十年後には又十年後の漱石が出来る。俗人は知ららず漱石は一箇の頑塊なり變化せずと思ふ。此故に彼等は皆

失敗す。漱石を知らんとせば彼等自らを知らざる可らず 這般の理を解するものは寅彦先生のみ
恐惶謹言

Dynamic Law

on

Mr. K. Natsume.

二二七

明治三十八年二月九日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ

手紙を度々難有う無精だからいつも返事を出さない先達は火傷をしたさうだ其時の俳體詩は一寸面白さ
うぢやないか一寸行き度いがつい色々ごたくして居るものだから失敬して居る。今日から三日間學校を
やすんだよ。別段病氣でもないがまづ病氣の心持で居るそれで萬事自ら病人風に所置する積りで畫は牛乳
と玉子で間に合せたら三時頃腹がへつて驚いた。矢張無病だと見える。まほろしの楯といふ文章をかゝう
と思つて大體趣向は出來たがうまく行きさうにない。僕は贅澤であの字はいや此句はいやと思ふものだけ
ら容易に出來ん苦しい。今日は朝からかく管の處を色々雑用で晩に一ページ許りかいたらどうも氣に入ら
んからやめた。出來上つたら見て批評してもらはう
傳四の二階の男はまだ見ないみんな何でも蚊でも書いてく世間を壓倒すればい、君も何でもい、から
やり給へ。

皆川君は倫敦塔はほめてくれるが猫は宗旨違ひだからだめだらう。猫の材料も出來たから又あとをかき
たいが閑がないから四月位にのせる事に仕様と思ふ 左様なら

二月八日夜十時半

眞 綱 様

金

二二八

明治三十八年二月十二日 午後一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ (自筆水彩畫繪はがき)

ホト、ギスの挿畫はうまいものに候御蔭で猫も面目を施こし候。バルザック、トチメンボト皆一癖ある
畫と存候。外の雜誌にゴロく轉つては居らず候。是でなくては自分の畫とは申されません。孔雀の線も
一風有之候。足はことよろしく候。あれは北齋のかいた足の様に存候。

僕の文もうまいが橋口君の畫の方がうまい様だ。
右御禮迄 匆匆

昨日は失敬。

二月十二日

金

淺井の口繪畫の百姓の足はうまいと思ふ如何。
君の裏畫の馬の首がねぢ切れさうに思ふが如何

二二九

明治三十八年二月十三日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ (自筆水彩畫繪はがき)

浅嘉町へ花を買に行つた留守に寺田さんが御出になつたといふから、もう病氣はよいのかと聞くとえ、と云ふ。なんでもう直つたのか馬鹿な奴だと云つてやつたよ。

浅井の口繪の百姓の足は非常に甘いと思ふ。橋口の挿畫は特長がある無暗に他の雑誌杯には載つて居ない。あれは慥かに橋口の畫で他人の畫ではない。僕は非常に感服した。僕の文章よりもうまい。どうかあれを新聞かなにかで評してやつてくれ、ばよい。然し僕の猫傳もうまいなあ。天下の一品だ。十錢均一位な所にはあたる。……時に續々篇には寒月君に又大役をたのむ積りだよ

三三〇

明治三十八年二月十三日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井館菅川正福へ (自筆水彩畫はがき)

君が大々的贊辭を得て猫も急に鼻息が荒くなつた様に見受候。續篇もかき度「い」杯と申居候。いづれ四月はホト、ギスが壹百號ださうですから其時迄に椽側で趣向を考へて置くと申す話です。日本文壇の偉觀は少々恐縮す「る」から御返却したいと申します。皆川さんは倫敦塔の様なものでなくては御氣に入らないかと思つたら吾輩の様なものも分るえらいと猫は大喜悅に御座候。同じ駒込區内にかう云ふ知己があれば町内の奴が野良と云はうが馬鹿猫と申さうが構ふ事はないと満足の體に見えます。此猫は向三軒兩隣の奴等が大嫌ださうです

三三一

明治三十八年二月十六日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藏中方野村傳四へ (はがき)

只今學校の歸りに七人を買つて二階の男をよんだ。サラ／＼とよくかいてある。強いて非難をすると一

篇の山がない。まとまりがわるい様だ。然し中々名作だ。大にやり玉へ。

三三二

明治三十八年二月十七日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元福町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

其後御無沙汰をしました。御變りもない事と思ひます。新年は御禮狀を頂戴したけれど今年はどこへも略したから失禮をしました。

先達てアメリカの傳ちやんがホト、ギス社へ宛て、態々美しい繪端書を送つてくれました。私は此繪葉がきが大すきで机の上へ置いて眺めて居ます。禮をいひ度が所が分らないからあなたにが此次手紙を出す時右の事をかいて禮をいつてくれませんか。これ丈の御願です 左様なら

二月十七日

金

渡邊和二郎様

三三三

明治三十八年二月二十二日 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藏中方野村傳四へ

君が虚子の所へ談判に出懸けたのは一寸驚いた虚子が既に廣告をした杯と斷つたのも驚いた。廣告杯はどこに出て居るかね。切角の御依頼だから七人へ何か書いて出してもらひ度が色々用事もあるし少しは本もよみ度いからうまく時日内に出来るかどうか受合ふ譯にもゆかぬ君から小山内君へさう話して置いて呉れ玉へ

先日寺田が七人を借りて行つて左の端書をよこしたから一寸報知をする

「○村○四さんの「二階の男」面白く拜見しました中々うまいものです。格別の山もなく谷もないかわりに厭味もなく近來兎角溜飲につかへる文壇には大に歓迎すべき一服の清涼劑であると考えます猫傳以來の出色の文字感服しました猶進んで二階の女か何かかいて貰ひ度者です。さうすると私も何か一つ「床下の狸」でも書く。洛陽の紙價が十四パーセントあがる愉快ぢやありませんか……」僕も猫のつゞきを書かうと思ひながらついまだ筆を下さない今度は實業家の妻君の事をかくよ左様なら

二月二十二日

夏目金

野村傳先生

座下

三三四

明治三十八年二月二十三日 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ 「はがき」

明後二十五日土曜日食牛會を催ふす 鍋一つ、食ふもの曰く奇瓢曰く傳四曰く眞柝曰く虚子曰く四方太曰く寅彦曰く漱石。午後五時半迄に御來會希望致候

二十三日夜

三三五

明治三十八年二月二十三日 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ 「はがき」

明後二十五日土曜日食牛會を催ふす、鍋一つ、食ふもの曰く傳四曰く奇瓢曰く眞柝曰く寅彦曰く虚子曰く四方太曰く漱石。午後五時半迄に御來會を乞ふ牛の外に何の食ふものなし

二十三日夜

三三六

明治三十八年三月四日 午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ 「はがき」

盾のうた面白く出來候最後の二句は不賛成に候。何とか改め度候。傳四丸一日をものし候よし。明星と七人は喧嘩をはじめ由。柳村宅で文士會合の節白鳥來り候よし 栗原古城といふ先生も其席上にありし由白鳥をひやかしたかどうだかあやしきもの也

三三七

明治三十八年三月五日 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

本日野間の家から君の原稿を二つ郵便で送つて來たから只今拜見したが満一日より月給日の方が餘程うまく出來て居る中々面白い。満一日はゴチャ／＼だ。同じ様な事が必要もないのに無暗に重複して出て來るあれをものにするなら諸々を削減しなくてはいかん。虚子が二三日中に來ると云ふから來たら意見を聞いて見やう

君が一月のホト、ギスを虚子にもらう筈にしたさうだが都合がつくなら僕にくれ玉へ深田文學士からたのまれたのだよ。猫傳は脱稿した。出たら讀んで下さい

二月四日

二三三

傳 四 先生

金

二三八

明治三十八年三月十一日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜呈明星御親切に御送被下難有存候早速教師の一日と申すのを拜讀致候前半教科書の譯を挿まれ候は御趣向に候へども小生には別段の感も無之只後半書齋中の出來事より食事、及び晚餐後の御相手の邊は甚だ興味を以て讀了致候小生の事を態々御推服の様に御記載被下候は難有仕合に候へども少々赤面致候人間に敬慕杯と申すは知らぬ昔に遠方から見た時のみかと存候釋迦も孔子も十年も同棲致候は凡庸の匹夫なるべきかと存候。是よりは再々御光來の上敬慕する漱石をうんあの漱石がといふ様に變化する迄御交際被下度候。敬慕とは遠慮と評判と未知とが重なり合ふとき發生する化物に候御高見如何に候や御禮旁妄言かきつらね申候御海想被下度候 早々頓首

三月十日

金之助

繞石學兄

座下

二三九

明治三十八年三月十一日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地葦中方野村傳四へ

昨夜キヨ子が來て君の月給日を見せたら面白くといつた但し前の方が餘慶な様だと云ふた。滿一日は時間がなくよむひまがなかつた。然し虚子は兩方とも持つて行つた。虚子が猫をよむ僕がきく二人でけらく笑つて御蔭で腹がへつた。

先〔は〕御報知迄 匆々
三月十日

金

傳 四 兄

妻君が夫の手をあたゝめる所は先達てはいけぬといつたが昨夜傍聽した所では大に振つて居る。毫も厭味も乙な色氣もなく出來て居る大に佳也。結末の「此事件は此で結了した」といふ意味の語は尤ももうまい。ちつとも洒落ても氣取つても居らん。極め〔て〕平凡極めて眞面目な裏に大に奇抜なとほけた様な馬鹿にした様な所がある。結構です。僕は全體からいふと二階の男より月給日の方がよいかんじがする

二三〇

明治三十八年三月十三日 午後三時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ〔はがき〕

繪端書頂戴致候寺田の宿所は小石川區原町鹽谷方に候哲學館の北方なり。寅彦は今日も來て文章を朗讀してゆきました。

二三三

明治三十八年三月十四日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ

本日七人を發行所から送つてくれたから君が小山内君に逢つたらよろしく禮をいつてくれ玉へ疵を探せばみんなあるだらうが皆僕よりうまい所がある後進の人が勢よくやるのを見て居るのは甚だ愉快だ。松浦の英詩杯も感心なものだ。ホト、ギスを見たかね。四方太の稻毛をもう一返よんで御覽何の奇もないが嫌味がない虚子の石棺は奇な代りにどこか不自然で嫌味がある。今の人はとかくあゝ云ふものをほめる。僕の倫敦塔をほめてくれるのも全くその爲である。巴の助といふ人のコマイ釣は面白い未段杯はことに振つて居る。小泉先生の文をよむ様だ。卷末の百號廣告は少々山師的だね。僕もあの位かつがれゝば澤山だ。尤もあれで人が讀んでくれなければ僕の名聲も地に墜ちる譯だなあ！

十四日

世間は存外靜かだのに虚子一人が騒いで僕を吹聴して居る様な氣色だハ、、、

傳 四 兄

金

寅彦の團栗はちよつと面白く出來て居る

明治三十八年四月一日 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

昨日は失敬

日向のくに都の城にて文學士一名千圓にて雇たき由心當りはなきや可成は英文學科の人を周旋したしと思ふ

尤も首席にて教育に經驗ある人を要する由也

四月一日

金

眞 綱 様

〔封筒の裏に〕

明日天氣無覺束

明治三十八年四月二日 午前十一時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ

ホト、ギスに出て居る碧梧桐の五形花といふのと、八千代さんの鶏鳴といふのを比較して御覽。五形花は渾然としてすこしも痕迹がない。作つたものとは思はれない。強いて人の感を挑撥しやう杯といふ拙な巧が見えない。あれをまづくかいたら毒々しいやなものになるにきまつて居る。趣味の正邪は此二篇を對照すれば分ると思ふ。才のある人が邪道に入つて居るのは惜しいものだ。

鏡花の銀短冊といふのを讀んだ。不自然を極め、ヒネクレを盡し、執拗の天才をのこりなく發揮して居る。鏡花が解脱すれば日本一の文學者であるに惜しいものだ。文章も警句が非常に多いと同時に凝り過ぎ

た。變挺な一風のハイカラがつた所が非常に多い。玉だらけ疵だらけな文章だ。僕杯のいふ事は門外漢の言葉として彼等は首肯しないだらう。然し僕はあの人々の才が悪い方へ向いて居るのを非常に残念に思ふばかりで一才君に洩らすのさ。君のは正路だから結構だ。此度のホト、ギスに出て居るのは皆面白い。虚子も、碧梧桐も、四方太、寒月先生も、君も、投稿のカルタ會もみんな面白い。ホト、ギス萬歳だ。

四月二日

金

傳四先生

二三四

明治三十八年四月四日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地敷中野村傳四へ〔はがき〕

傳四先生足下。昨日虚子が来て今月末に文章會をやりたいと云ふから引きうけて拙宅で催ふす事にした。君も何か持つて御出席下さい。

四月四日

二三五

明治三十八年四月六日 午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地敷中野村傳四へ〔はがき〕

君の丸一日を虚子が送つて来て曰く傳四君の文章一應御返草申上置候勢猛烈當るべからざる感有之候とある。原稿は君が来る迄僕が保管して居る

四月五日

二三六

二三六

明治三十八年四月十日 午後二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目十一番地大谷正信氏へ

拜啓昨日は御光來被下候處生憎他出失敬此事に御座候 目下小生知る人の中にて地方行志願の人は方の如くに候

一昨年卒業副島松一今四月迄宮崎中學にて教頭をつとめ居候人此男は至急片方ねばならぬ人に御座候 同年卒業撰科生堀川三四郎此人は今年四月迄宮城縣角田に奉職只今他の口搜索中。小生より廣島在中學へ紹介中なれど成否分りかね居候

第二は目下長野縣長野中學に奉職中の日野健四郎氏は矢張同年の卒業に候が郷里が香川縣故老母を迎ふる爲今少し便宜の地に轉任致し度希望に候

英文にては右三名丈承知致居候幸に大兄の御周旋にてどこかへ片づく事が出来れば幸甚に候一骨御折被下度懇願致候 勿々

四月十日

金

大谷賢兄

座下

昨日は四方太が来て一所に上野をぶらつきました

二三七

二三七

明治三十八年四月十三日 午前十時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區曙町森巻吉へ

拜啓先日は失敬君のくれた菓子に僕が大概くつて仕舞つた。小供もたべました。

君の號の事を考へても中々面白い奴は出ない。君の名は巻吉だから巻といふ字を二字にしたらよからうと思ふ。魔奇。馬奇。麻期。磨綺。等色々出来候。内海月杖といふ人は月末に困るから月杖としたさうだ。嵩山堂といふ書店は書物が高いからといふて徂徠がつけてやつたと云ふ。僕の號は蒙求にもある極めて俗な出處でいやになつて居るが仕方がないから用いて居る。僕も君の様に泥棒に這入られた綿入がなくて拾で少々寒いです。

先は閑用迄 匆々頓首

四月十三日

金之助

森 卷 吉 様

二三八

明治三十八年四月二十三日 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ [はがき]

繪端書拜見。来る二十九日土曜日文章會を開き候につき名文御携帶の上御出席願上候(但午後五時より)

二二九

明治三十八年四月二十三日 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ [はがき]

只今君の名文二篇を拜誦しました。皆々傑作結構です。つぎの土曜の午後五時から文章會を開くから名

文御携帶の上御來會願上候

二四〇

明治三十八年四月二十七日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎氏へ

御手紙拜見仕候此方も存外の御無沙汰御ゆるし下され度候拙作御懇篤なる御批評を蒙り難有存候大體に於て大兄の御考は正鵠を得たるものと存候盾は禮服塔は袴猫は平常服の喩尤も得吾意申候。盾の廣告は出鱈目ですよ。あれが出た時天下は安泰だのに虚子が獨りで騒いで居ると笑つた位です。先達て新小説に出た嬉劇は拜見しました。面白いと思ひます充分此方面で御盡力を願ひたいと思ひます。君の兄弟分は皆片づきました。みんなが片づく僕も安心する様な心持です。

君は結婚したさうですね。一寸御祝辭を申し上げ様と思つて遂々忘れて仕舞ひましたよ。

モリエルは君の繩張内だから僕より君の方が精しい譯ですが御尋ねの *La Comédie des Faucheux* は *The Comedy of the Bores* といふのでせう。ボアと云ふのは話しをしても面白くない欠伸がしたくなる様な厄介な御客さんや人間を云ひます。又は積極的に出しや張つて、うるさくて堪らんといふ様な人間も云ひます。夫から自分が世の中に厭き果て、酒も面白くない女も妙でない何もかも乙でけえせん杯と願を撫る様になつた心の状態もボアと云ひます。モリエルのは人間の意味の方でうるさい厄介者が澤山出て来て其が爲に迷惑をするといふ筋ぢやありませんか。たとへば君が新婚早々僕が君の家へ行つて五時間も六時間もくだらぬ事を話して居ると僕は君等御夫婦にとつて大ボアになる譯でせう。先此位な邊で御免蒙りますよ。モリエルに關する書籍は一向知りません其内見當つたら書いて上げます。さし當り一つ見付

けましたぐくだらぬものらしいですよ。

四月二十七日

若杉君

金之助

三三〇

二四一

明治三十八年四月三十日 午後二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區翠平町二番地朝陽館野間真綱へ

昨夜は五六人集つて十一時頃迄談話をしました。虚子は短篇を作つて来た。虚子一流の面白い處がある。僕は琴のそら音と云ふ小説を讀んだ。七人に出す積だから讀んでくれ給へ。

島津家の若様が病氣で君が看病に行く由。嘸御心配の事だらう。休學と事が極つても妹さんの方を教へて居れば當分困る事もないだらうと思ふがどうだらうさう云ふ談判にしたら約束期限内は何とかなりさうなものだと考へるがどうだらう

昨日君は野村の所迄行つたさうだから或はくるかも知れんと思つて居たいづれそちらの方で閑が出来たら來給へ

四月三十日

金

眞綱様

二四二

明治三十八年五月九日 午前九時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より愛媛縣温泉郡今出町村上平太郎氏へ

其後は存外の御無音奉謝候。先達は御用にて東京向迄御上りの處色々。用事の爲め御面晤の機を得ず遺憾。此事に存候拙文につき御批評たまはり難有拜讀致候。あんなものにては知人杯よりほめられると愉快なものに候。小生は教師なれど教師として成功するよりは、ボ文學者として世に立つ方が性に合ふかと存候。つき是からは此方面にて一奮發仕る積に候。然し何しろ本職の餘暇にやる事故大したものも不出來。只御笑ひ草のみ候。俳句は近頃頼と作らず時々短冊杯をよこして書けといふ注文杯參り候節は困却致候。松山に居た頃の事を思ふとまるで夢の様候。一度は又遊びに行き度感も有之候。道後の湯は實にうれしきもの候。筆硯の中常に俗塵を混じ起居常に倉皇寧處に違なき有様に候。御惘然可被下候。先は御返事まで 匆々頓首

五月八日

金

霽月老臺

座下

二四三

明治三十八年五月十二日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藏中方野村傳四へ

東京座も見たいが論文も見なければならん。英文科の諸君が大に力を奮つて作つたものをいゝ加減に見ては濟まん。中々面白いよ。二十五日迄に採點をすると云ふのだから夫迄に是非眼を通さなければならん。中々多いページを書いた人もあるから讀むのに骨が折れる。

東京座は右の譯だから今度は御免を蒙ります。諸君へよろしく願ひます。其内一所に御伴を願ひます。ド

三三一

ラマ會とはどんな會かね。先達文科の教授連が觀劇會をつくつたと聞いたが君の方は學生連らしい僕は其會に就ては今始めて聞くのですよ。左様なら。

五月十一日

金

傳四先生

僕は芝居を見て面白くなる迄には三十分かゝる漸く面白くなつたと思ふと暮になる。厄介な男さね

二四四

明治三十八年五月十八日

午後六時

本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ〔封筒まで未にて認めあり〕

本屋は君のところへ行くと言ふて居た。來たらよい加減に話をし玉へ。向のいふなり次第になつ

てはいけない。本屋はズルイ者だから減多な言をすると致される

看病面白く候余の意に満たぬ所朱點を施こして御再考を煩はす。直して今一遍御送りありたし。此兩三

句願くは今少し俗ならぬ、新しき、句にしたしと思ふ 如何

五月十八日

金

眞綱様

二四五

明治三十八年五月二十二日

午前零時十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地敷中方野村傳四へ〔はがき〕

御ほめに預かつて甚だ難有い。實は昨夜読んで何だか氣がぬけた様な氣合であると思ひ且つ「婆さん」

が不自然の様な感じがして居た所です。僕來客の爲めに卒業論文をよむ事能はず。時日は逼る。不得已明日と明後日缺講をすると松永へ注進に及んだ。今日は午後から高濱に招かれて能を見に行つた。君の小説

は出来る。寺田の龍舌蘭は出来る。野間皆川の兩君も新體詩をつくる。今度の文章會は大分賑かで面白い

だらうと楽しんで居る。僕も猫のつゝきが書きたい。

五月二十一日

昨日は野間と皆川が來て午過から夜迄遊んで行つた。七人を三冊くれたから兩人に一部宛やつた

二四六

明治三十八年五月二十六日

午前零時十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區小日向臺町三丁目七十一番地山縣五十雄氏へ〔はがき〕

拜復小生の文章を二三行でも読んでくれる人があれば難有く思ひます。面白いと云ふ人があれば嬉しい

と思ひます。敬服する杯といふ人がもしあれば非常な愉快を覺えます。此愉快はマニラの富にあつたよ

り、大學者だと云はれるより、教授や博士になつたより遙かに愉快です。小生は君の手紙を得て此大愉快

を得たのだから御禮は此方より申さなければならんと考へます 匆々

五月二十五日

二四七

二四三

明治三十八年五月二十七日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地敷中方野村傳四へ
高作拜見致候

丸一日杯よりはずつと上等に候。二階の男よりも遙かに小説的に候。最後の一節よろしき情景の處に候。あそこが一番詩的かと思ひ候。然し全禮の上から云ふと所々白玉の微瑕と云ふ様な點有之候。病がぶり返す處杯はぶり返した様に無之。當人が死ぬ所はまだ死にさうもなく候が如何に候や。今度は一字一句の間に餘程念を入れられたと見えて警句所々に散見致候。母の會話少々妙過ぎると思ふ所は二三ヶ所筆を入れ候が是は御容赦を願ひ候。今迄君の書いたもの、内で一番手間がかつたものと存候今前の七人の鳥の事が五六行かいてあつたのは甚だ小生の氣に入候。今度の感じは鳥の感じよりよろしくなく候 妄評多罪

五月二十六日

金

傳 四 兄

二四八

明治三十八年五月二十七日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地敷中方野村傳四へ 「はがき」
次回土曜六月三日午後正二時より文章會相開候間御出席被下度候。追て晩食を共にする計畫故御出缺の有無其前一寸御報知願上候
御高作可成御持參願上候。時間は可成正しく御入來願上候

二四九

明治三十八年五月二十七日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ 「はがき」
來る土曜日六月三日午後正二時より文章會相催し候につき御出席願上候。朗讀後晩食會を開き候間御出缺の有無前以て一寸御通知被下度候。時間は正に二時
先日の俳體詩面白く候今日虚子へ送り申候

二五〇

明治三十八年六月十一日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井館中川芳太郎へ 「はがき 表の署名に
「金やん」とあり」
先刻は失敬歌舞伎座行は色々故障で延引の處今度の火曜は僕の方であまり氣が進まなくなつたから僕はやめにして。いづれ此次でも御同行仕る事にしやう。左候へば君は朝から諸君と御詰掛可然。必ずく學校前にて待伏せ杯と云ふ手敷をやり給ふな。色々御心配を掛けた上でこんな我儘を云つては濟みませんか、まあ勘辨し給へ。
御令妹の御上京は別段悪い事でもないでせう。
僕今日胃がわるいが天氣もわるいから運動を見合せて居る。

二五一

明治三十八年六月二十七日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地敷中方野村傳四へ
貴翰拜讀玉稿の事につき虚子は君の所へでも來て意見を述べたのか。虚子が君の小説を持ちあつかつて居る居らんは暫く措く。彼がもし君の作に就て意見を述べに來たら充分意見を聞いて參考にするが必要な

り。君位の作は現今の文學雜誌に出して別段持て餘さるゝ程のものにあらず然し之を云々するのはホト、ギスであるからである。他の雜誌が歓迎さへするものを獨りホト、ギスが兎や角云ふとすれば其裏には何か曰くがなければならぬ。ホト、ギスの主張と趣味が一般と異なつて居ると云ふ事に歸着する。世間の人にはそこが呑み込めない。君も或は此點に關して一寸可笑しいと思ふ點があるかも知れない。若しさうであるならば是は好機會である充分虚子の意見を叩いて彼の一派の主義主張を聞いて置くのは充分参考になる。ホト、ギスは方今の文壇で獨毛色のちがつたものである。明星其他の文章家から見ればホト、ギスの文章は文章でないかも知れないがホト、ギス連から見ると明星流は又文章にならるのである。レトリックの說を参考して居るかも知れん。僕はどつちがいゝとも云はぬ然し君の文章に於る智識及趣味は色々な人ない男である長い系統の立つた議論も出來ぬ男である。然し文章に關しては一隻眼を有して居る。ある方面に癖して居るかも知れんが彼の云ふ所は理窟も何もつけずして直ちに其根底に突き入る斷案を下すに於て到底大學の博士や學士の及ぶ所でない。かゝる人の云ふ事は傾聴すべき價値がある。かゝる人にくさゝれたら其くさゝれた理由を知るのは作家にとつて寧ろ愉快である。虚子は今迄の所で小説家でも何でもない然し彼の小説に對する標準で現今の小説に對する考を遠慮なく云はせると小説らしい小説はないと思つて居る。此點に於て虚子も四方太も碧梧桐も一致して居る。彼等の注文に應ずる小説のないのは當人等自身がかゝない否かけないので分り切つて居る。然し世の中が鏡花をほめ風葉をほめ其他の小説家をちやほや云ふのに彼等が振り向いても見ないのは彼等が全然没趣味か又は一見識あるかに相違ない。是を探求するのも自作の上に多大な影響を生ずるに極つて居る。

文章は苦勞すべきものである人の批評は耳を傾くべきものである。たま／＼一篇を草して世間庸衆の譽を買つたとて毫も誇るに足らんのみか却つて其人をスポイルして仕舞ふのみだ。小山内の様なのは多少其氣味である。小山内がああ儘で通したつて立派な文學者にはなれないと思ふ。然しあゝなると到底他人の云ふ事杯は聞く氣づかひはない。君が虚子から小言をいはれるのは君に取つて結構な事だと思ふ。あの連中は無論缺點のある見方をするが。ある點から云ふと僕杯より遙かに見巧者である。僕は嚴酷な様で却つて大概の作に同情する弱點がある。是は自分がよく出來んと云ふ事に心が引かれるからである。

一の垣隣りがホト、ギスでどうならうとも構はん、僕は此際に於て君が文章に對する心懸に就て以上の希望を述べたのである。實は僕の家で文章會を開く事にしたのも多少此主意であつたが皆が遠慮するものだからついこんな事になつた。君と虚子の間に立て切つてある障子一牧^原をあげ放つて見よ。春風は自在に吹かん。妄言多罪

六月二十七日

金 生

傳 四 先 生

梧 下

二二二

明治三十八年六月二十七日 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より松山市松山中學校小島武雄氏へ

拜啓先達ては貴翰に接し拜讀御申越の件委細承知致候諸本年卒業の英文學士中吉松武通氏は去年は首座本年は二位にて成績可良其上大學入學前岐阜にて中學〔に〕教鞭をとり居候事とて經驗にも不乏本日同人

に相談致候處今治へ赴任の儀承諾仕候に就ては先方へ御推舉相成度右御返事迄申上候
卒業生成績發表の手間どりしと三年前の卒業生の他に移りたき志望のものを聞き合せ居りたる爲め返
書遅延不悪御海恕。

試験がすんだら來客にて忙殺せられ候追々暑氣に向ひ讀書も苦しく候御自愛專一に候 以上
六月二十七日

小島 武雄 様

夏目金之助

二五三

明治三十八年七月二日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ 「はがき 朱書、
署名には「先生」のみあり」

御 届

一 バナマ製夏帽 一

右者本日本郷唐物店にて相求め爾後カブツチあるき候間御驚きにならぬ様致度右御届及候也

二五四

明治三十八年七月十三日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ 「はがき」
龜拜見面白く候垣隣りよりあの方が感じがよろしく候。あれはホト、ギス向きか隣りの方は却つて帝
國文學むきと存候 以上

二五五

明治三十八年七月十六日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より名古屋市中川芳太郎へ
手紙を頂戴難有拜見しました其後君は大分勉強の由結構です何もする事がないとか外に面白い事がない
と勉強するものだから學者になるには君の様な境界が第番よと思ふ。交際が多かつたり女に惚れられた
りして大學者になつたものはない。
僕も勉強はしたいがいやはやの至りだ。一昨日迄は入學試験の監督を仰せつけられる。うちへ歸ると今
年卒業の諸先生が口の爲めに談判にくる。支那から友人が歸つてくる。新小説の社員が來て戦後の文壇に
對する所感をきかせろなかといふ。中學世界で世界三十六文豪を紹介するから沙翁を受持てといふ。中央
公論のチョイン先生がきて何かかけといふ。隆文館が來て猫を出版させろといふ。金尾文淵堂なるものが
何か出版するからかけといふ。而して來學年の講義は作らねばならず。明治大學の試験の答案は見なけれ
ばならず。そこへ持つて來て胃が悪いから眠くなる。本を讀むと批評的に讀むから少しも面白くない。作
中から自分の作の事を思ひつくから少しも抄取らず。ビヤホールへも行かないが晩にはよく寅彦先生や四
方太大人それから傳四君は無論奇瓢眞拆兩文豪も御出になる。是で大學で一人前の事をして高等學校で一
人前の事をして明治大學で三分一「人」前の事をして文士としても一人前の事を仕様といふ圖太い量見だ
から到底三百六十五日を一萬日位に御天と様に掛合つて引きのばして貰はなくつちや追ひつかない話しさ。
先達日本新聞がきて何でも時々かけといふから。僕もつくづく考へたね。毎日一欄書いて毎日十圓もくれ
るなら學校を辭職して新聞屋になつた方がいゝと。然し是は日本新聞で承知する譯のものでないから矢張
り赤門の中で妙な事を云つて暮らす積りです。然し猫をかいて先月十五圓貰つたから早速バナマの帽をか

つて大得意で被つて居る所などは随分小供の様だ。然るに先日友人が支那から歸つて来て同じくバナマの帽を被つて居る然も僕のよりずつと上等であるのを見て猫をかくより支那へ出稼ぎをする方が得策だと思つた。

不平をいふと人間は際限がない僕杯も不平だらけだが妙なもので不平ながらピン／＼實在して居るから不思議だ。今にハムレット以上の脚本をかいて天下を驚かせ様と思ふがいくらえらいものをかいても天下が驚きさうにもないから已め様とも思ふ。以上

七月十五日

金

中川先生

二五六

明治三十八年七月十七日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎氏へ

尊翰拜誦御問合せの件は別紙にかいて差し上げます。是で御間に合ひますか知らん。君はモリエルの專問家になつてモリエル全集の翻譯と云ふ奴を御出しなさい。僕は翻譯は嫌だ。骨が折れる許りで思ふ様にうまく行かない者ぢやないですか。ホト、ギスの猫の一二は此正月と三月の號だと記憶して居るが兩號共賣切れて一部も残つて居ません。皆川のソラブトラスラムあれは御意に逆ふ様だが面白くない小生は一二頁讀んで御免蒙つたです。僕なんかは矢張先生の俳體詩の方がいゝ。元來今の新體詩と云ふ奴は言葉許り飾つて何を云つてるのか分らないのは閉口します。あんなものより。平々凡々調で趣味のある嫌味のない事を歌ふ方が洒落て居ますよ。一體小説でも新體詩でもいやにしつこい、あぶらこい奴が流行するのは時

節柄胃囊へ納りきれません。僕米が食へれば教員をやめて明治の文士とすます所ですが此様子では猫の續きもかけさうにありません。失敬

七月十七日

金之助

若杉モリエル様

二五七

明治三十八年八月三日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國大磯町北本町田村屋野村傳四へ〔はがき〕

『垣隣りで七圓龜の子で五圓都合十二圓では心細いなあ。あすこに白百合が見える。一つ白百合と云ふ題でかゝう。是が十圓か。うまい事に氣がついた』

八月三日

二五八

明治三十八年八月四日 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國大磯町北本町田村屋野村傳四へ〔はがき 表の署名に「こまる先生」

とありし

事業如山多く時間かくの如く短かし僕が二人になるか一日が四十八時間にならなくて〔は〕到底駄目だ。猫も何も書けさうにない。圓左會へも行かれさうにない。岩崎が避暑にきて居るならよろしく。

神泉は出ない方がいゝ。僕の筆記杯は何がかいてあるか分らない

千駄木は不相變豚臭くて厄介だ。

二五九

明治三十八年八月六日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模岡大磯町北本町田村屋野村傳四へ〔封筒の名宛に「野村傳四先生」あり、裏に「東京は本郷區駒込の千駄木夏目金之助なる者より八月六日」三行に認めあり〕

一寸申上げますが

あなたの浴場スケッチは第一第二ともうまいものですあ、云ふ奴がつくと名文が出来ます、あ、云ふ呼吸を飲み込んだ人は名文家です、従つて君も名文家だらうと思はれます。今の文章家といふのは心算がわるいと思ふ。あれはあれ丈でよいから長いものであ、云ふ山をこしらへ玉へ。神泉は出た巻末の本郷座の合評は當時愚なものだと思ふたら中々面白いぜ。岩崎に逢はなければよろしく云はんでもよろしい。序ながらあの別荘を作るに何圓か、つたか一寸取調べて頂きたい。風葉先生は此前もツルゲネーフか何かを濟して自作の如く御吹聴に相成つたのだから今回の荒野のりやも御驚きになる事はない。人殺しも毎日あると平氣になるものだ。今の世は度胸が大事ですよ。然し僕はその所謂荒野のりやなるものを拜見仕らんのだがね。十頁許り讀んで何でも西洋物と氣がついたが興が乗らんから御やめにした其代り山岸荷葉君の藥屋の若旦那といふ奴を通讀したがあの若旦那の言葉は頗る氣に入つたね。僕の細君の妹の亭主に工學士が居てね、其工學士先生がまるであの若旦那だから餘程僕は愉快によんだ。僕春陽堂から反物一反を頂戴仕つた戦後文壇の趨勢は遠からず單衣に化ける事と存じて居る。神泉に出て居る梨雨先生の春の夜と申す新體詩を御覽下さい。あれは往來を色眼ばかり使つてあるく女學生位な程度だ。其他色々あるが御やめ。寒月君は葉書のつゞきもの、小説をよこす。何でも夫婦の中に子なきを憂ひて大磯へ貝を食ひに行くと

云ふ趣向だがね。頗る振つたものさ。是はゾラ君の翻案ださうだ。

八月六日

傳四先生

金

二六〇

明治三十八年八月七日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鉄太郎氏へ 拜啓御歸朝後一寸機會なく御面語の折なく打過候處愈御清穆奉賀候

借今回ホト、ギス所載の拙稿を大倉書店で出版致し度と申すについては其内に挿畫を入れる必要有之之を大兄に願ひ度事小生も書肆も一樣に希望につき御多忙中甚だ御迷惑とは存じ候へども御引受け被下間敷や實は製本も可成美しく致し美術的のものを作る書店の考につき君の筆で雅致滑稽的のものをかいて下されば幸甚と存候猶委細は此手紙持參の番頭より御聞取被下度條件も同人と御とりきめ願候 以上

八月七日 〔封筒には八月八日あり〕

中村不折様

夏目金之助

二六一

明治三十八年八月九日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模岡大磯町北本町田村屋野村傳四へ 〔はがき 裏の「田村屋力」の下に括弧して「岩崎男爵様御別邸傍」とあり、署名に「空氣風呂發明者」とあり〕

二六二

拜啓今日晴天大風にて障子を立て切り密室内にて空氣風呂に入浴仕候處至極工合宜敷早々御歸京の上御
試験相成度先は右御案内迄 匆匆頓首

二六二

明治三十八年八月九日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ 〔はがき〕
昨夜は失禮致候其節御依頼の表紙の義は矢張り玉子色のとりの子紙の厚きものに朱と金にて何か御工夫
願度先は右御願迄 匆匆拜具

二六三

明治三十八年八月十日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より赤坂區青山南町一丁目五十五番地板尾内野間眞綱へ 〔はがき〕
雨になろかと 君待つ宵は
雨ともならで ほとゝぎす
君しまさずば 寐たものを
あの曉の ほとゝぎす
これは下手だ君の方がうまいあれを仕舞迄御かきなさい
十日

二六四

明治三十八年八月十一日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より名古屋市西瓦町百〇五番戸中川芳太郎へ

宮津の御祭の手紙拜見。田舎の事がどうも面白い。御婆さんの鶏は氣の毒だよろしく云つてくれ玉へ。
東京は雨ばかり降つて閉口の處二三日前から大分熱くなつて晴天。熱いときに汗をかいて家の内にうんう
ん云つて居るのは乙なものだ何だか俳味があると思つて済してゐる。皆川は歸省、傳四は大磯へ避暑寅彦
も歸省。僕のうちへくる定連は大分減つたので少々日の長い様な氣がする。ところが來年の講義が氣にか
かつて義太夫の文句ぢやないが食ものんどへ通るまいと思ふ程でもないが實際大學がいやになつて仕舞つ
た。先日厨川が来てベーターの本を借せと云ふて持つて返つた。船へ乗つて月を見て美人の御酌でビール
が飯みたい。神泉といふ雑誌の小澤平吾と云ふ先生が来て月見に來いと云ふたが是は御免蒙る。日比谷へ
音楽堂が出来た。何だか六づかしいプログラムでやるぜ。傳四は大磯から毎日スケッチをよこす。あれは
君無暗に筆まめな男だ。僕本屋の請に應じて猫を出版する二百八十頁位になる。うつくしい本を出すのは
うれしい。高くて賣れなくてもいゝから立派にしろと云つてやつた。何で「も」挿畫や何かするから壹圓
位になるだらうと思ふ。到底賣れないね。うれなくても奇麗な本が愉快だ。あとは追々

八月十一日

夏 金

中川芳太郎先生

二六五

明治三十八年八月十九日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區菊坂町第一菊富士樓高田知一郎氏へ
拜啓
先日新潮社の高須賀淳平といふ人が來ましてね、一夕雑談をやつたら、先生すぐ是を文章にして「みづ

まくら」夏目漱石など、號して此度の新潮へ載せたんですがね。其内に神泉に出た君の春の夜といふ新體詩の批評がまぐれ込んで居るが夫で見ると何だか君を故意に罵詈した様で甚だ恐縮の至ですがね。是は淳平君の口氣が少々悪るので僕の主意ではないのですよ。あんなつまらない話をこんな口調で載せ様とは思はなかつた。かうなつては僕から君にあやまるより仕方がない。どうか御勘辨下さい。尤も春の夜の悪口は少々申しましたよ。

新潮を一部御覽に入れます。他日御面會の節は改めて閉口します。

夏目金之助

梨雨先生

明治三十八年九月五日 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ〔はがき〕

此前の日曜には四方太と上野の日月會を見て根岸の岡野から中村不折の家へ行つて晩は若竹へ朝太夫をきゝに行つたので失敬しました花の本懐かに落手君の鮎つりは何だか調はぬ感じがある尤も面白い所もあるから再考してはどうだ。神泉はえらいものだ。梨雨先生のダンテはうまい。あとは多忙でよまない。「一夜」の批評難有拜讀あれはだれもほめてくれ手があるまいと思つて居た。秋風が吹き出してから好い気分だ。香氣な身分になつて遊山でもしてあるきたい。學校が始まるのは何よりいやだ。草々僕の神經は學校に適しない様に出てくるんだらう。

明治三十八年九月十一日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町吳井館中川芳太郎へ〔はがき 表の署名に「金やん」とあり〕

昨日は野間と野村とが朝から来て晝飯を食つて居たら寅彦が来て四人で神山へ行つて寶亭で晩食をしました。寅彦君が奢つた。中々金持だ。「一夜」の批評拜見大變なほめ方で少々恐れ入つた次第然し悪口されるより愉快です。今日高等學校へ行つたら畔柳がわからないと云ふた〔か〕ら。わからんでも感じさへすればよいのだと云ふた。芥舟先生は少しも感じて呉れないらしい。して見ると君なんかは天下の知己ですよ。

明治三十八年九月十一日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町吳井館中川芳太郎へ

只今三重吉君の一大手紙を御送りに相成早速披見大に驚かされ候。第一に驚ろいたのは其長い事で念の爲め尺を計つて見たら八疊の座敷を豎にぶつこぬいて六疊の座敷を横に横斷したのは長いものだ。あれ丈のものがかけるなら慥かに神經衰弱ではない。休學などは思ひも寄らぬ事だ。早速君から手紙をやつて呼び寄せ玉へ。僕は來週からなくては講義をはじめない外の先生も大概そんな事だらう是非出京し玉へと云ふてやり給へ。たとへ只ぶら／＼學校へ出たり出なかつたりして居ても夫で澤山だ。休學した積りで東京に居るがよろしい。親が病氣で一日も早く成業して見せ様といふものが一年間休學する理窟があるものか一日も早く卒業するのが義務である。是は君から是非手紙で云ふてやつてくれ玉へ。僕の考だと云ふてくれ玉へ。何でもかんでも學校に籍さへ置いて居れば自然天然と文學士になる所を休學なんてつまらない。出て来て方々遊んであるいて時々金やん先生の家杯へ遊びに來れば神經衰弱なんかすぐ直つて仕舞

ふさ。

それから次に驚ろいた事は三重吉君が僕の事をのべつにかいて居る事だ自分のおやぢの事より僕の事が餘程長くかいてある。あの手紙が三間の長さとする二間は慥かに金やんの事で埋つて居る。僕の様な人間が學生の一人の頭腦を是程迄にオキユバイして居るとは夢にも考へなかつた。あの手紙を讀むと三重吉君は僕の事を毎日考へて神經衰弱を起した様に思はれる。僕が十七八の娘だつたら。すぐ様三重吉君の爲に重き枕の床につくと云ふ物騒な事になるのだが幸ひ吉原から買つて來た油壺なんかを乙がつて居る金やんなので、こつちにとつては藥代も入らずに濟みさうなのは先以て結構合せの至りである。然しいくら漱石だつて、金やんだつて、講師だつて、髭が生へてたつて、三重吉君からこれ程敬慕せられて難有(く)思はんといふ次第のものではない。難有いなどは通過して恐ろしい位だ。三重吉君は僕の細君杯より餘程僕の事を思つて居るらしい。然もそれが學資を貢いだと云ふのでもなし周旋をしたと云ふのでもなし。金を貸した事は無論ないのだから一層難有いと云はなければならぬ。僕は是で中々自惚の強い男だからあつた人には好かれて然るべき性質を有して居ると自信して居るがね。然しあれ程迄に敬慕され様とは氣がつかなかつた。あれは己惚以上だよ。豫期を超過する事五十六倍だよ。元來人から敬慕されるとか親愛されると急に善人になりたくなるものだ。敬慕親愛に副ふ丈の資格を一夜のうちに作りたくなるものだ。僕も今夜は急に善人になりたくなつた様な氣がする。天下の人がみんな三重吉君の様に僕を敬愛してくれて居たら僕は今頃はとくに孔夫子か基督か乃至釋迦牟尼位にはなつて居るよ。恨むらくは氣に喰はない馬骨野郎が充滿して居るのでかやうの次第で遂には三重吉君の好意にすら負く様な譯に相成るのは汗顔の次第だが考へると是は僕のわるいのではない馬骨野郎のわるいのだから三重吉君の想像する如き好人物でなくて切角の豫期を失望させても是は僕の責任ぢやないから其邊の所は篤と三重吉君に斷つて置いてくれ玉へ。

三重吉は蝟壺をくれる筈の處壺を括つた繩が切れて御ぢやんと相成つた由甚だ遺憾の至だが金やんも其好意に對して何か進呈しやうと思ふが別段勸業銀行の債券にも當らん事だから思ふものも差し上げる譯に參らんから。近日出版の吾輩は猫である一部を謹呈する事に致すから是も御報知を願ひたい。

三重吉は僕を愛するとか敬ふとか云ふ外に僕は博學だとか文章家だとか良教授だとか云ふて居らん。そこで君の僕に對する親愛の情は全くパーソナルなので僕自身がすきなのだと愚考仕る。そこが甚だ他人と異なる所で且甚だ難有い所である。だから僕が「吾輩は猫である」を獻上するに就ても猫の文章を讀んでくれろとか滑稽を味つてくれろとか云ふ考で獻上するのではない。單にパーソナル・アツフェクションを表する微意であるから是も序に御傳言を願ひたい。

あれ丈長く僕の事をかいて居り又あれ丈僕の事をほめて居るが少しも御世辭らしい所がない。昔の文章家の様にウツらしい文句がない。誇張も何もない。どうしても眞摯な感じとしか受取れん。是が僕の三重吉君に尤も深く謝する所である。

あの手紙は僕がこの手紙と同じくなぐりがきにかき放したものであるらしいが頗る達筆で寫生的でウツがなくて文學的である。三重吉も文章をかいて文章會へでも出席したら面白いと思ふ。

右御撈揆迄に草々認めた許りであるから前後亂雜で讀みにくく、解しにくいと思ふがどうか僕の云ふ事丈を三重吉君に傳へて下さい。尤も望む所は一年間川舎へ引籠るのをやめて出京する様に勸めて下さい。僕には三間の手紙をかく勇氣がないから是で御免を蒙ります。實際三重吉君より僕の方が神經衰弱さ。親分が大神經衰弱だから子分は少々神經衰弱でも學校へ出るがよからう。

九月十一日夜

金やん

芳太郎様

二六九

明治三十八年九月十二日 午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地飯中方野村傳四へ〔はがき〕

傳四先生。僕は今週休んで來週から開講と致す積りだから此旨を一寸聴講の諸君子に報知してくれ玉へ。むだ足をさせるのも氣の毒と思ふ。

十二日

二七〇

明治三十八年九月十六日 午後九時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町吳井館中川芳太郎へ

一寸申上ます。昨夜來客があつて歸らうとする帽子がない。玄關にあつた小生のゴム製の雨具がないよつて泥棒だらうと云ふ鑑定であつた。

所が夜更に及んで月を見ながら椽の下をのぞいて見たら君から來た三重公の手紙を入れた状袋がある。而して中身がない。して見ると是も泥棒君の所爲だと思ふ。三重吉君が三間餘の手紙を天下の珍品と心得て持つて行つたとすれば此泥棒は中々話せる泥棒に相違ない。然し君の所へ來た手紙を僕がぬすまれて平氣で居る譯にも參りかねるによつて一寸手紙を以て御詫を致す譯だがね。どうか御助辨にあづかりたい。向後氣をつけると申したいが僕の家は是より氣のつけ様がない。氣をつけるなら泥棒氏の方で氣を付けるより仕方がない。尤もあんなうつくしい手紙を見たら泥棒も發心して善心に立ち歸るだらうと思ふから其内手紙も自然どこかへ戻るかも知れない。戻つたら正に返上仕るから左様御承知を願ひ度い。先は古今

未曾有の泥棒事件の顛末を御報に及ぶ事しかり。是で見ると今迄も色々なものが紛失して居るのかも知れんが少しも氣がつかない。随分物騒な事だ。此つぎは僕の書齋を焚き拂ふかも知れない。泥棒が講義の草稿を持つて行つたら僕は辭職する譯だが泥棒君も中々仁惠のある男だ 以上

九月十六日

夏 金

中川先生

二七一

明治三十八年九月十七日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士町四丁目八番地高濱清氏へ

啓上文章會開會の講敬承仕候小生も今月末迄には猫のつゞきをかく積りに候會日は九月三十日が土曜につき同日午からとしたら如何かと存候。就ては會場の儀今迄小生宅にて催ふし候處細君アカンボ製造中に随分難儀さうに見受候に就ては今度は一寸御免蒙りどこかほかへ持つて行き度と存候會員の宅でなくとも貸席杯可然か是は御撰定にまかせ候。さうなると公然會費を徵集する必要相生じ候。さうなると出るものが少なくなると存じ候。又報知の御手数數も大兄を煩はす方がよくなつて參り候。以上につき御考如何。一寸伺上候。

毎日来客無意味に打過候。考へると己はこんな事をして死ぬ筈ではないと思ひ出し候。元來學校三軒懸持ちの、多數の來客接待の、自由に修學の、文學的述作の、と色々やるのはちと無理の至かと被考候。小生は生涯のうちに自分で満足の出来る作品が二三篇でも出来ればあとはどうでもよいと云ふ寡慾な男に候處。それをやるには牛肉も食はなければならず玉子も飲まなければならずと云ふ始末からして遂々心にも

二七二

なき商買に本性を忘れるといふ頭末に立ち至り候。何とも残念の至に候。(とは滑稽ですかね)とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さへ出来れば夫丈で天に對しても人に對しても義理は立つと存候。自己に對しては無論の事に候。

「一夜」御覽被下候由難有候。御批評には候へどもあれをもつとわかる様にかいてはあれ丈の感じは到底出ないと存候。あれは多少分らぬ處が面白い處と存候。あれを三返精讀して傑作だといふてくれたものが中川芳太郎君であります。それだから昨日中川君と傳四君に御馳走をしました。尤も傳四君は分らないと云ふて居ます。

九月十七日

金 生

虚 先生

俳佛の御説教中々面白くかゝれ候

二七二

明治三十八年九月二十四日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ

拜啓風邪にて御臥床のよし嘸かし御退屈の事と存候たまに病氣にかゝるのは一寸洒落たものに候へども發熱甚しくと有つては随分御苦しみの事と存候近ければ水菓子でも御見舞に差し上げる所だがあまり遠方だから其にも及ぶまいと思ひ差控申候。小生日々來客責めにて何を致すひまもなく候然し來客の三分二は小生にインテレストをもつて居る人々だから小生の方でも逢ふとつい話しが長くなる次第必竟自分で來客

を製造して自分で苦しんで居るに過ぎぬ愚見に候。夫故心ばかり狼狽して仕事は一向出來ず愛想がつき申候。學校をやめたら作家になれるだらうなかと己惚るのも矢張り本來の愚見かと存候。只今中川が参り長らく話しをして返り候。橋口の母は死去のよし氣の毒と存候一寸尋ねたいと思ひ候へども是も右の事情にて果さず候。當人甚だ寂寞を感じる由申來候。中學校教師の件病中態々難有候早速心當りへ報知可申候。佐治はどうか口にあつきさうに候。濱武は横濱へ参り候。金子と申す人に相談致さうかと存候 先は御攝養專一に候。病氣で何か不自由な事があるなら手紙で遠慮なく御申聞可被成候 以上

九月二十三日

金

真 綱 様

二七三

明治三十八年九月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より皆川正福へ

昨日は二三人の來客あり後寺田寅彦のすゝめにて上野から谷中あたりを逍遙致候留守中御來訪失禮致候暫らく御目にかゝらず候處不相變御機嫌の事と存候小生何だか陸へ上つた魚の如く喘々として消光一寸免職になつて半年許り休養が致度候

佐治君は浦和中學に内定野間は風邪で寐て居ます中川は眼病で眼鏡をかけて居ます傳四はのんきな事をいつて居ます白馬會の出品は大概前年の舊作ですこれと申感服したものはありません 近頃は創作をやるひまがないので何だか筆が動かない様な氣持です 其内御面會の上萬縷 草々 (うっし)

二七四

明治三十八年十月二日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎氏へ

拜啓先達御質問の件は多忙にて御返事を怠らつて申譯がない

コルネイユと申す先生の作は自慢ぢやないが一つも讀んだ事がない。此分では生涯讀む事はなからうと存じます。そこへコルネイユが出て来たから大恐縮で手紙をポケットへ入れた儘にして置くと昨日三年生の中川芳太郎と云つて博學の男が来たから君コルネイユを讀んだかいと聞いたら讀みはしませんが學校で調べて上げて宜しう御座いますと云ふから難有い是非願ひ度と君の手紙を渡しました處今朝中川君は別紙の通デコ／＼な佛文をかいて來ました。夫を早速君の方へ廻しますから御讀み下さい。

夫からアンドラインのある所はね

Lag. サア金を茲へ置くぞ

Mol. わしの金も茲にある十兩は現金但し九十兩は on Anyuta (on Anyuta ト云ふのは僕にも分

らない)

Lag. よろしい

Mol. 異存はない

位な所でせう。よく分らない 先は右川事迄 勿々頓首

十月二日

金之助

若杉様

二七五

明治三十八年十月十一日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ

君塚の一夜面白く拜見致候。少々主客の言語動作が故意にひねくれて居る所が厭味に候。たとへばにらめなくてもいゝのに河童の晝をにらめたり仰ぐ必用もないのにバイロンの像を仰いだりする事に候。其他の光景は甚だよろしく候。會話は少々文句有之候。あれは連句文にあらためた方がよからんかと存候。他の儘では會話としてあまり振はざるのみか僕の「一夜」中の會話を強いて真似た様に思はれ候。兩人が對座して連句をやつて居るやうに少し直して見ましたこんど見せます。

僕來客に食傷して來客が大嫌に相成候當分こない事に御きめ被下度候

猫出來一部一兩日中に進呈致候

十月十日

金

真綱様

二七六

明治三十八年十月十一日 午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井館中川芳太郎へ (はがき)

猫を二重吉君に送つて下さい。僕は猫を二十二部もらつた。金はまだ一文ももらはない。近來來客に食傷して人が嫌になつたから當分きてはいけません。手紙はいくらでも頂戴

十月十一日

明治三十八年十月十二日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

御手紙は拜見しました休學の件も萬不得已事情ありての事なれば却つて出京を御勧めして一時でも考へ
返したのは甚だ恐縮の至です。

休學中々學の教師といふけれど教師杯をしては神經衰弱が起る許りで決して休學にはなりませんよ。夫
も手近に面白い口でもあれば格別ですがさうでなければ矢張り島へ渡つて遊んで居る方がいゝ。僕も時が
あれば小笠原島位へ一寸流されて見たい。兩三日前猫が出来ましたから君に一部あけやうと思つて中川君
に托して置きました今頃は届いて居るでせう。近來來客が無暗にあるので大に人間がいやになつたから五
六人に手紙を出して當分來てはいけないと通知をしましたら。其通知を受けた一人の寒月君が通知を受け
た翌日すぐやつて來ました。是では切角の通知も役にたゝない譯です。中川君も此通知を受けた一人です。
小生も君の様に敬慕してくれる人があると大分えらい様ですが裏の中學生や前の下宿のゴロツキから馬
鹿にされる所を見ると一文の價値もないグータラですよ。世の中は妙なものであります。小生も大學を一
年休講して君と一所に島へでも住んで見たい。 頓首

十月十二日

鈴木三重吉様

金

明治三十八年十月十四日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ (はがき)

拜啓するめ頂戴難有候。僕は猫君はするめ各商買道具で贈答をするのは一寸面白い譯ですな。此次ぎ何
か書いて一本を献上する際にはどうか正金銀行の株券を下さい。

十月十五日

東京本郷駒込千駄木町五七

夏目金之助

明治三十八年十月十九日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區竹早町百二十番地愛知社内中川芳太郎へ

御手紙拜見、加計先生御出京のよし、田舎へ這入つて適意の書を読んで暮らせれば夫が人間の最幸福だ
と思ふ。そして年に一度東京へ出て來て遊べば猶結構だ。僕の音を蓄音機に詰込む事一向差し支無之。然
し詰め込むなら詰め込む的の文句か音聲がよからうと思ふ。不幸にして歌もうたへず詩吟も出來ず只平生
の駄辯より外に能のない人間だから困ります。僕來週は學校の行軍だからひまになる。(僕は行軍へ出た
事はない)遊びに來給へ。加計君が其時迄居るなら一所に御出なさい。

今日高等學校で一人の學生を大きな聲でしっかり付けてやつた。さうして全級にこんなに出來ないと皆落
第だと宣告した。こんな人々は生涯僕の聲をきくのが厭だらう。廣島から漱石の聲を詰めに來たと聞いた
ら吃驚して目を舞はすだらう。 頓首

十八日

金

芳太郎様

二八〇

明治三十八年十月十九日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より愛媛縣温泉郡今出町村上平太郎氏へ〔はがき〕
霽月先生の芳墨を誦する事前後二回。此頃は應答の句も出来ぬ始末なるを深く慚づ。媾和約成り、天下
太平、英艦來泊、素貧如故、秋氣入衣 頓首

二八一

明治三十八年十月二十日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本市内坪井町百二十七番地奥太一郎氏へ
尊書拜見仕候其後は乍存つい御無沙汰に打過中候熊本も其後大分移動有之候の様子奈須川君には當
地にて一寸面會致候山縣君入學は小生の尤もよろ〔こ〕ばしく思ふ所に御座候熊本も永く居ると存外あき
る所に候が大兄の如き人は始終一日の如く御勤めにて敬服の至に不堪小生如きはどこへ参つても教師がい
やで生涯覺れない剛突張に候人は大學の講師をうらやましく思ひ候由金と引きかへならいつでも譲りたく
と存候御令嬢御誕生の由結構に候中々容易に生長仕らざる様ながらズン／＼のびて行くには一寸驚く事も
有之候小生はあとから小供に追ひかけられ居候氣持に候。近來非常の多忙先達中杯は來客ばかり日々兩三
名も引き受け實に閉口致し候爲め五六人に手紙を出して當分來てはいけないよと中候處其翌日其一日がす
ぐ参り候

高等學校は樂なものに候小生は高等學校で食つて餘暇に自分の好きな事を致し度と存候。舎監杯は一日
も致すべきものに無之と存候第一高等學校は熊本より大分氣樂に御座候同僚の家杯へ参りたる事無之先方

よりも参りたる事無之候。大學も其點は頗るのんきななるものに候。

閑窓に適意な書を讀んで隨所に山水に放浪したら一番人生の愉快かと存候

小生は教育をしに學校へ参らず月給をとりに参り候。自餘の諸先生も正に斯の如くに候。以上

十月二十一日

金 生

奥 太一郎様

二八二

明治三十八年十月二十三日 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町二丁目二番地渡邊和太郎氏へ〔はがき〕
今日は觀艦式に御招待を蒙つてありがた〔く〕御禮を申します。小生も一寸参りたいが漁車が非常に込
み合ふだらうと思ふのと今一つは八時前に尊宅に伺ふ勇氣がないので失敬します。あしからず

二八三

明治三十八年十月二十九日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村純太郎氏へ

拜啓かねて御面倒相願候「吾輩は猫である」義發賣の日より二十日にして初版賣切只今二版印刷中のよ
し書肆より申來候。是に就ては大兄の挿畫は其奇警輕妙なる點に於て大に賣行上の景氣を助け候事と深く
感謝致候拙作も御蔭にて一段の光輝を添候ものと信じ改めて茲に御禮申上候 以上

十月二十九日夜

金

二五九

二五八

不折畫伯 座下

二八四

明治三十八年十一月一日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ〔繪はがき〕
拜啓本一日廣島の柿と嚴島の貝を頂戴。御心にかげられわざ／＼御送り被下難有存候。
先達加計君がきてとう／＼僕の音聲を蓄音機へ入れて歸りました。
東京は東郷大將の歡迎會やら、ブライアンがくるやら中々賑ひます。
小生は不相變胃病。晚餐を食ふとぐう／＼寐て仕舞ひます。是で大學の教師が勤まるかは頗る疑問です。

二八五

明治三十八年十一月三日 午前零時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地葦中野村傳四へ〔はがき 宛名に「野村傳四先生」ごあり、署名に「夏目先生」ごあり〕
中央公論が出たから是非買つて読んで而して褒めて頂戴。本日本郷の雜誌屋で文庫の六號活字を見たら「夏目漱石の吾輩は猫である大牧壹圓、金が餘つて困つて居る人でなければ買ふべからず。くれても讀むのが惜しいや」とあつた。此六號活字先生は買ふ事も出來ず賞ふ事も出來ないのだらうと思ふ。依つて二版が出來たら一部獻上し様と思ふがどうだらう。烏みづ先生へ宛て、やればよからうと存するが如何。

二八六

明治三十八年十一月三日 午前零時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ〔はがき〕
頂戴仕つた柿を其後食つて見た處非常に旨いですよ。毎食後に一つ宛たべます。家内のものもたべます。貝は小供がおもちやにして居ます。

餘は後便
加計君によろしく
あすは天長節で休みです。うれしい。

二八七

明治三十八年十一月五日 午後六時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より神田區三崎町三丁目一番地前田儀作氏へ
拜啓高著夏花少女御惠贈にあづかり難有拜受仕候只今少閑をぬすんで一氣に讀了致候小生は多く新體詩と申すものを讀まず詩集を通讀致し候は大兄の御作を以て始めと致候。多く此種の文字に接せざる爲め所難解の所有之候へども全體の上に於て妖麗瑰琦の感を生じ候爲め不少愉快を覺候。御返禮の爲め拙著至極卑俗のものに候へども一部贈呈致し度と存候處只今再版印刷中にて刻下間に合かね候間是はあとより差上ぐる事と致候こゝには御禮のみ申上候

猶來年新年號に蕪稿御入用のよし拜承は仕り候へども生憎正月は方々より依頼を受け到底一人にて引き受けかね候位先づ義務的のもの一二を除くの外は不得已謝絶致し居候切角の御懇望を空くする段甚だ不本意の至には候へども學校其他多忙にて閑日月なき目下の境遇故事情御察しの上あしからず御容赦被下度候
頓首

十一月六日

林外先生
座右

二八八

明治三十八年十一月六日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地明陽館野間真嗣へ〔はがき〕
僕二重廻しを作りたい。に依つて、君の洋服屋を一寸よこしてもらひたい。午前は不在、午後は二時半過ぎ。但し暗くなつては稿が見えないから駄目。序に洋服屋の名と番地を教へ玉へ。昨日高田知一郎先生がくる

二八九

明治三十八年十一月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より皆川正福へ
拜啓先日は蕪露行の批評頂戴難有候今般中央新聞にて文藝に關する日曜附録發刊の計畫ある由にて福原君來訪何か寄稿を求められ候處生憎多忙にて何もかけず因て思ひ出し候は先日神泉へ出す爲に貴兄が岡倉の許へ行つて筆記した原稿はまだあの儘にて御手許にある筈故あれを此方へ御廻し被下候は、小生の義理も立ち中央新聞社の便利にもなり福原君の責任も全くなると云ふ次第ですが如何ですか此依頼を御引き受け下さる譯には參りますまいか尤も岡倉君へは是非照會の上許諾を得ねばならん事と存じますが御不都合なきかぎりはよろしく御取計ひを願ひます
猶委細は此次御面會の上萬縷可申上候先日梨雨君來訪明星に何か書いてくれと申され候是も多忙にて乍

不本意斷り申候 以上 「うっし」

二九〇

明治三十八年十一月十日 (時簡不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ
啓

三重吉さん一寸申上ます。君は僕の胃病を直してやりたいと仰やる御心切は難有いが僕より君の神経痛の方が大事ですよ早く療治をして來年は必ず出て御出でなさい。僕の胃病はまだ休講をする程ではないですが來年あたりは君と入れ代りに一年間休講がして見たいです。大學の教師だとか講師だとか申して評判をしてくれますが一向ありがたくはありません。僕の理想を云へば學校へは出ないで毎週一回自宅へ平常出入する學生諸君を呼んで御馳走をして冗談を云つて遊びたいのです。中川君杯がきて先生は今に博士になるさうですなかと云はれるとうんざりたるいやな氣持になります。先達て僕は博士にはならないと呉れもしない「い」うちから中川君に斷つて置きました。さうぢやありませんか何も博士になる爲に生れて來やしまいし。

君は島へ渡つたさうですね。何か夫を材料にして寫生文でも又は小説の様なものでもかいて御覽なさい。吾々には到底想像のつかない面白い事が澤山あるに相違ない。文章はかく種さへあれば誰でもかけるものだと思ひます。……僕は方々から原稿をくれの何のと云つて來て迷惑します。僕はホト、ギスの片隅で出鱈目〔目〕をならべて居れば夫で満足なのでそんなに方々へ書き散らす必要はないのです。……文庫といふ雑誌の六號活字がよく僕のわる口を申します。……文章でも一遍文庫へ投書したらすぐ褒め出すでせう。……段々秋冷になりました。今日は洋服屋を呼んで外套を一枚、二重廻を一枚あつらへました。一寸景氣

がい、でせう。猫の初版は賣れて先達印税をもらひました。妻君曰く是で質を出して、醫者の藥禮をして、赤ん坊の生れる用意をすると、あとへいくら残るか聞いたら一文も残らんさうです。いやはや。一寸此位で御免蒙ります。又ひまが出来たら何かかいてあげます。

十一月九日

金

三 重 吉 様

二重吉さん。先生様はよさうぢやありませんか、もう少しぞんざいに手紙を御書きなさい。あれはあまり叮嚀過ぎる

二九二

明治三十八年十一月十日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ (はがき)

拜啓本日洋服屋参り豫定の如く新詔のもの申しつけ候。御手数難有存候。蕪路行の批評も難有候。あの手紙は三日の消印あるにも關せず七日に到着馬鹿(々々)しいぢやけせんか。附箋も説明も何もありません。夫から遞信大臣に逐一事情を報告に及んでやりました。僕が大臣に手紙を出したのは生れて始めてです。尤も遞信大臣の名を知らなかつたから二三人に問ひ合して大浦君だといふ事を確めてかいてやりました。あの手紙を見て郵便配達取締を嚴にして、且延着の理由を僕の所へいふてくれれば大臣だが、平氣で居るなら馬鹿だ——ねー君。

二九二

明治三十八年十一月十二日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ (はがき)

野間君。小澤〇〇は詐欺師なる事相分り大變な奴ですよ。文科大學助教授文學士小澤〇〇なる名刺をふり廻し諸所をごまかしてあるく由。——昨日内田不知庵から注意が参り。本日は神泉に關係の畫家古城天風二君参り多額の畫をかたられた話を致し候。御用心の事。全體どうしてあんなものを紹介したのかね。僕の名前なんか方々へ行つて振り廻す由

二九三

明治三十八年十一月十三日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ (はがき 表の署名に「なつめきむ」あり)

君の盡力に因つて眞砂座を見る筈の處少しく都合が出来て同行が出来ぬから一人で行つてくれ玉へ
手のない人に手を出せといふのは愚物に賢人になれといふ様なものだ是は近頃失敬の至であつた然し僕
杯はない學問を出して講義をする位だから學生の方でもない手位はだしてもよさうに思ふ

二九四

明治三十八年十一月十五日 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ (はがき)

昨夜下駄物語をよむ。うまく出来ました。文章が段々上手になつてくる結構々々。あれはあとがあるのだらうね。あれ丈では纏まらない。あの茶屋の所は寫生だね。どうも寫生は無理がないから生きて居る。

明治三十八年十一月二十六日 午前七時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

御手紙拜見文章會を來月九日にしては如何との御問合せ別段差支もなさうなれど夫迄に猫が出来るや否やは問題に候。帝國文學は十五日迄に草稿が入用よし。實は帝文をさきへ書いて然る後猫に及ぶ量見の處此方が未だ腹案がまとまらずどれをかゝるかあれにせうかと迷つて居る最中然もこれもいざとならぬと纏つた趣向がないのでまだ手を出さずに居る夫故に此方を三四日中にかき出してかりに一週間と見れば大丈夫から猫とすると是も長くなるかも知れないが一週間あれば安心すると九日の開ではちとあぶない其次の土曜ならよからうと思ひます。尤も小生近來は文章を讀む事が厭きた様だから自分に構はず開いて頂戴猫は出来れば此方から上げます。一體文章は朗讀するより默讀するものですね。僕は人のよむのを聞いて居ては到底是非の判断が下しにくい。いづれ僕のうちでも妻君がバカンボーを腹から出したら一大談話を開いて諸賢を御招待して遊ぶ積に候 頓首

十一月二十四日

金

虚子 先生

僕は當分のうち創作を本領として大にかく積りだが少々いやになつた。然し外に自己を發揮する餘地もないから矢張り雜誌の御厄介になる事に仕つた

此度の猫は色々かく事がある。其内で苦沙彌君の裏の中學校の生徒が騒いで亂暴する所をかいて御

覽に入れます

明治三十八年十二月四日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區翠華町二番地朝陽館野間眞綱へ (ほかき)

御邸の御嬢さんが病氣ぢや大變だ。若い美しい女の病氣程世の中に大事件はない。御用心御用心

十二月三日

明治三十八年十二月四日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜復

十四日にしめ切ると仰せあるが十四日には六つかしいですよ。十七日が日曜だから十七八日にはなりませう。さう急いでも詩の神が承知しませんからね。(此一句詩人調)とにかく出來ないですよ。今日から帝文をかきかけたが詩神處ではない天神様も見放したと見えて少しもかけない。いやになつた。是を此週中にどうあつてもかたづけろ。夫からあとの一週間で猫をかたづけるんです。いざとなればいや應なしにやつ、けます。何の蚊のと申すのは未だ贅澤を云ふ餘地があるからです。桂月が猫を評して稚氣を免かれず杯と申して居る恰も自分の方が漱石先生より經驗のある老成人の様な口調を使ひます。アハ、ハ、ハ、ハ。桂月程稚氣のある安物をかく者は天下にないぢやありませんか。困つた男だ。ある人云ふ漱石は幻影の盾や蕪露行になると餘程苦心をするさうだが猫は自由自在に出來るさうだ夫だから漱石は喜劇が性に合つて居るのだと。詩を作る方が手紙をかくより手間のかるのは無論ぢやありませんか。虚子君はさう御思ひに

なりません。薙露行杯の一頁は猫の五頁位と同じ勢力がかゝるのは當然です。適不適の論ぢやない。二階を建てるのは驚ろきましたね。明治四十八年には三階を建て五十八年に四階を建て、行くと死ぬ迄には餘程建ちます。新宅開きには呼んで下さい。僕先達て赤坂へ出張して寒月君と藝者をあけました。藝者がすきになるには餘程修業が入る能よりもむづかしい。今度の文章會はひまがあれば行くもし草稿が出来ん様なら御免を蒙る。以上頓首

十二月三日

金

虚子先生

二九八

明治三十八年十二月九日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地中野村傳四へ〔はがき〕

傳四先生下駄物語につき明星でわる口をかいて居る御覽なさい。今日の文章會は休席。帝文の原稿がまだ出来ない。人がこない様に手筈をすと思ひがけない人がくる。然り而して僕も其實あまりかく氣が御座らん。猫もかゝなくてはならん

僕は小説家程いやな家業はあるまいと思ふ。僕なども道樂だから下らぬ事をかいて見たくなるんだね。職業となつたら教師位なものだらう。島津の御嬢様はとんだ事をした。僕が代理に死んでやればよかつた。

二九九

明治三十八年十二月十一日 午前六時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

時間がないので已を得ず今日學校をやすんで帝文の方をかきあげました。是は六十四枚ばかり。實はもつとかゝんといけない時が出ないからあとを省略しました。夫で頭のかつた變物が出来ました。明年御批評を願ひます。猫は明日から奮發してかくんですが、かうなると苦しくなりますよ。だれか代作を頼みたい位だ。然し十七八日迄にはあけます。君と活版屋に口をあけさしては濟まない。

三〇〇

明治三十八年十二月十八日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

啓 先刻の人の話では御嬢さんが肺炎で病院へつめきりださうです。少しは宜いですが。大事になさい。僕の家バカンボ誕生矢張女です。妻君發熱猫はかけないと思ふたらすぐ下熱先々大丈夫です。

猫は一返君によんでもらう積りで電話をかけたのですが失望しました。はじめの方のかき方が少し氣取つてる氣味がありませんかと思ふ。夫から終末の所はもつと長く書く筈であつたがどうしても時間がないのであんな風になつたんです。

此二週間帝文とホト、ギスでひまさへあればかきつゞけもう原稿紙を見るのもいやになりました。是では小説杯で飯を食ふ事は思も寄らない。

君何か出来ましたか。病人杯の心配があると文章杯は出来たものぢやない。

今日がつかかりして遊びたいが生憎誰もこない。行く所もない。先々正月に間に合ふ様に注文通り百枚位書いて安心しましたよ

十八日

盧子様

金

二七〇

明治三十八年十二月二十四日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島縣佐伯郡中村下田方鈴木三重吉へ

三〇一

只寒し封を開けば影法師

三〇二

明治三十八年十二月二十四日 午後三時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區三番町十番地市來松風氏へ

啓

猫のこよみわざわざ御持參被下難有頂戴致しますあんな妙なこよみは見つた事がありません柱にかけて眺めて居ります。

風呂敷を置いて行かれました。當分の間御あづかり申します。其内遊びに入らつしやい。

來年正月のホト、ギスには長いのをかきましたどうぞ読んで下さい。面白くない所があつたら遠慮なく注意して下さい。先は右御禮迄 勿々頓首

十二月二十四日

金

松風雅兄

三〇三

明治三十八年十二月二十九日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本所區茅場町三丁目十八番地伊藤左千夫氏へ

拜啓只今ホト、ギスを讀みました。野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しく、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。三六頁の

民さんの御墓に参りに來ました

と云ふ一句は甚だ佳と存じます。只次にある「只一言である云々」の説明はない方がよいと思ひます

小生帝文に興味の遺傳と云ふ小説をかきました君の程自然も野趣もないが亡人の墓に白菊を手向けるといふ點に於て少々似て居りますから序によんで下さい。

押しつまつて御多忙の事と存じます。新年は缺禮致します 以上

十二月二十九日

金

伊藤大兄

三〇四

明治三十八年十二月三十一日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方藤田米松へ

拜啓本日書店より藝苑の寄贈をうけて君の病葉を拜見しました。よく出來て居ます。文章杯は随分骨を折つたものでせう。趣向も面白い。然し美しい愉快な感じが無いと思ひます。或は君は既に細君をもつて居る人ではないですか。それであれば近時の露國小説杯を無暗によんだんでせう。どつちから來たか知

二七一

らんが書物か、實地から來たに相違ない。然しあれをもつと適切に感ぜさせるのはあの五六倍か、ないか、或程とは思はれないですよ。凡ての因縁ものは因縁がなる程と呑み込める様に長たらしくか、んと面白くゆかぬ様に思ひますがどうですか。あれで悪いといふのではない。長くしたらもつと面白く見えるだらうと云ふのです。あゝ云ふ裏面の消息は表面の戀をかき盡して種切れになつた時に考へ出すか又は自分が經驗を積んで表面の戀が馬鹿々々しくなつた時に手をつけるものだ。君の若さであんな事をかくのは書物の上か又は生活の上で相應の源因を得たのでありませう。ホト、ギスに出た伊藤左千夫の野菊の墓といふのを読んで御覽なさい。文章は君の氣に入らんかも知れない。然しうつくしい愉快な感じがします。以上

十二月三十日夜

金

白 楊 兄

今朝又読み直して見ました。あれを今少々活躍させる工夫があると思ひます。あれ丈の短篇では今少々活躍させんと完璧とは云はれない。それでなければもつと長くかく。三十一日

三〇五

明治三十九年一月二日 午前零時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

加計君の所へいつか手紙をやりたい。宿所を教へ玉へ

拜啓

御通知の柿昨三十日着直ちに一個試みた處非常にうまかつた。コロ柿は堅過ぎるがあれは丁度好加減で

す。小供にもやりました。君の神經衰弱は段々全快のよし結構小生の胃病も當分生命に別條はなささうです。君が芝居をやる杯は頗る見ものだらうと思ひます。全體何の役をやる積りか一寸御一報にあづかりたい。今日は大晦日だが至つて平穩借金とりも參らず炬燵で小説を読んで居ます。ホト、ギスを見ましたか。裏の學校から抗議でもくれれば又材料が出来て面白いと思つて居る。此學校の寄宿舎がそばにあつて其生徒が夜に入ると四隣の迷惑になる様に騒動する。今夜も盛にやつて居る。此次は是でも生捕つてやりませう。仕舞には校長が何とか云つてくれればいいと思ふ。喧嘩でもない猫の材料が拂底でいかん。伊藤左千夫の野菊の墓といふのをよんだですか。あれは面白い。美しい感じする。一昨日から雪今日も曇中々寒い。昨日は中川が來ました。

君が芝居をやる所を猫にかきたい。多々良三平と自認せる俣野義郎なるもの五六度も親展至急で大學へむけ猫中の取消を申し來る。新聞で廣告して取り消してやらうかと云つたら御免と云ふてきました。當人は人格を傷けられたとか何とか不平をいふて居る。呑氣なものである。人身攻撃も文學的滑稽も區別が出來ないで自ら大豪傑を以て任じて居るのは餘程氣丈の至りだと思ふ。君早く出て來給へ

早稲田文學が出る。上田敏君杯が藝苑を出す。鷗外も何かするだらう。ゴチやく／＼メヤやく／＼其間に猫が浮きつ沈みつして居る。中々面白い。猫が出なくなると僕は片腕もがれた様な氣がする。書齋で一人で力味んで居るより大に大天下に屁の様な氣散をふき出す方が面白い。來學年からは非出て來給へ。明日丸山通一といふ獨乙語の先生の所へ午飯に呼ばれた。何の因縁か分らないがまづ御馳走になる方が得策だと思つて承引した。

うれしきも悲しきも眼前の現象 月も花も刻下の風流。定業は何十年か知らないが、御駄佛となる迄は

まづく此の如くであらうと思ふ 珍重

三十八年大晦日の夜

金

三重 吉様

今日野村傳四と上野を散歩したら、耶蘇教の戶外演説があつた。聞き手は一人もない。大晦日である。人間は衣食の爲めには狂氣じみた事も眞面目にやるものですな。其例澤山あり。

三〇六

明治三十九年一月四日 午前(時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より松山市下京町小島武雄氏へ

拜啓賀狀拜見致候吉松氏任地にて評判よろしき由本懐の至うれしく候拙作御通讀被下候由難有奉謝候本年も相變らずつまらぬものをか、ねばならぬ事と存候御覽被下候は、幸甚に候。本年より早稻田文學藝苑其他にて文壇も大分賑やかになり候。其間に立ちて出頭没頭の陋態を極め候事大悟の達人より見ば定めし可笑しからんと折々は自らさへも失笑致候先は御返事迄 匆々頓首

三十九年一月三日

金之助

小島 様

三〇七

明治三十九年一月八日 午前(時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

啓、長い手紙を頂戴面白く拜見致しました。御世辭にも小生の書翰が君に多少の影響を與へたとあるのは嬉しい。夫程小生の愚存に重きを置かれるのは難有いと云ふ譯です。小生は人に手紙をかく事と人から手紙をもらふ事が大すきである。そこで又一本進呈します。

「野菊」を御讀みの由。詳細の御評拜見御尤もの事ばかりです。今度作者に逢つたら見せてやります。定めし喜ぶでせう。あの男は職業は牛乳屋で子規存生のみぎり一所に歌を研究して今でもアシビといふ雑誌を出して居る。小生は二三度會したがり交際もない人です。あの作も一句一句吟味すると技巧の上では大分足らぬ所があると思ふ。君は讀むまいが矢張り前のホト、ギスに出た寺田寅彦と云ふ人の「團栗」とか「龍舌蘭」とかいふ作の方が遙かに技術上の價値がある。只野菊に取るべき所は眞率の態度を以て作者が事件を徹頭徹尾描き出して居る點である。あれ丈の材料を普通の小説家がとり扱つたならもつと似非藝術的なものにして仕舞ふと思ふ。そこが頼母しい所だと思ふが、どうです。趣向は仰せの如く陳腐です。寧ろ月並臭を脱しない。然し仰せの如く月並臭くないからい、それから君の非難をする箇所は一々尤もである。僕も多少さう思ふ。但し女が死んでからの一段はあれでい、實際です。尤も君の云ふ様にすれば死といふものに對して吾人の態度が違つてあらはれてくる許りである。死に崇高の感を持たせやうとするときは、其方を用ゐるがよいと思ふが、死に可憐の情を持たせるのは、あれでなくてはいかぬ。野菊の行きが、りから云ふてあれでなくてはものにならない。調和せんと思ふ。死は一つである。然し吾人の死に對する態度は色々ある。此態度如何で讀者の感じが違つてくる。然も其色々な態度が皆眞といふ事がいへると思ふ。

女が猿股をいやがる所や、笠を被らない所は妙ですよ。つまり君の云ふ如く、あんな所で活動すると思

ふ。女が死んで寫眞を持つて居るのは寧ろ幼稚です。もつと上等に行けばそんな眼に見えるものを持たないでそれ以上の感じを起させるがい。然しそれは中々大手腕が入る。前後の關係から云つて、寫眞を握つて居たので一種の趣意が貫ぬいて、女の病死に落ち付きが出来るといふ點から見れば何にもかゝないより善い。

病葉に就いて一言蛇足を添へるが。主人公が何だか六づかしい本を讀んで居る。あれは必要があるのですか。突然あれを讀むと。故意にあんな本を讀ませて居る様な、初心な氣障な感じがする。もつと長いもので主人公が一種の人物であんなものを讀むべき傾向を有して居るか、又はあの本がああ短篇中に一種の關係を有して居るなら故意とは思はれなかつたらう。尤も後段に一寸關係が出るがあれ丈では、あんな本をよます必用はないと思ふ。

容赦なく云へば君は文に凝り過ぎて失敗しさうな懸念が僕にある。あまり凝ると抜目がない代りに何となく窮屈な苦しい感じがするでせう。第一長いものは到底根氣がつかないと思ふ。

僕は君の文が出る度に讀みます。さうして時間の許す限り、心づく限りは愚評を加へる積りです。其代り悪口を云つても怒つてはいけません。大學では君の先生かも知れないが個人として文章杯をかく時は同輩である。決して僕に對して氣を置いてはならぬ。君はあまりに神經的、心配的、人の心を豫想しすぎる様な傾向がありませんかと思ふ。他人に對してはとにかく僕に對してはさうせん方がいゝ。君も氣樂でいいでせう。野村傳四杯は氣樂なものである。あまり長くなるから是でやめます。 不

一月七日

森 田 兄

金之助

明治三十九年一月十日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

又手紙をあけます。もう少し立つと色々多忙になつて到底返事らしいものはかけないから只今少々ひまのあるのを幸にこれをかきます

君は大分長い手紙をかいてよこしましたね。あれ丈かくのは大分時間をとるに相違ない。僕の爲めになんな勞力を費やさしたと思ふと中々頼母しい心持ちで讀みました。何か不平でも氣儘でも洩したい時、間があつたらいつでも僕の所へ云つて寄こしてくれ玉へ。僕は讀むのを樂しみにして居る。其代り必ずそれに匹敵する長い返事は出されないかも知れません。

野菊の墓の評をかい下さる由定めし本人(即ち牛乳屋の主人)はよろこぶだらう。どうかかいてやつて下さい。左千夫なんて聞いた事もない人だから誰も相手にしてはくれん。切角出色の文字でも誰も相手にせんで甚だ氣の毒である。君が評をしてやれば僕も何だか愉快な氣がする。而も君の評は十中八九迄僕と同様であると思ふから猶更愉快である。然しわるいと感じた所は遠慮なく云ふてやつて下さい。本人の参考になります。

牛乳屋が氣に入つたといふのは見上げたものです。牛乳屋の主人の方が大學の講師よりも氣韻があると思ふ。顔も頗る雅な顔です。あんなものがかけさうでもない。

君は衣食の爲めに充分學問が出来んのを苦痛に感じて居る様だが御尤もです。僕も貧乏で十八九の時から私立學校を教へて卒業迄やり通したが其時分は別に何と云ふ考もなかつたから左程驚きもしなかつた。是が今日の君の様であつたら矢張り大煩悶であつたらう。夏休みに金がなくつて大學の寄宿に籠城した事

がある。而して同室のものゝの置き去りにして行つた蚤を一身に引受けたのは閉口した。其時今の大家君が新しい革靴を買つて歸つて来て明日から興津へ行くんだと吹聴に及ばれたのは羨やましかつた。やがて先生は旅行先きで美人に惚れられたと云ふ話を聞いたら猶うらやましかつた。

僕もその時分から眞の勉強（君の所謂ウイスマムを得る工夫）でも熱心にしたら今はもう少し人間らしくなつてゐるだらうと思ふ。其時分は本の名前を覚えて人に吹聴するのが學者だと思つて居た。趣味杯も低いものであつた。物の道理も今の若い人程は到底わからなかつた。要するに今でも愚物であるが當時は猶猶愚物であつた。尤も見識はあつたが、只人を下げる見識で自分が證得したポジチヴの見識ではなかつた。

僕もそれだから大に聰明な人になりたい。學問讀書がしたい。従つてどうか大學をやめたいと許り思つて居ます。先達晩翠が年始狀をよこしてまだ教授にならんかと云ふから「人間も教授や博士を名譽と思ふ様では駄目だね。失樂園の譯者土井晩翠ともあるべきものがそんな事を眞面目に云ふのはよくない。漱石は乞食になつても漱石だ……」と云ふ様な事をかいてやりました。あとで成程小供らしい氣餒だと氣がついた。

君が人の作を読む態度ば甚だよろしいと思ふ。それでなければクリチズムは出来ない。只人の長所を傷けない丈の公平眼は是非共御互に養成しなければならん。僕は人の作に對して只面白く讀みたい。よんでやりたいと云ふ氣が先へ起る。然し讀んで仕舞つて是は敬服したといふ様なものはあまり少ない。矢張り西洋人の方がそんな感じを引き起させる事が多い。然し西洋人だからといつて決して一目置いて讀むのではない。一三日前鏡花の海異記とか云ふものをよんで驚ろいた。どうも馬鹿々々しいと云ふ感より外に起らなかつた。それから彼の文章のかき方がいやに氣取つて居て嫌だと云ふ感じがあつた。警句は無論澤

山ある。あれをなせもつとうまく繋げないのかと思ふ。かう感ずるが僕は鏡花に對して憎惡心も何も有して居らん寧ろ好意を以て迎へよむのである。こんなのは矢張り天性の趣味の相違でありませう。

君の手紙をよむと君の人間を貫ぬいて見る様な心持ちがします。君と二三月交際しても、あれ程には分るまい。人に自己を打ち明けるといふ事は放膽の所爲である。打ち明けられた人は其放膽をほめるのではない。他に打ち明けぬものを自分にのみ打ち明けてくれたと云ふ特許を喜ぶのである。

自分の弱點に對しては二様に取り扱ふ方法がある。一は之を隠して自己の虚榮心を失望させまいとする。是は誰でもやつて居ます。僕もやつて居ます。然し決して満足が得られるものではない。一はコンフェッションである。然し無用の人若しくは此コンフェッションをきいて之を輕蔑する人若しくは之を利用して害を加へやうとする人には自白したくない。だから此場合には己れの信ずる人、若しくは敬する人、或は教を垂れて訓戒してやらうと思ふ人に自白するのである。其時は甚だ愉快を覺えるものだ。單に本人が愉快を覺えるのみならず。相手も快よく思ふ。君がもし君の書中に自己の弱點も構はず吐露したとすれば、其點に於て君は愉快である。僕が君の自白を聞き得たる相手とすれば僕も愉快である。

これからはいそがしくなるといつこんな長い手紙をあけられるか分らない。一先づ是で擱筆とします。以上

一月九日夜

森 田 兄

金之助

拜啓平生は御無沙汰をして濟まん。年禮も賀状も今年は全廢として見たが矢張り中川元さん杯からくるとさうも行かぬ。君の留守宅へも失敬して仕舞つた。いづれ妻がまかり出る。僕のうちでは又去年の暮に赤ん坊が生れた。又女だ。僕の家は女子専門である。四人の女子が次へ次へと嫁入る事を考へるとゾーツとするね。貯蓄をせんといかん。然るに去年の十二月杯は色々かゝつて三百圓近く仕拂つた。幸ひ著作の印税があつたので間に合つたが何しろ。金の入るのには驚くね。君は出来る丈貯蓄をせんとゆかぬ。君に返す金矢は張り十圓宛にして居る今年中位で濟むだらう。東京も別段變つた事もない。近頃は天氣がいゝ。狩野も大塚も藤代も例の如くだ。藤代位學校を欠勤する男は珍らしいね。僕大學をやめて江湖の處士になりた。大學は學者中の貴族だね。何だか氣に喰はん。ホト、ギスを君の所へ送る様に依頼して置いたが行くだらうね。四月には歸るまいね。居られるならそちらに居るがいゝと思ふ。東京に口はなさゝうだ。まあ此位にして置かう此手紙は君が呉れた純羊毫で書いたのだいつ迄立つても字はうまくならない。君の字は立派なものだ。御寺の額にでもありさうだ。繪端書には堅過ぎて釣り合はない 以上

正月十四日

虎 雄 様

金

三三〇

明治三十九年一月十六日 午前零時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區翠平町二番地朝陽館野間真綱へ

今夜野村が雉子と巻紙を持つて來てくれました。御親切にありがたう存じます。あの紙は妙な紙だね。

此紙は寺田が高知から持つて來てくれたものだ。先達ては橋口が白紙の巻紙をくれた。其前は菅が唐紙を支那から持つてきてくれた。僕は紙大盡だ。今年中は紙を買はずに濟む。君憂鬱病のよし結構に存候。憂鬱も快活も全く本人の隨意と存候。小生杯は一日に兩方やり申候。昨日は野村と日本橋、神田、淺草を散步致し候。柳橋で藝者に逢ひ候。其外竹本組玉、竹本團洲、都々逸坊扇歌の家をつきとめて歸り候。皆川には頼と逢はず候。 頼首

正月十五日

眞 綱 様

金

島津の若大將には此方から禮狀を出す

三三一

明治三十九年一月十七日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區三田君塚町十番地行村方皆川正禮へ

尊書拜讀野間は憂鬱病に罹つた由を申來候けしからぬ事に候。三十にもならないで憂鬱病杯と申す贅澤な事を申し候。

其後はしばらく拜顔の期を得ず。不相變餅を食つて御消光の事と存候。小生も例の如く漫然と消光致し居候。其うち會食でも致し度と存候

趣味の遺傳御讀み被下難有候。結末の一氣呵成の所をほめて下されたのは望外の幸福と存候。實は時間がたりなくて、かけなかつたのです、仕舞をもつとか、んと、前の詳細な敘述な比例を失する様に思ひま

す。

あれは誤植誤字だらけであります。

野菊の墓の末段をわらく云ふ人は君の外にありません。森田二十五絃が同様の事を云つて來ました。僕はさうも思はない。東京邊の家庭にはこんな御シャベリな婆さんがあるものだと思つて存候。野間が雉子を届けてくれました。是は島津の若旦那の御見やけです。昨夜無暗にたべた所今日腹がわる候。

いづれ其内 草々

十六日

皆川 兄

金

三三三

明治三十九年一月二十六日

午後三時—四時

本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

其後御無沙汰仕候二月のほと、ぎすに何か名作が出來ましたか。僕つらく思ふにホト、ギスは今の様に毎號版で押した様な事を十年一日の如くつゞけて行つては立ち行かないと思ふ。俳句に文章にもつと英氣を鼓舞して刷新をしなければいけません。と申して別に名案もないから只主人公たる君が大奮發をするより外に仕方がない。文庫新聲杯一時景氣のよいものが皆駄目になるのは時候後れだからと思ひます。ホト、ギスも賣れるうちに色々考へて置かぬとならんでせう。

先づ巻頭に毎號世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事が肝心ですね。夫から君は毎號俳話をか

いて、四方太は毎號文話でもかいたらどうです。四方太は原稿料が出ないと云つてこぼして居るがあの男はいくら原稿料を出しても今の倍以上働かどうか危しいものだ。とにかくもつと活氣をつけたいですね。小生餘計な世話を焼いて失敬だがホト、ギスが三四千出るのは寧ろ異數の觀がある、決して常態ではない油斷をしては困る事になると思ひます。

そんなら僕に何かかけと來るかも知れんが僕は取りのけ別問題です。一寸手紙をかく序があるから是を差し上げます。苦い顔をしてはいけません 頓首

一月二十六日

金

虚子 様

三三三

明治三十九年二月三日

午後三時—四時

本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區桑平町二番地朝陽館野間真綱へ

拜啓

先日皆川君のうちへ行く約束はしなかつた都合によつたら行くと申してやつた。然し待つて居たのは氣の毒である。小生例の如く毎日を消光人間は皆姑息手段で毎日を送つて居る。是を思ふと河上肇など、云ふ人は感心なものだ。あの位な決心がなくては豪傑とは云はれない。人はあれを精神病といふが精神病なら其病氣の所が感心だ。君の憂鬱病はどうなつた。金を百圓許り借りて大に青樓に遊んで見たまへ。大抵の憂鬱病は屹度全快する。放蕩は長く續くものではない。放蕩をつゞけると放蕩の方の憂鬱病が出てくる。さうしたら又勉強をする。又憂鬱病になる。又何か道樂をやる。是で澤山だ。是を姑息手段といふ普通の

二八三

二八二

人間は大概やる。君は此姑息手段さへやらんから病氣になるのである。
近頃は訪問者が少々減じて難有い。忙しい事は依然として忙がしい。生涯此有様であらう。而して生涯落ちつく事はない。僕のキュー／＼して居るのも姑息手段に過ぎぬ。要するに大俗物になつて益大俗物たらんとアセルのだね。是ではどこがえらいか分らない。人間は他が何といつても自分丈安心してエライといふ所を把持して行かなければ安心も宗教も哲學も文學もあつたものではない。 頓首

二月三日

眞 綱 様

金

三三四

明治三十九年二月六日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ

拜啓陸軍の英語教師の口があつた由何より結構の事と存候實は君の口に就ては内々心配して居つたが是で僕も安心した精出して御勤めなさい決してなまけてはいけません。其内月給が上つて美人の妻君がもらへます。

金がとれて地位が出来ると憂鬱病も退散するだらうと思ふがどうですか。僕なんか百萬圓もらつても憂鬱病だね。呵々

二月五日

眞 綱 様

金

三三五

明治三十九年二月七日 午前零時―五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藤中野村傳四へ

謹白傳四先生足下

僕の友人の西洋人が乃木將軍の傳をかくといふので吉田松蔭の著書を知りたいと申すが君だれかにきくか一寸圖書館で見てくれないか。尤もどこで賣つてるか分れば猶よい。夫から福地櫻癡の幕末記事は今賣つてるかね。いくらでどこに賣つてるか教へてくれ給へ。櫻癡といふ人の逸話を讀んだがあれは駄目な人間だ。然し當人は餘程えらいと思つてる。生前は可成有名でも死ねばすぐ葬られる人だ。一寸學校の成績はよくても卒業して駄目になると同じ事だね。然しあんな淺薄な人間でも人から大にもて囃されるのだから殊に女から屢惚れられるのだから妙なものだね。さうなると女に縁が遠い程えらい人といふ譯だな。君なんか少しは奢つてもいゝ。

三月には猫のつゞきをかく積りで居る。レクチュアはまだ一枚もかゝない。それで毎日々々何か蚊にか忙がしい。今度の猫に悪口をいふ材料はないかね。落文館なんか相手にならんから今度はやめにして又金田令嬢の御見識でもかゝうかと思ふ。

先達て女から手紙が来たよ夏目先生御許へとかいてある。見たければ御見やけを持つて居らつしやい。但し有體にいふと來ない方がいゝ 再拜

二月六日

傳 四 先 生

金

明治三十九年二月十一日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

昨夜君の手紙がきました。加計君が結婚したのは御目出たい。男爵の娘だなんてそんなものが山中で役に立つてせうか。然しそれは餘計な事だ。とにかく御目出たい。君小説をかいたら送り玉へ。早く拜見仕りたい。近頃は色々な雑誌屋や何か来ていやになつて仕舞ふ。文章も作るひまがない。芝居は是からやるのですね。東京でも坪内さんの門下生がやりますよ。押入のなかで三味線をひくのは近世奇人傳にでもありさうだ。そんな事が出来れば病氣はまづ大丈夫ですね。猫の原書をかひにくるのは猫中の材料だ。色々な人があるものだ。大町といふ男が猫をよんで作者は氣の小さい陰氣な少し洒落氣のある男だと二度も二度も繰り返して居る。人民新聞といふのは僕が猫を作つて以來細君と仲が悪くなつたとあるさうだ。すると高等學校で其きり抜きを大事に校長に御目にかける。内田魯庵といふ男は夏目君は金田夫人に談判されて迷惑して居るさうだとある男に話したさうだ。

僕も此位有名になれば申分はないと思ふ。昔はこんな事が氣にかつて一々正誤しないと心持ちがわるかつた。今では却つて面白い心持ちがする。是から文章でもかいてながく居ると益僕の悪口をいふものが出来て来ます。仕舞には漱石は昨日死んださうだ。いや瘋癲院へ這入つた。華族の御嬢さんから惚れられたなんて妙なのが出て来るでせう。

今日は紀元節でいゝ天氣です、一昨日は雪でね。大變積つた。今日も道がわるい。昨夜は中川や何か四人ばかり来て夕飯をくつて快談をして暮らしました。

廣島といふ所はどんな所か行つて見たい。廣島のものには僕的朋友が少々ある昔は大分つき合つたもの

だ。猫のうちにある甘木先生も廣島の人だ。毎日役々としてくらすが人間の目的だとあきらめて仕舞つたが本もよめず、樂に坐つて居る事も出来ないとなると一寸弱りますね。

もつと何かかゝうと思ふがいやになつたからやめ。

加計によろしく云つてくれ給へ。妻君は美人ですか。 以上

二月十一日紀元節朝

三重 吉 様

金

三二七

明治三十九年二月十三日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

尊書拜見

君の心の状態が果して君の云ふ所の如くなれば君は少々病氣に相違ない。病氣がわるいとも云はぬ。よいつも申さぬがつまり自分が苦しむ丈不幸と云はねばなるまい。前の手紙にも云ふた如く君はあまり感じが強過ぎるので其鋭敏な感じに耽り過ぎた結果今日に至つたのであらう。そんな時には人が異見をしたつて慰めたつて容易に癒るものではない。自然に任せて於て同時に氣を晴らすより外に方法は無い。そんな時に神経質な文學書杯を讀むと猶いけない。可成方面の違つた人間と話したり丸で趣味の違つた書物を讀んだり。若くは人と喧嘩をしたり。或は借金をして放蕩をして見たり。或は人に手紙を出して鬱氣を洩らすがいゝと思ふ。君は最後の手段に訴へて手紙をよこしてのかも知れないが儲僕が君に同情を表して泣言を並べると君は多少頼りになるかも知れないが病氣は益はけしくなる。去ればと云つて冷淡な返事をすれ

ば矢張りわるくなる。或は月並な説教がましい事を云つたら何の功能もない事となる。是には僕も少々弱るな。

二八八

僕も昔は非常に馬鹿で薄志で剛慢でしかも世人が大變恐ろしかつたが今は大分變化して仕舞つた。性格は此三四年以來いちゞるしく變化した。只氣分丈は矢張り若くて學生なんか友達の様な氣がする。

それで近來は僕が文章をかくものだから人が色々な事をいふ。大町なんかは僕の悪口を二度も繰返して居る。人民新聞では僕が猫をかくて細君と仲がわるくなつたとかいたさうだ。ある人は僕が金田夫人に強追されて迷惑して居ると話したさうだ。是が十餘年前なら眞面目に辯解する所だが今日ではそんな氣は少しもない。桂月なんて馬鹿だと頭から思つてる。新聞なんて何をかかうと構はないときめて居る。なぜこんなになつたか分らない。又これがいゝとも斷言しない。然し昔より太平である。人間は太平の方が難有いに相違ない。人間として僕は決して君の師表たる様な資格はない。然し世の中にこんなえらい人になつて見たいと崇拜する人間は一人もない。だから君も君で一人前で通して行けば夫で一人前なのだから構はないか。

人が笑ふから云々と云ふのは尤だが今の文壇で人の笑ふに價せざる者ばかりを作る人は殆んどない。丁度朋友其他の知人中に於て馬鹿の分子を含んで居らんものは一人もないと同じ事であらう。

先づ最前の大町桂月の様なのは馬鹿の第一位に位するものだ。竹風先生だつてあんなものだ。樗牛なんて崇拜者は澤山あるがあんなキザな文士はない。然しみんな押を強くして平氣で居る。何も君一人が閉口する必要はない。つまらないと感じて文壇を退くなら分つてるが。何もそんなに自分丈を妙に考へる必要はあるまい。僕なんかは蔭では矢張り僕が桂月其他を目する如く批評されてるのである。然し些とも構はない。蔭で云ふ事なんかはどうでもよろしい。文章もいやになる迄かいて死ぬ積りである。

他人は決して己以上遙かに卓絶したものではない又決して己以下に遙かに劣つたものではない。特別の理由がない人には僕は此心で對して居る。夫で一向差支はあるまいと思ふ。

君弱い事を云つてはいけない。僕も弱い男だが弱いなりに死ぬ迄やるのである。やりたくなくなつたつてやらなければならん。君も其通りである。死ぬのもよい。然し死ぬより美しい女の同情でも得て死ぬ氣がなくなる方がよからう。

先達て憂鬱病だと云つた男にかう答へてやつた

「借金を百圓許して放蕩をやれば憂鬱はなほる。もし放蕩を永くつゞけると放蕩の方で憂鬱病が出る。さうしたら又放蕩をやめて強勉をする。是が普通の人間のとる尤も自然の方法である。是は姑息手段であるが誰にでも出来る。然しそんな面倒な事をやつたりやめたりせんで一度に天下太平になるのは。死ぬ丈の覺悟で以て大に考へ込んで近頃はやる自覺でもしなくてはなるまい。自覺になると僕は知らない事だから一言も云へない……」

十三日

以上

森 田 様

金 之 助

三二八

明治三十九年二月十三日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ
今日歸宅の上藝苑を拜見した。僕の文の批評は結構であります。あれは頗る比例といふ點から云つては

丸駄目の作である。趣味の遺傳といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です。猫は世の中があきた杯といふ事はない。二三の氣短かな連中がそんな事を云ひたがるのだ。猫の讀者はそんなに急にあきやしない。僕のつむじは眞直なものさ。猫をかくのは立派な考だと思つて居る。決してブク／＼湧いて出ては來ない。只無暗にかいてるとあんなものが出来るのです。

天下に己れ以外のものを信頼するより果敢なきはあらず。而も己れ程頼みにならぬものはない。どうするのがよいか。森田君君此問題を考へた事がありますか 頓首

二月十四日

森 田 君

金

三一九

明治三十九年二月十五日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區指ヶ谷町七十八番地姉崎正治氏へ

拜啓今日は學校で立談の際御互の意志の通ぜぬ所もあるから改めて手紙で愚存を申し上げる。實は〇〇さんが逢ひたいとか又は折り返して野紙入りの半官文的のものをよこすと又面倒だから君迄申して置く。英語學試験囑托辭任の事はあれで済んだ事と思つて居た所はからずも君等に御心配をかけて相濟ん是は大に僕の謝する所である。謝する所であるから腹藏のない所を話して判斷をしてもらはう。

辭任の理由は多忙といふ事に歸着する。僕は一週間に三十時間近くの課業をもつて居る。是丈持たなければ米塩の資に窮するのである而してそれ以外にも用事がある。讀書もしなければならぬ。だから多忙といふのは伴りのない所で尤な理由である。

次に僕は講師である。講師といふのはどんなものか知らないが僕はまあ御客分と認定する。大學から普通の教授以上可重に取扱はれてもよいと考へて居る。大學の方ではさうは思はんかも知れんが僕の方ではさう解釋して居る。従つて擔任させた仕事以外には可成面倒をかけぬのが禮である。

其代り講師には教授杯の様な權力がない自分の教へる事以外の事に口は出せない。夫等は皆教授會で勝手にきめて居る。語學試験の規則だつても講師たる僕は一向あづかり知らん。いつの間にかあんなものが出來上つて居るのである。

だからあんなものから生ずる面倒は之をきめた先生方と當局の講師が處理して行くのが至當である。自分たちが面倒な事を勝手に製造して置いて其勞力丈は關係のない御客分の講師にやれといふ理窟はない。尤も相談づくならそれでもよい。〇〇〇〇は僕を以て報酬がないからやらんのだと教授會で報告したさうだ。其解釋は至當である。僕自身もさう考へて居る。僕の様なものに手數(擔任以外の)をかけるには金錢か、敬禮か、依頼か、何等かの報酬が必要である。それがなくて單に……囑托相成候間右申し進候也といふ様な命令なら僕だつて此多忙の際だから御免蒙るのはあたり前である。

もし僕の辭任に對して學長始め其他の教授が不穩當と認めるならばそれ等の人々は講師と云ふもの、解釋に於て全然僕と考を異にして居るのだ。僕の考では講師を使ふには教授を使ふよりも遠慮しなくてはならん。見玉へ講師は教授會の事に就て何等の權利ももつて居らんではないか。俸給の點から云つても無給のさへあるではないか。講師は教授に比すれば斯の如く特權が與へられて居らんであるからして、講師の方では擔任以外の事を命令的に押しつけられてヘイ々云ふ丈の義理がないぢやないか。

僕は僕の擔任する六時間の講義さへして居れば講師としての義務はそれ以外にはないものと信じて居る。夫だからして文科大學宛で斷り狀を出した。もし文句がわるいと云ふなら是にも理由がある。文科大學か

ら來たのだから個人に對する様な愛嬌のある文句はかけないのである。文科大學御中としてはあれ丈の表面上の事しか言ひ得ないのである。

君は親切に色々心配してくれるし井上さんもさうだといふから一應僕の考を述べて英斷を仰く譯だ。でとにかく今回は御免蒙るよ。

此手紙は〇〇さんに見せても井上さんに見せても乃至は教授會で朗讀してくれてもさし^原差し支ない。君も迷惑だらうが妙に引きかゝつたもんだから宜しく取計つて下さい。以上

二月十五日

金之助

姉 崎 兄

三三〇

明治三十九年二月十五日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

又手紙をあけます

自分の作物に對して後悔するのは藝術的良心の鋭敏なもので是程結構な事はない。此量見がなければ文學者になる資格はないと思ふ。

自分で自分の價値は容易に分るものではない。古來からちつとも文藝に志さなかつたものが急に筆を執つて立派な作を出した例は澤山ある。夫迄は自分の何物か分らなかつたのである。小説とか何とか云ふものは必ず一足飛びに大作は出來るとは限つて居らん。突然うまいものをかくのは天分の充分に發揮されべき機が熟した時に限るので他の人は書きつゝも熟しつゝも進んで行くのである。

僕の様なものに到底文學者の例にはならないが僕は君位の年輩のときには今君がかく三分一のものもかけなかつた。其思想は頗る淺薄なもので且つ狹隘極まるものであつた。僕が二十三四にかきかけた小説が十五六枚残つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり耻かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた。

勿論今でも御覽の通りのものしか出來ぬが然し當時からくらべると餘程進歩したものだ。夫だから僕は死ぬ迄進歩する積りで居る。

夫から今日の事を申すと(例へば猫を一節かくと)此次にはもうかく事があるまいと思ふ然しいざとなると段々思想も浮んでくる先づ前回位なもの出來る。すべてやり遂げて見ないと自分の頭のなかにはどれ位のものがあるか自分にも分らないのである

君杯も死ぬ迄進歩する積りでやればいゝではないか。作に對したら一生懸命に自分の有らん限りの力をつくしてやればいゝではないか。後悔は結構だが是は自己の藝術的良心に對しての話して世間の批評家や何かに對して後悔する必要はあるまい。

君は自我の縮少を嘆じて居ると同時に君の手紙中には大に自我を立てゝ居る。君の手紙の如く我が立つて居ながら夫でも自から小さいと嘆息するのは必竟幾分かウソが籠つて居る

コンフエションの文學は結構である。コンフエションの文學程人に教へるものはない。夫で澤山だから立派なものを書けばよい。容れられない事はない君は未だ其方面に於て雄飛して見ないのである

君の文章には君位の年輩の人にしてはと思ふ様な警句が所々ある。夫丈でも君は一種の寶石を有して居る。君の手紙を見ると言廻し方の中々うまい所がある。他人が後悔せぬ所を恨む邊はうまくかきこなしたものだ。君の手紙のうちには形容の妙な言語もある。ドブ鼠の様に音もたてずに凍りついて死にたい杯は

振つたものだ。

二九四

君の批評を見ると普通の雑誌記者杯よりも遙かに見識が見える。よくよんで居る。だから自分の作物上にも其見識は應用され得るに相違ない。

僕は君に於て以上の長所を認めて居る。何故に萎縮するのである。今日大なる作物が出来んのは生涯出来んといふ意味にはならない。たとひ立派なものが出来たつて世間が受けるか受けないかそんな事はだれだつて受け合はれやしない。只やる丈けやる分の事である。

衣食は無論窮する事位覺悟しなければならぬ。そんなに贅澤をして見たり名文をかいて見たりしては冥利がわるい。

此夏は君は卒業する。卒業すればパンの爲に苦しむ。當前である。それがいやなら、すぐに中學校の口をさがして田舎へ行けばよい。

僕の旋毛は直き事砒の如し。世の中が曲つて居るのである。猫は苦しいのを強いて笑つて許ぢやない。ほんとに笑つてるのである。

此手紙に對して別段返事はいらぬ。只奮つて強勉し玉へ 以上
二月十五日

森 田 兄

金之助

三三二

明治三十九年二月十七日 午後四時五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區指ヶ谷町七十八番地崎正治氏へ

拜啓

君の返事は拜見した。個人としての御忠告は難有感謝する。決して悪意を以て見る様な事はしない。たとひ指圖であつても決して怒りはせん。

然し學長からもう一返何とか云つてきた時に何と挨拶するかはあらかじめ君に受合ふ譯に行かん、のみならず僕自身にも分らない。時と場合によつては斷然斷はらんとも限らない。是は決して君の親切を無にする考からではないから誤解してくれては困る。

高等學校の入學試験が毎年ある。其折には學校長がよく僕の宅へ依頼にくる事がある。然し僕は多忙の故で毎々辭する事がある。それでそれぎりになる。淡泊なものだ。世の中は夫で澤山である。

夫では悪むといふのは形式に拘泥した澆季の風習だ。二十世紀は澆季だから仕様がなない俗吏社會、無學社會ならとにかく學者の御そろひの大學でそんな事をむづかしく云ふのは大學が御屋敷風御大名風御役人風になつてゐるからだよ。

大學で語學試験を囑托する、僕が多忙だから斷はる。其間に何等の文句は入らない。もしそれが僕の一身上の不利益になつたり英文科の不利益になれば僕のわるいのぢやない。大學がわるいのだ。

語學試験なんか多忙で困つて居る僕なんか引きずり出さなくつたつて手のあいて居る教授で充分間に合ふのだ。

僕なんかは多忙のうちに少しでもひまがあれば書物を一頁でも讀む方が自分の爲にも英文學科の將來の爲にもなると思つて居る。語學試験を引き受けなくてしからんと思ふなら隨意に思ふがよい。○○さんなんか何と思つたつて困りやしない。少々こんな謝絶に逢ふ方が人間といふものが理解されていゝのだ。學長たるものは只歴史の大家になつたつて駄目だよ。少しは世の中の人間はこんな妙な奴が居つて講師で

二九五

もそんなに意の如くにはならないといふ事を承知させるがいゝのだよ。 頓首
二月十七日

姉 崎 兄

金之助

三三三

明治三十九年二月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村幹太郎氏へ

拜啓カールライルの家の寫眞は持ち合せずカールライルの家に關する案内記様のものは別封にて入御覽候御
参考にも相成候は幸と存候夫から今度の挿繪の事も小生から御願に參上可仕筈の處多忙の爲め本屋まか
せに致置候甚だ無申譯次第御容赦可被下候

次に挿繪は別段の望無之只繪として面白きもの價值あるものを御無理にも願度と存候
服部申候には御報酬としては普通の例にならふ必要なしと。去れば御手間のかゝり具合と出來のよき加
減にて充分御請求願上候
いづれ拜顔の上（「字不明」）御禮可申上候へども以序右迄申上候 艸々

二月二十日

艸々

不折老臺

金之助

座下

三三三

明治三十九年二月二十日 午後十二時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

拜啓君の苦心の作を四方太が失敗だと申し小山内が傑作だと申したので君大に惑ふのは尤もだ。然し四
方太と小山内と反對の批評をするのは寧ろ當然で驚ろく事はない。小山内のかいたものを四方太に見せ四
方太のものを小山内へ持つて行つたら兩方でははだめだといふに違ない。僕はどうかといふと自分でも分
らない。然しとにかく見せ玉へ公平なる評番を仕るから。尤も世の中は色々なものでほめてくれても銘々
ほめ所が違つたりわるく云つても悪くいふ場所が皆異なつて居る。どんなものでもほめられもするし、く
さゝれもする。どんな男でも女を口説いてる内は生涯に女房の一人や二人やもてるものだからな。天下の
別嬪だつて難くせをつければいくらでもあるよ。とにかく苦心の御作とあるからは是非拜見仕らうから郵
便で送り玉へ 以上

二月二十一日

金

傳 四 先 生

四方太は倫敦塔幻影の盾は面白いといふが薙露行はわからぬといふ人だ。僕には其理由がわからん

三三四

明治三十九年二月二十二日 午前七時—八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

二九七

只今一昔を拜讀に及んだから愈斷案を下さねばならぬ

四方太と撫子先生の評を左右にならべてどつちに賛成するかと問はれ、ば余は四方太に賛成する。

然し君の作のうちで尤も失敗の作かといふとさうではない。君は尤も苦心の作だといふけれども僕が見れば他の出来のいゝ諸篇より同等より少し下位の程度のものである。

だから四方太に賛成する爲には失敗といふ意味を大に高くしなければならぬ。

小山内君がほめるわけは分つた。あの男はこんなものが好きなんだ。あれは趣味が近いからほめるのだよ。

以上謹んで僕の斷案を左右に呈す。此斷案は決して動かぬ斷案であります。君決して疑ふなかれ今楷火といふのをついでによんだ。楷火も芝居が、りだが一昔よりはよつほどいゝと思ふ 再拜

二十一日

傳 四 様

金之助

三三五

明治三十九年三月二日

(時間不明)

本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區豊町二十八番地北辰館川本(當時横前)敏亮氏へ

拜啓蕪稿薙露行御愛讀被下候よし感銘の至に不堪候御尋ねの文句「うれしきものに罪を思へば罪ながかれと祈る憂身ぞ」と申す句は下の様な意味で使用せる積に候「恐ろしき罪は犯したれど其内に嬉しき節もあれば其嬉しさに引かされて永く此罪を犯して居りたしと迄戀に心を奪はれたるうき吾身なり」と云ふ考にて使用致候處生硬なる爲め御疑をまねき候。元來小生のかきたるあるものはよく人より難解と云はれ候

自からかく折は俳句抔作る折の考にて文章をやり候故此位なら通るだらうと考候へども俳句をよむ様な心得にて小説をよむ人は滅多になき爲め六づかしくて分らぬと思ふ人が多きならんと存候。骨を折つて人いわからぬ様に致すは一方から云へば愚な事に候。呵々

先は右御返事迄 草々頓首

三月二日

横 前 様

金之助

題は古樂府中にある名の由に候御承知の通り「人生は薙上の露の如く晞き易し」と申す語より來り候。無論音にてカイロとよむ積に候

自己の作物が讀者に快感を與ふるよりうれしき事は候はず。作物の目的は是に於て完く成就されたるものに候。重ねて大兄の厚志を謝し候。向後共御氣付の個處も候は、善惡にかゝはらず御注意願度と存候

三三六

明治三十九年三月二日

午後零時一

本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鉾太郎氏へ

拜啓昨夜服部書店主人大兄の挿畫持參逐一拜見致候。いづれも見事なる出来満足不過之と存候あれは今迄のさし畫に類なき精巧のものにて出来の上は定めし人目を驚かすならんと嬉しく存候。夜中にてよくわからざりしかど、かの倫敦塔の圖の如きは着色の點に於いて慥かに當今の畫家をあつと云はしむるにたる

名品と存候。小生日本人のかいた水彩にてあの如きしぶき設色を見ず。只うまく板に出来ればよいがとそれが心配に候。此邊は大兄よりきびしく服部へ御命じ願上候
其他薙露行の古雅にして多少の俳趣味を帯べる琴のそら音の幽冥にして迭宕なる。まほろしの盾の無邪氣にして眞摯なる皆面白く拜見仕候御蔭を以て拙文多大の光彩を添へ單行して江湖に問ふの價値を加へ候。先は御禮迄 匆々

三月二日

不折畫伯

座右

金

三二七

明治三十九年三月二日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中澁水町五番地橋口澁氏へ

先日は失禮昨夜服部主人來訪さし畫すべて拜見致候。御骨折の段奉鳴謝候。あの様な手のこんだものがかいて頂くのは洵に難有仕合に御座候。御蔭にて拙文も光彩を放ち威張つて天下を横行するに足ると存候。不折のも今迄に比類なき精巧のもの甚だ満足致候。小生あの倫敦塔の色彩を非常にうつくしく感じ候。何だか西洋人の色としか思はれず候。

小生の尤も面白しと思ふは大兄と不折の畫が毫も趣味に於て重複せざる點に有之候。是一つは兩君の性質が違ふからかとも存候。兩君の畫によつて小生の文集もえらい者に相成申候。先は御禮迄 匆々

三月二日

橋口様

金

三二八

明治三十九年三月三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藤中方野村傳四へ 「はがき 署名に「なつめの金公」とあり」

早稲田文學の三號の小説評（先刻は失禮アレカラスグ讀ンダ）

小川未明氏作 未明君獨り感慨を催して居る讀者は何ともない。あんなに感じを人に強いるものぢやない

大塚楠緒子作 筆が器用に出来て居る。苦る文章を考へたものであります。思ひつきもわるくありません。あの人の作としては上乘であります。三小説のうちの傑作である。

小栗風葉作 何をかいたものものやら。あれよりホト、ギスの投書の寫生文をよむ方よろしくと存候。駄作の駄の字であります

〔左上の隅に細字にて〕

僕の薙露行を十二ヘン讀んだ人がある。僕は感謝の手紙ヲ出シタヨ

三二九

明治三十九年三月八日 午前七時—八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十二番地寺田寅彦へ 「はがき」
御病氣の由如何毎日いやな天氣風か雨か雪 いやはや。小生不相變原稿にて多忙是もいやはやあまりた
のまれるのもよしあし、でけす

三〇二

三三〇

明治三十九年三月十七日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地反倉社内瀧田哲太郎氏へ

御手紙拜見中央公論には可成かゝうと思ふが何とも受け合はれない。只今ホト、ギスの分を三十枚餘認
めた所。何だか長くなりさうで弱はり候。夫に腹案も思ふ様に調はず閉口の體に候。實を申すと今日杯は
ぶらく白帆の見える川べりでもあるきたい所に候。文章も職業になるとあまり難有からず又職業になる
位でないとは張合がなし厄介なものに候。漾虛集は未だ校正が廻つてこず。拜借の天外先生の文章も拜見の
ひまなく候

先は右御返事迄 草々

三月十七日

夏目金之助

瀧田哲太郎様

三三二

明治三十九年三月二十三日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓新作小説存外長いものになり、事件が段々發展只今百〇九枚の所です。もう山を二つ三つかけば千

秋樂になります。趣味の遺傳で時間がなくて急ぎすぎたから今度はゆるくやる積です。もしうまく自然
に大尾に至れば名作然らずんば失敗こゝが肝心の急所ですからしばらく待つて頂戴出來次第電話をかけま
す。松山だか何だか分からない言葉が多いので閉口、どうぞ一讀の上御修正を願たいものですが御ひまはな
いでせうか 艸々

金

虚子先生

三三三

明治三十九年四月一日 午前十二時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓雜誌五十二錢とは驚ろいた。今迄雜誌で五十二錢のはありませんね。夫で五千五百部賣れたら日本
の經濟も大分進歩したものと見て是から續々五十二錢を出したらよからうと思ひます。其代りうれなかつ
たら是にこりて定價を御下けなさい。中央公論は六千刷つたさうだ。ほとゝぎすの五千五百は少ないとい
ふて居ました。來月もかけとは恐れ入りましたね。さうは命がつかない。來月は君の獨舞臺で目ざまし
い奴を出し給へ。

雜誌がおくれるのはどう考へても氣になる三十一日の晩位に四方へ廻して一日から賣りたかつたですな
校正は御骨が折れましたらう多謝々々其上傑作なら申し分はない位の多謝に候。

中央公論杯は秀英舎へつめ切りで校正して居ます。君はそんなに勉強はしないのでせう。雜誌を五十二
錢にうる位の決心があるなら編輯者も五十二錢がたの意氣込がないと世間に濟みませんよ。いやはは失敬。
僕試験しらべて多忙しかも來客頻繁。どうか春晴に乗じて一日川があつて帆懸舟の通る所へ行つて遊び

三〇三

たい。夫から東京座の二十四孝といふものが見たい。

今月は新聲でも新潮でも手廻しがいゝみんな三月中に送つて来た。是を見てもホト、ギスは安閑として居てはいけない。然し夫は漱石の原稿がおくれたからだと在つては仕方がない恐縮。

島村の破戒と云ふ小説をかつて来ました。今三分一程よみかけた。風變りて文句杯を飾つて居ない所と眞面目で脂粉の氣がない所が氣に入りました。

何やら蚊やら 以上

四月一日

金

虚 先生

三三三

明治三十九年四月一日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

藝苑毎度御贈にあづかり奉謝候小生は君の作が出るか出るかと思ふて待つて居るが出ない今度もかゝなかつたですか。破戒は二三日前買ひました。先日紅緑が来て破戒の著者は此著述をやる爲めに裏店へ這入つて二年とか三年とか苦心したと聞いて急に島崎先生に對し「て」も是非一部買はねばならぬ氣になりすぐ買つて来ました。是は只買つて来たのです。面白くてもつまらなくても構はない買つて来たのです。夫から半分程よみました。第一氣に入つたのは文章であります。普通の小説家の様に人工的な餘計な細工がない。そして眞面目にすらく、すたく書いてある所が頗るよろしい。所謂大家の文辭の様に裝飾澤山でないから愉快だ。夫から氣に入つたのは事柄が眞面目で、人生と云ふものに觸れて居ていたづらな脂粉

の氣がない。單に通人や遊蕩兒や所謂文士がかき下すものと大に趣を異にして居るからです。まだ後半はよまないから批評は出来ないが恐らく傑作でせう。今迄の日本の小説界にこんな種類のものはないからと思ふのです。只一篇のモチーヴが少々弱いかと思ふ。

輕薄なものばかり讀んで小説だと思つて居る社會にこんな眞面目なのが出現するのは甚だうれしい事と思ふ。

僕多忙採點に窮し來客に窮し。色々なものに窮す。君は金に窮する由。もし必要なら少々取りに來給へ以上

四月一日

金

森 田 兄

僕ホト、ギスに坊ちやんなるものをかく。どうか御序の節よんで下さい。然し到底君がほめてくれさうなものでないから困る。實は藤村先生とは正反對のものです。

三三四

明治三十九年四月三日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ〔はがき〕

破戒讀了。明治の小説として後世に傳ふべき名篇也。金色夜叉の如きは二三十年の後は忘れられて然るべきものなり。破戒は然らず。僕多く小説を讀まず。然し明治の代に小説らしき小説が出たとすれば破戒ならんと思ふ。君四月の藝苑に於て大に藤村先生を紹介すべし

三〇五

明治三十九年四月四日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

春暖の候愈御清適奉賀候小生も一寸伺ひ度と存じながらつい色々な雑用にて御無沙汰致し居候拙文御推賞にあづかり感謝の至に不堪候山嵐の如きは中學のみならず高等學校にも大學にも居らぬ事と存候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候。小生も中學にて此類型を二三目撃致候。サスが高等學校には是程劇しき奴は無之(尤も同類は澤山有之)候。要するに高等學校は校長杯に無暗にとり入る必要なき故と存候。山嵐や坊ちやんの如きものが居らぬのは、人間として存在せざるにあらず、居れば免職になるから居らぬ譯に候。貴意如何。

僕は教育者として適任と見做さるゝ狸や赤シヤツよりも不適任なる山嵐や坊ちやんを愛し候。大兄も御同感と存候。右御禮かたぐい卑見迄如斯に候 以上

四月四日

金

続 石 兄

明治三十九年四月四日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ 「はがき」

畑打ち淡々として一種の面白味あり。人は何だこんなものと通り過ぎるかも知れず。僕は笹の雪流な味を愛す。只學士の妻になり損なつたものが百姓になつて畠を打つ程零落するのは普通でない。「小説家」

といふ文はわる達者である。「寮生活」も多少輕薄也。而も兩篇とも僕の文に似て居るから慚愧の至りだ。これにくらぶれば「素人淨瑠璃」杯の方遙かに面白し。

藤村の破戒といふのを讀んで御覽なさい。あれは明治の小説として後世に傳ふるに足る傑作なり。金色夜叉杯の類にあらず。

五千五百部はうれえましたか、五十二錢が高いと思つたら明星も五十二錢だ。随分思ひ切つたのが居る。其代り明星はうれません。

四月四日

明治三十九年四月十一日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野岡貞綱へ 「はがき」

拜啓其後久々御目にかゝらず。承はれば島津の若さんは病氣の由皆川より少々よい方との報知ありたり。然し何かと御多忙ならん。小生も是から又多忙にとりかゝる。講義をかくのがいやでたまらない。左様な

〔以下細字にて行間に認めあり〕

度々御氣の毒の事なりよろしく御傳可被下候

明治三十九年四月十一日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ

御手紙も小説も届いて只今兩方とも拜見千鳥は傑作である。かう云ふ風にかいたものは普通の小説家に到底望めない。甚だ面白い。強いて難を云へば段落と順序が整然として居らん。第一回の藤さんと瀬川さんの會話が少々振はない。(其代りあとの會話は悉く活動して居る)。最後に舟を望んで藤さんを想像する所は少しくど過ぎる(其代り袂の貝をなける所などはうまいものだ)。夫から法學士との問答もない方がいゝ。繪本の御姫さまは前後ともない方が明瞭である。尤もあれば妙な趣味は生ずる。壁の畫がねけ出すのも考へものだ。以上は僕の感じたわるい方だがそれを除いては悉くうまい。會話といひ所作といひ仕事といひ悉く結構である。一つ二つ取り出して云ふとほかまづい様になるから云はない。總體が活動して居る。僕が島へ遊びに行つて何かかかうとしても到底こんなには書けまい。三重吉君萬歳だ。そこで千鳥を此次のホト、ギスへ出さうと思ふが多分御異存はないだらう。構ひますまいな。尤も緒言はぬく積りだ。

どうか面白いものをもつと澤山かいて屁鉾文士を驚ろかして呉れ玉へ。僕多忙でこまる。昨日から講義をかきかけたら半ページ出來た。講義を書くより千鳥をよむ方が面白い。加計の縁談は破談とやら氣の毒な事だ藤さんでも貰つてやり玉へ。血統なんて構やしないよ。別嬪でゾイオリンが上手ならわるい病氣なんか出やしない。大丈夫なものさ。先祖代々の血統を吟味したら日本中に確たる家柄は一軒もなくなる譯だ。序によろしく 以上

四月十一日夜

三重吉様

金

三三九

明治三十九年四月十一日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より豊町區富士見町四丁目八番地高橋清氏へ

拜啓僕名作を得たり之をホト、ギスへ献上せんとす随分ながいものなり作者は文科大學生鈴木三重吉君。只今休學郷里廣島にあり。僕に見せる爲めに態々かいたものなり。僕の門下生からこんな面白いものをかく人が出るかと思ふと先生は顔色なし。先は御報知まで 艸々

四月十一日

金

虚子先生

座下

三四〇

明治三十九年四月十五日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ

拜啓三日前君に手紙を出すと同時に虚子に手紙を出して名作が出來たと知らせてやつたら大將今日來て千鳥を朗讀した。そこで虚子大人の意見なるものを御参考の爲めに一寸申し上げる
○全篇を通じて會話が振つて居らん。藤さんのホ、が多過ぎる藤さんが田舎言葉で瀬川さんが田舎言葉で掛合をしたらもつと活動するかも知れん(漱石曰く虚子の云ふ所一理あり。然し主人公が田舎言葉でやつつけたら下女や何かの田舎言葉が引き立つまい。但し全篇を通じて若い男女の會話はあまり上出來にあらずと思ふ)

○虚子曰く章坊の寫眞や電話は嶄新ならずもつと活動が欲しい（漱石曰く章坊の寫眞も電話も寫生的に面白く出来て居る）

○女と男が池の處へしやがんで對話する所未だ室に入らず。且つ其景色が陳腐なり（漱石曰く會話はその位で上の部なるべし。池の景色の動靜悉く寫生なり陳腐ならず）

○虚子曰く若い男女が相會して互に思ふはありふれた趣向なり但二日間の出來事と云ふに重きを置いて、それを讀者にわからせる様につとめた所がよし。（漱石曰く趣向は陳腐にもあらず又陳腐でなき事もなし要するに技倆如何にて極る。此篇の大缺點はどうしても作り物であるといふ疑を起す點にあり。然し所々に寫生的の分子多きために不自然を一寸忘れさせるが手際なり）

虚子曰く狐の話面白し全篇あの調子で行けばえらいものなり（漱石曰く全篇大概はあの調子なり）
要するに虚子は寫生文としては寫生足らず、小説としては結構足らずと主張す。漱石は普通の小説家に是程寫生趣味を解したるものなしと主張す。

以上は虚子の評なり。君は固より僕に示す丈の積りだらうが僕以外の人の説も参考に聞く方が將來の作の上に利益があると思ふから一寸報知する。虚子と云ふ男は文章に熱心だからこんな事を云ふので僕が名作を得たと前觸が大き過ぎた爲め却つて缺點を擧げる様になつたので、いゝ點は認めて居るのである。

それで原稿は一度君の許諾を得た上と思つたが虚子が持つて歸ると云つたからやりましたよ。尤も長いから少々削るかも知れない。是も不平を云はずに我慢してくれ玉へ 以上

四月十四日夜

金

三重吉様

三四一

明治三十九年四月十七日 午後十二時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藏中方野村傳四へ

拜啓先達て一寸御話を願つた末松先生の著述は愈本屋が著者と相談の上僕の撰定する人に依頼し度と云ふ事になつた。そこで先づフアンタジー・オフ・ジャパンといふのから始めるさうで是を六月一杯に上梓したいと云ふ見込ださうだ。そこで先方の條件は

○第一、小説風にかいてあるからして、譯文に骨を折つてもらひたい。即ち美文的に譯してもらひたい。

○原稿料は原書の一ページにつき壹圓五十錢拂ふ

○期限は六月十日迄。ページ數は二百四十八ページ

○譯者の名前は出さず。矢張り末松謙澄著とする事

以上の條件故誰か適任者で小使がとり度人はあるまいか。僕も引き受けた以上は幾分か責任が「あ」る。美文的に且間違のない様に期限に仕上げてくれる人でないと困るが君もう一遍心當りを尋ねてくれないか。尤も文體が揃へばあながち一人に限らず二人でも三人でもよし。

僕の希望は小遣の入る人で以上の資格に應ずる人がよからうと思ふ。

先は右相談旁ちよつと御周旋の勞を煩はし度と存候 以上

四月十七日

金

傳 四 兄

明治三十九年四月十八日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地飯中野村傳四へ〔はがき〕
栗原と森田の兩氏が引きうけてくれ、ば結構也。然し論文で青くなつたり黄色くなつたりして居るものがそんな餘裕があるかね。僕は末松先生自身よりもまい文章をかく人を周旋してやると威張つたから幾分か責任がある。二人でやれば文體も揃はなくてはならん。其邊も話してくれ玉へ

明治三十九年四月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ
拜啓先日御面倒を願ひ候藏書箋の儀兩三日前學校にて本日^取に面會の上相渡し候處大悦びにて篤く禮を申し畫料はどの位なりやと申候故心配に及ばず無料にてよろしと申置候實は大兄に聞き合せたる上クラークに返事を致すが順なれど大兄は無論酬報をとらるゝ事なき事と存じて勝手に答へ置き候先は右御禮かたぐ御報迄 艸々

四月十九日

金之助

橋口様

漾虛集はまだ出來ず本屋がむやみに校正を後らす故に候

明治三十九年四月二十八日 午前七時—八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
拜啓毎月清國南京へ送つて頂いたホト、ギスは今月から御やめにして下さい。大將事日本へ歸つて参ります。どうか日本の東京の番地へやつて頂戴。其番地は只今一寸忘れた。

明治三十九年四月三十日 使ひ持歸 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

啓

一金 參拾八圓五拾錢也

一金 壹百四拾八圓也

計 壹百八拾六圓五拾錢也

右は吾輩は猫である(十及び坊つちやんの原稿料として正に領掌仕候也

四月三十日

夏目金之助 ㊦

俳書堂雜誌部

御中

明治三十九年五月三日 午前八時―九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ

〔はがき〕

三二四

寺田寅彦が千鳥をほめて好男子萬歳とかいて來た。四方太が手紙をよこして四方太杯は到底及ばない名文である傑作であると申して來た。僕も是で鼻が高い。あれにケチをつけた虚子は馬鹿と宣告してしまつた。以上

三四七

明治三十九年五月五日 午後四時―五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

君の手紙は昨日拜見仕つた。實は此前二度手紙を出しても返事がないから君は當分手紙をかゝないのかと思つて居たら又突然手紙が來て少々驚ろいた。翻譯の事は實は僕に譯せといふから、未松著で下働きをするなら食ふものに困つた時でなくてはいやだ。然し未松さんより上手な文章家を周旋してくれといふなら教へてやると威張つた結果とう／＼君と栗原君の所へ持つ〔て〕行く事になつた。原稿料が高いつて本屋杯に嬉しい顔を見せてはいけない。壹圓五拾錢ではいやだが夏目からたのまれて仕方がないからやつてやると云ふ様な顔付をして少々本屋を恐れ入らせてやるが、と思ふ。

猫の御批評難有頂戴。もう一回でやめる積で居ますが、忙がしくて書けないから閉口だ。所謂寫實の極致といふ奴をのべつに御覽に入れてアツと驚ろかせる積丈は成算が出来て居る。然し實際驚ろかすのはいつの事か分ない。

坊ちやんも讀んで下された由難有う。君の抗議には降參をしない。ほめてくれた所は賛成であります。大に嬉しいのです。

ホト、ギスの挿繪の攻撃は降參をしてもよろしい。あれは僕のかくのでないから、時々は僕も惡口した

くなる。然し君小杉先生の雲は特別ですよ。あれはたまらないものだ。

左千夫が昌子^原を評したのを明星で「これほど本人の魯鈍を發表せるものなし」とか云ふて居る。左千夫が見たら怒るよ。元來左千夫なんて歌論杯出來る男ではない。只子規許り難有がつて自ら愚なうたを大事さうに作つて居る。

破戒の批評も拜見した。あの位思ひ切つてほめてやれば藤村先生も感謝していゝと思ふ。それでも過ぎたるは何とか云ふなら話せない男だ。詩人ぢやない僞人だ。實は破戒が出て精細な評が出ないから氣の毒に思つて居たが君のを見ると同時に太陽の早稲田文學の讀賣には前後して三回も出たのを見た。かう續々出ればもう澤山だと思ふ。藤村先生瞑して可なり。

君のこんどの手紙はいつものよりも親しい感じがある。是はいつもよりも遠慮がないからだらう。僕論文を見るので中々多忙「坊ちやん」をかく所にあらず。今日漸く古城先生を片付けた。凡て十有九人。傳四の如きは御丁寧に二冊つゝきを呈出して居る。

先達てから食後に腹が痛くつて仕方がない。學生が夫は胃ガンだと嚇したので驚ろいて服藥を始めた。是は慢性胃カタルださうだ。腹が重くて、鈍痛で、脊や胸がひきつて苦しくて生きてるのが退儀千萬になつた。近々人間を辭職して冥土へ轉居しやうと思ふ。

五月五日

野 武 士

白 楊 先 生

藝苑は君もくれるし、社からもくれる。可相成は君から丈貰ふ事にして本社の方は斷はりたい。

三二五

明治三十九年五月七日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ 「はがき」

昨日は近火見舞難有候。あの時やけたら今日は學校を休む筈であつた。

胃カタルで藥を呑むと灰色の糞が出る。不可思議なものだ。ホト、ギスの千鳥を御覽、君より餘つ程うまいぜ。先生一番の奮勵を要す。君のエッセイは英語がまづいね。然し他に御仲間があるから大丈夫だ。然し今少し何とかありたいものだ。意味の通じない所がある。もつと注意して本をよまなくてはいけない

明治三十九年五月七日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ 「はがき」

昨日は近火の處早速御見舞難有候。實は中川、森兩君と寶亭へ行つて夫から九段へ行つて火事の事などは頓と知らず。一時は大分騒いださうだ。何でも知らずに居るのが一番結構だ。人間もいつ死ぬか知らぬいから毎日幅をきかして居るのだね。島津さんはどうかね。 艸々

四月某日

只今手紙着神經衰弱がわるい由。近々人間も辭職して靜養可然か呵々。今少し立つと漾虛集が出来るか一部上げます

明治三十九年五月十六日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ 「はがき」

拜啓寫眞は先日中川君から届けてくれました。難有う。あの寫眞は大理石の像の様には見えない。幽靈の様だ。君の顔や咽喉の所があまりやせて居るせう。是も全く十七八の別嬪の崇と思ふ御用心

明治三十九年五月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より龜町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ

虚子先生行春の感慨御同様惜しきものに候。然る所小生卒業論文にて毎日ギュー「く」閱讀甚だ多忙随つて初拾の好時節も若葉の初纏のと申す贅澤も出來ず閉居の體。加之眼がわるく胃がわるく。散々な體服藥の御蔭にて昨今は腹の鈍痛丈は直り大に氣分快壯の方に候。いつか諸賢を會して惜春の宴でも張らんかと存候へども當分駄目。一寸伺ひますが碧梧桐君はもう東京へは來らんですぐ行脚にとりかゝりますか卒業論文をよんで居ると頭腦が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たくなりませう。決して猫や狸の事は考へられません。僕は何でも人の眞似がしたくなる男と見える。泥棒と三日居れば必ず泥棒になります 以上

五月十九日

金

虚子先生

明治三十九年五月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より伊勢國宇治山田町字浦田町百五十番地湯淺藤孫へ

拜啓此春は伊勢迄行かうと思つて居た所例の如く色々の用事が出來て遂に違約と相成残念千萬に候。此

夏もどこへも出られぬかと思へば存分なき生活なり。新聞の切りぬき御親切にわざわざ御送難有候拙文があんな所へ引き合に出やうとは夢にも思ひ寄せず。随分妙な所で妙な人によまれるものに候。只今卒業論文閲讀中多忙一筆を走らす 失禮御免

五月十九日

湯 淺 様

金

三五三

明治三十九年五月十九日 午後(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區竹早町百二十番地愛知社内中川芳太郎へ

拜啓 一二日前君の論文をよみたり。通篇自家の英語にてかきこなしてある御手際はえらいもの也。英文としてあれ丈にかき上げられ、ば結構なり。感服の至りである。只僕の氣のついたうちに兩三箇所の誤謬あり。コンサーンといふ字の使用法が違つて居る様に記憶す。内容も博引旁證少しも胡魔化しなく頗る立派なものなり。只西洋と日本の比較が有機的に發展してこず。御互に獨立して並んで居る様「な」傾向諸々あるは可惜。然し大體から云ふて大成功である。聊か數言を陳じて敬意を表す。今から十年もあの方面へ向つて進めば日本隨一の學者になれる忘たり玉ふなかれ。老顏余の如きは云ふに足らず新進の士正に銳意斯道の爲に貢獻する所あるべし。〇〇君の論文も頗る面白い。只英語がづぬけてまづいのは困る。

御願の文學論はいそぐ必要なし。面倒なればやめてもよし。僕は是非出版したい希望もない。通讀の際變な事あらば御注意を乞ふ

エッセイは未だ片づかず

五月十九日

金

芳 太 郎 様

三五四

明治三十九年五月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓君の論文は大に短かい而してよく釣合がとれてよく纏つて居るあれはマローの脚本が數に於て少ないのと其數の少ない脚本が三とも同種類の主人公で貫いて居る所爲か又は君の手際がうまいのか。文章も君のかいたのと人のを借りたのとは區別出来る様に思ふが君のかいたと思はれる所が中々面白く出来て居る。但し綴字の間違に亂暴なのがあるのは驚ろいた。第一君の参考書のシモンズ Symons とかくのは餘程輕卒だ夫から時々 delinrate と云ふ言葉があるが是も困る。其他は略。然し大體の上に於て成功で結構であります。

五月十九日

金

森 田 君

五六日中に僕の短篇をあつめたものが出来る。本屋に贅澤を云ふて居たら。出来上つた上が本屋が復讐に大變高いものにしてどうしても是より安くは賣れないといふには閉口した。毎度雑誌を頂戴するから御禮の爲め一部献上したいと思ふ

論文は未だ閱了の運に至らず

三五五

明治三十九年五月十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地蔵中方野村傳四へ

拜啓二宮君の所へ手紙をやりたいが番地が不分明故君に傳言を依頼する。

昨今兩日二宮君の論文をよみたり。泰西の脚本を數多く通讀して材料を種々の方面から蒐集した努力は大したものにて感心の至である。其議論も西洋人杯のいふ事には耳をも貸さず直ちに自己の胸臆を大膽に述べたる所甚だ可なり。但し英文の拙劣にして而も書法のゾンザイなる事甚し。同氏は無論英文をかく了見もあるまいが、あまり亂暴である故折角の論文の價値を下ける事一方ならず

面白い事は中川氏の云ふて居る事と二宮氏の説とある箇所が符節を合する様に暗合した。

五月十九日

金

傳 四 様

三五六

明治三十九年五月二十一日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高橋清氏へ

のせぬ時は御保存を乞ふ

拜啓別紙の如き妙なものゝが參り候筆者は木村秀雄とて熊本に住む人なれど逢ふた事も話をした事もなければ學生やら紳士やら知らず

只今論文校閲中にて熟讀のひまも無之只御高覽の爲めに御廻し致候。ホト、ギスへのせるともよすとも其邊は勿論御隨意に候 以上

五月二十一日

金

虚子先生

三五七

明治三十九年五月二十六日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

拜啓様虚集が出来ました一部あけます。諸々方々に誤字があり誤植がある様だから見當つたら教へて頂戴

人間の價値は何かやつて見ないとどの位あるか分らない。君どうぞ勉強してやつてくれ玉へ。

然し世の中には駄目な事が分り切つて居ても眼が見えないのでうん／＼やつてる奴がある。そんなものは教へてやつても説諭してやつても分りつこない。矢張自分が斃れる迄やつて念晴らしが出来ないと氣が濟まんものである。勝手に覺りがつく迄やらせるがいが、はたから見ると憫然なものだ。是は此間中からたつた一人で感じて居る事だが誰にも云はない。然し文藝上の事でも何でもない。

君にやり玉へといふのは文學の事だ自分で何か作つて見ないとどの位作れるものか自身にもわからない。いくら作つてもそのつぎの自分はどんな風にはられるか決して分るものでないから君も千鳥のあとに萬鳥でも億鳥でも大にかき給はん事を希望する。

僕も漾虚集丈でつきた譯でもないから是から又何ぞかく積りで居る。 以上

三三三

五月二十六日

鈴木三重吉君

先日來卒業論文を漸く讀み了つた。中川のが一番えらい。あの人は勉強すると今に大學の教師として僕杯よりも遙かに適任者^(に)にない。しかも生意氣な所が毫もない。まことにゆかしい人である。只氣が弱いのが弱點である。

三五八

明治三十九年五月二十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

若葉の候も大分深く相成候小生フラチルの單衣を着て得々欣々として而も服藥を二種使用致し居候千鳥の原稿料御仰せの通にて可然かと存候

柳絮行はつまらぬ由、小生もゆつくりと拜見する勇氣今は無之候

漾虛集本屋より既に獻上仕り候や一寸伺ひ候。まだならば早速上げる事に取計はせませす 以上

五月二十九日

金

虚子先生

三五九

明治三十九年五月三十日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓御蔭にて漾虛集も出來ありがたく御禮申上候

借先日願ひ候ブックプレートの依頼者ある美術的に寫したる寫真を見せるから來いと申す故次の日曜日朝參る積に候。もし御同意なら御同行如何本人は君にも見せたと申居候。此男の説によると日本の寫真術はまるで駄目のよし。此男は美術がすきでそんなものを調べる爲め半分來朝丸で日本的の生活を送り居候 御舍兄にも御ひまなら御同行を御勧め申度候。先方の都合は八時半から十二時迄のうちならいつでもよき由〔に〕候八時頃拙宅迄御出被下候へば幸甚 所は巢鴨に候。先は右用事まで 艸々頓首

五月三十日

夏目金之助

橋口 清 様

三六〇

明治三十九年六月三日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓小生近來論文のみを讀んだ結果頭腦が論文的に相成猫などは到底かけさうに無之候へども若し出來るならば七月分に間に合せ度と存候然し是は當人があてにならぬ事故君の方では猶あてにならぬ事と御承知被下度候

薄暑の候南軒の障子を開いて偶然庭前を眺めて居るのは愉快に候。少々眼がわるくて弱はり候。

碧梧桐趣味の遺傳を評して冗長魯鈍とか何とか申され候魯鈍には少々應へ申候。大將はいつ頃出發致候やあれば二年間日本中を巡廻する經畫の由なれど屹度中途でいやになり候。もしやりとければそれこそ冗

三三三

長魯鈍に候。

近來一向に御意得ずたましく机上清閑毛穎子を弄するに堪へたり因つて數言をつらねて寸楮を置二階に呈す 艸々

六月吉日

金

虚子先生

三六一

明治三十九年六月三日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區同心町二十八番地森巻吉へ

拜啓文章世界御送難有候あれは桑木君から僕の事が書いてあると聞いて先日買つて見たものです

僕の小兒の時分は楠正成論とか漢高祖論とかいふのが流行つたものだが今どきの小供は妙な事をかく驚ろいた天下は廣いものだ夏目漱石論を草する中學生があらうとは思はなかつた。

白鳥先生のつとめてやまずんば云々は老先生から奨勵の辭を頂戴した様な感がある實際先方では其つもりなのだらう

近來論文ばかり讀んだので頭腦が丸で論文的になつた此様子では創作杯は出來さうにない然し何も書きかけて居ないと氣樂でいゝ日々是好日といふ語が思ひ合される

此夏は又講義をかゝなければならぬ苦しくて面白くなってきく人もつまらなくて然もやらねばならぬとは馬鹿氣て居る

右御禮旁二三迄 艸々頓首

六月二日

金

森仁兄大人

君が西片町へ轉居するといふ話をきいたが事實ですか

三六二

明治三十九年六月五日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村幹太郎氏へ

拜啓虚集御蔭を以て奇麗に出來上り難有候

却説小生友人にてモリスと申す米國人只今第一高等學校の教師に候處日本の美術書畫に多大の興味を有し諸々方々へ出掛候事樂の様に見受られ候故一度大兄方へまかり出て御所藏の畫幅ことに日本のもの又は支那物拜見の上種々斯道の御話も承はり度と存候が御都合は如何に候やもし御迷惑に無之候は適當の日(日曜ならねば午後)御指定被下聞敷や尤も此男は非常のバンカラで萬事日本流に振舞ひ居候へば接待等の點については寸毫の御懸念無之候先は右御都合御うかゞひ迄 艸々不一

六月五日

金之助

不折居士

案下

明治三十九年六月七日 (以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

昨夜君の所へ手紙をかいた處今朝君のを受けとつたから書き直す原稿料は遠慮なく御受取可然。小生杯は始めからあてにして原稿をかきます

漾虚集の誤字誤植御親切に御教示を蒙り難有候。實は僕も訂正の積で一度よんで誤の多いので驚ろいた位人が見たら定めし見苦しき事なるべし御蔭にて僕の見落したる分を大分直す事が出来て結構だ。どうか序にあとも教へて下さい

君は九月上京の事と思ふ神經衰弱は全快の事なるべく結構に候然し現下の如き愚なる間違つたる世の中には正しき人でありさへすれば必ず神經衰弱になる事と存候。是から人に逢ふ度に君は神經衰弱かときいて然りと答へたら普通の徳義心ある人間と定める事に致さうと思つてゐる

今の世に神經衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の輕薄に満足するひやうろく玉に候。

もし死ぬならば神經衰弱で死んだら名譽だらうと思ふ。時があつたら神經衰弱論を草して天下の犬どもに犬である事を自覺させてやりたいと思ふ。

大分あつたなつた。拙宅疊替なり。書齋をかへる時は大騒ぎ中川先生と今一人を手傳にたのみたいと思ふ 艸々不一

六月六日

金

三重吉様

三六四

明治三十九年六月七日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地中野村傳四へ (はがき 全部六朝風の文字にて認めあり)

啓上來る九日頃愈書齋の疊替を仕るにつき手傳に御出掛願候右用事迄 早々頓首

三六五

明治三十九年六月八日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より神田區三崎町三丁目二番地前田儀作氏へ

拜復漾虚集一部進呈仕候處わざ「く」御禮にて痛入候實は毎度白百合を頂戴仕り候につき聊か御禮のしるし迄に机下に呈し候までの處御通覽被下候よしにて此上なき仕合に候。然る處校正疎漏にて到る處に誤字誤植有之無かし御目ざはりの事と存候

破戒は小生も數日かゝりて通讀致候あれは文章にてよませる小説では無之又局部々々の活動にて面白がらせる小説にも無之辛抱して仕舞迄よませて後感心させる作と存候小生も一いきにはよみかね候へども通讀して感服致候。愚考にてはあれは慥かに明治の作物として後世に傳ふべきものと存候尤も局部々々の刺激を求むる人にはよみ通す事少々如何あらんかと存候

拙作につき御褒辭を賜はり難有奉謝候去れど拙作中には破戒程の大作は無之尤も趣の違ふもののみ故此方が大兄の嗜好に投じて却つて分外の仕合せと相成りたるやも計りがたくと存候呵々先は右御挨拶迄 草草不一

六月七日夜

金之助

林外詞 兄

三六六

明治三十九年六月十九日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ 「はがき」
漾虚集の誤植御報知難有候三版には大分正さねばならぬ。
神經衰弱論をかゝうと思つて居る。僕の結論によると英國人が神經衰弱で第一番に滅亡すると云ふのが名論だらう。いづれ出たら讀んでくれ玉へ

三六七

明治三十九年六月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地敷中方野村傳四へ 「はがき」
正は勝たざるべからず、邪は斃れざるべからず。犬は殺さざるべからず。豚は屠らざるべからず、猪子才は頼首せしめざるべからず。文は作らざるべからず。書は讀まざるべからず。月給は貰はざるべからず。御馳走は食はざるべからず。試験はしらざるべからず。人世多事

三六八

明治三十九年六月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ
拜啓末松の譯完結の由本屋よりも其旨申來候原稿料も御受取のよし承知致候末松先生外題を改めて夏の

夢日本の面影としたさうだ。何だか本郷座でやりさうぢやないか。青萍先生も存外話せない男だ

論語を御よみの由小生は丸で忘れたりニーチエと論語とを比較して見給へ。兩人共人間である。

口述試験に慘憺たるものは君のみにあらず。學問の出來る中川と平然たる傳四とを外にしては大概は慘澹たるものである。サンタン豈君のみならんや。試験官たる小生が受験者とならば矢張りサンタンたるのみ。僕はあの試験をして深く感じた事がある。多數の人は逆境に立てば皆サンタンたるものだ。得意の境に立てば愚うたらたる小生の如きものも亦普通の試験官たり。人間を見るのは逆境に於てするに限る。得意に居る奴を見ると大に買ひ被る。常人自身が買ひ被つて居る。氣の毒なものである。逆境を踏んだ人は自ら修業が出來るサンタンたる諸先生も毎日試験を受けて居れば立派な人になれる。天の禍を下す、下せる人を珠玉にせんが爲めなり。禍はないかな。禍はないかな。天下に求むべきものありとすれば禍のバーゲトリなり。

今一つ感じた事がある。純文學の學生は大抵神經衰弱に罹つて居る。是は二十世紀の潮流が自然學生を驅つてこゝに至らしめたるか又は神經衰弱ならざれば純文學が専門に出來ぬのか。未だ研究せず。諸君既に神經衰弱なれば試験官たる拙者の如きは大神經衰弱者ならざるべからず而も常人自身は現に神經衰弱を以て自任しつゝあり。神經衰弱なるかな。神經衰弱會を組織して大に文運を鼓吹せんとす白楊先生以て如何となす。 頼首

六月二十三日

金

白楊先生

明治三十九年六月二十六日 午後十二時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓本日は御來訪の處不在にて失禮致候其節は存じも寄らぬものを山妻へ御惠投被下難有候是は定めて翻譯周旋の御禮と存候があつた位な事で御禮は入らぬ事に候小生はあの事件の爲めに時間も頭腦も使つて居らぬ上に友人の爲めにか程の勞をとるは小生の地位として當然の事と存候もし氣が濟まねば鹽煎餅の一袋でも頂けばよかつた君方に十圓と申す金は卒業後の今日大變な價値ある金に候小生に在つては(山妻に在つてはどうか知らず)左程大金ならず。もらつて文句を並べては濟まないが事實は右の通りである。他人への義理ならばとく別三年間顔を見合せたる小生に對しては入らぬ御心配に候。

尤も僕の妻は慾張りなれば定めて嬉しい事と存候。妻の考では君方は既に卒業したのだから大變な金持になつたのだらう位に考へて居るならんと存候。

先は右御禮旁小言迄一言申入候。いづれ其うち拜眉萬縷可申述候。卒業後の經營は口述試験よりも數倍慘怛たるものに有之べく候へば御用心の上しつかり御やり可被成候 以上

六月二十六日

夏目金之助

森田米松様
栗原元吉様

明治三十九年七月三日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

啓上其後御無沙汰小生漸く點數しらべ結了のう／＼致し候。昨日ホト、ギスを拜見したる處今度の號には猫のつゞきを依頼したくと存候とあり候。思はず微笑を催したる次第に候。實は論文的のあたまを回復せんため此頃は小説をよみ始めました。スルと奇體なものにて十分に三十秒位づゝ何だか漫然と感興が湧いて參り候。只漫然と湧くのだからどうせまとまらない。然し十分に三十秒位だから澤山なものに候。此うち此漫然たるものを一々引きのばして長いものに出來かす時日と根氣があれば日本一の大文豪に候。此うちにて物になるのは百に一つ位に候。草花の種でも千萬粒のうち一つ位が生育するものに候。然しとにかく妙な氣分になり候。小生は之を稱して人工的インスピレーションとなづけ候。小生如きものは天來ノインスピレーションは柵の御牡丹と同じ事で當にならないから人巧的ニインスピレーションを製造するのであります。近頃は器械で卵をかへすインキュベーターと云ふものがあります。文明の今日だから人爲的インスピレーションのあるのも尤でせう。そこで此七月には何でも四篇ばかりかく積りです。前に云ふ漫然たる惠比壽ぎれの様なもの雲の如くあるが儲まとまつたものは一つもない。どれを纏めやうか、又どう纏めやうか其邊は未だ自分でも考へて居ないのであります。實は來學年の講義を作らなければ大雄篇をかくか大讀書をやる積りだが講義といふ奴は一と苦勞です。是は八月に入つてからかき出す積りです。

傳四は文學士になり候。小生も文學士に候。して見ると傳四と僕とは同輩に候。同輩である以上は是から御馳走の節は萬事割前に致さうかと存候。

小生は生涯に文章がいくつかけられるか夫が楽しみに候。又喧嘩が何年出来るか夫が楽しみに候。人間は自分の力も自分で試して見ないうちは分らぬものに候。握力杯は一分でためす事が出来候へども自分の忍耐力や文學上の力や強情の度合やなんかはやれる丈やつて見ないと自分で自分に見當のつかぬものに候。古來の

人間は大概自己を充分に發揮する機會がなくて死んだらうと思はれ候。惜しい事に候。機會は何でも避け

ないで、其儘に自分の力量を試験するのが一番かと存候
坊ちゃんを毎號御廣告に相成るのは恐れ入りましたね。しかも坊ちゃんが下落して四十錢になるに至つ

ては愈恐れ入りましたね。まだ大分残つて居ますか。
猫を英譯したものがありません。見てくれと云ふて郵便で百ページ許りよこしました。難有い事でありま

す。然し人間と生れた以上は猫杯を翻譯するよりも自分のものを一頁でもかいた方が人間と生れた價値が
あるかと思ひます。
小生は何をして自分は何流にするのが自分に對する義務であり且つ天と親とに對する義務だと思ひ

ます。天と親がコンナ人間を生みつけた以上はコンナ人間で生きて居れと云ふ意味より外に解釋しやうが
ない。コンナ人間以上にも以下にもどうする事も出来ないのを強ひてどうかしやうと思ふのは當然天の責
任を自分が脊負つて苦勞する様なものだと思ひます。此論法から云ふと親と喧嘩をしても充分自己の義務
を盡して居るのであります。天に背いても自分の義務を盡して居るのであります。況んや隣り近所や東京
市民や。日本人民や乃至世界全體の人の意思に背いても自分には立派に義理が立つ譯であります。是では
ちと氣餒が高過ぎましたね。少々ひまになつたから餘計な事を書きます。

昔はコンナ事を考へた時期があります。正しい人が汚名をきて罪に處せられる程悲惨な事はあるまいと。
今の考は全く別であります。どうかそんな人になつて見たい。世界全體を相手にしてハリツケにでもなつ

てハリツケの上から下を見て此馬鹿野郎と心のうちで輕蔑して死んで見たい。尤も僕は臆病だから、本當
のハリツケは少々恐れ入る。絞罪位な所でいゝなら進んで願ひたい。
四方太先生愈々文章論をかき出しましたね。あれを何號もつゞけたらよからう。尤も文章論と申す程な

筋の通つたものではない全く文話といふ位なものですな。鳴雪老人のは例によつて讀みません。漾虛集を
御批評下さつてありがたい。ことに野菜づくしはありがたい。中央公論にね大魚に呑まれたる人といふ小
説がありますよ。伊藤銀月といふ人のかいたものです。随分妙な事をかきますね。然し中々新しい形容の
言葉があつて刺激の強い文章です。序に讀んで御覽なさい。
色々かきましたね。いくらでもかけばいくらでも書けるがまづよしませう
どうです一日どこかで清遊を仕らうぢやありませんか 頓首

七月二日

夏 金 生

虚子 大人

明治三十九年七月十一日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區音羽八丁目二十三番地森次太郎氏へ

昨日は失敬致候

御尋ねの〇〇〇と申す男は昔は小生の同級生に候今は高等學校で同僚に候然し近來殆んど交際せず從
つて此頃の同氏の人世觀其他一向承知仕らず候。又嫁をとる意向あるや否やも知らずとる積りならとくに
もらふた筈と存候

女子大學の教師中には懇意のもの無之只大塚保治といふ人を知つて居り候

高著出版の件小生の出来る事なら本屋へ一二軒は聞いて見てもよろしく候

妻君の御馳走が出来損つて御病氣は風流に候自分で粥をにて食ふ杯は猶々風流に候下女を使はぬも風流

に候。小生先日下女兩名を一時に解雇し面倒だから雨戸を開放して寐た事有之候。下女が出来ねば毎晩戸を立てないで、三度共パンを食つて掃除もしないでいつ迄も暮す積りに候ひし處又下女が兩名出来た爲め折角の計畫も無駄に相成候

先は右御返事迄 勿々頓首

七月十一日

夏目金之助

森 次太郎様

明治三十九年七月十七日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ (はがき)

拜啓猫の大尾をかきました。京都から歸つたら、すぐ来て読んで下さい。明日は所勞休みだから明日だと都合がい、

十七日

明治三十九年七月十八日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

御手紙拜見川へ行つて鮎をとるのは面白いだらう僕も隨行の榮を得たい。猫の大尾をかいた。八月のホト、ギスには出るだらうと思ふから讀んでくれ玉へ夏は閑靜で奇麗な田舎へ行つて御馳走をたべて白雲を見て本をよんで居たい。大磯や箱根は大きらひ あつくになるとほんやりして氣が遠くなるそこへ人が来て

のべつに入れ替り攻撃をやると到底持ち切れない。御客から見たら病人か厭世家の様だらう。文章もかき上げると愉快だがかいてるうちは苦しいものだ。

胃が堅くなる。外の事は何にも考へられなくなる。一大心配が出来た様な氣がする讀書はこれ程熱心になれないのはどう云ふものだらう

來月は講義をかゝなければならん。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考へると大學は辭職仕りた

い。薙露行を大變面白がつてくれる青年が往々ある。ある人手紙を寄せて薙露行の一篇吾に於て聖書よりも尊しとかいてきた文士の名譽も此に至つて極まる譯だ。然しあんなものは發句を重ねて行く様な心持ちで骨が折れて行かない

僕も國があつて山があつて河があつて家があつて最後に金があつたら嘸よからう。然らずんば胃病で近

近往生可仕候 頓首

夏目金之助

七月十七日

小宮豊隆様

御ばゞ様の御病氣を大事になさい。御母さんによろしく

明治三十九年七月十九日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
昨日は失敬其節御話し致候ホト、ギスの寄贈所は小石川區久堅町七十四番地五十二號菅虎雄方に候間宜
敷様御取計願上候 以上

七月十九日

三三五

明治三十九年七月二十日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區市ヶ谷藥王寺前町二十番地早稲田文學社内片上神氏へ
拜啓先日は失禮致し候兩度の御高來の節何か勝手に申述候雜談をわざ／＼早稲田紙上御掲載相成度由に
て原稿御廻付相成候には一寸閉口致候本來なら御斷りを致したき筈なれども折角の御勞力を無にするも失
禮と存じ貴意の通に可仕候尤も貴稿は一應拜見不穩當と思ふ所など訂正致し候間右はあしからず御海恕被
下度候 頓首

七月二十日

夏目金之助

片上 伸 様

三三六

明治三十九年七月二十四日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區竹早町百二十番地愛知社中川芳太郎へ
毎々御面倒相願候處早速神田の方へ御送り被下候よし多謝の至り、いづれ印稅が這入つたら何か御馳走
可致候

學校を卒業して一日のうち世の中が恐ろしくなつたから是から餘程注意を周密にする由結構に候
然し周密と云ふ意味に上等と下等あり。自己の智力にて出來得限り考へ、自己の感情にて出來得る限り
感じ。而して相手と自己とに不都合の破綻なき様に上等といひ。只人を見て泥棒の如く疑ひ何でも
コソ／＼に先を制する様な事得意にする是を下等の周密と云ふ。

君の感じたるは如何なる方面に於ての意味なるやを知らず。もし前者ならば賢の方へ一歩進みたるなり。
もし後者ならば愚の方へ一歩進みたるなり。世上幾多の才子は愚に近づきつゝ自ら賢に進むと思へり。利
害の關係なき三者より忌憚なく是等の人を評して見よ。學校に居るうちの方が遙かに上等にして卒業して
世の中に居る時の方が餘程下等なり。而も自らは頗るワイズになつたと考ふる人多し。是程いやな現象な
し。

世の中が恐ろしき由、恐ろしき様なれど存外恐ろしからぬものなり。もし君の弊を言はゞ學校に居るときよ
り君は世の中を恐れ過ぎて居るなり。君は家に居つておやぢを恐れ過ぎ。學校で朋友を恐れ過ぎ卒業して
世間と先生とを恐れ過ぎ。其上に世の中の恐ろしきを悟つたら却つて困る位なり。恐ろしきを悟るものは用
心す。用心は大概人格を下落せしむるものなり。世上の所謂用心家を見よ。世を渡る事は即ち是れあらん。
親友となし得べきか。大事を托し得べきか。利害以上の思慮を闘かはすに足るべきか。

世を恐るゝは非なり。生れたる世が恐ろしくては肩身が狭くて生きて居るのが苦しかるべし。
余は君にもつと大膽なれと勸む。世の中を恐るゝなとすゝむ。自ら反して直き千萬人と雖われ行かんと
云ふ氣性を養へと勸む。天下は君の考ふる如く恐るべきものにあらず、存外太平なるものなり。只一箇所
の地位が出来るか出來ぬ位にて天下は恐ろしくなるべきものにあらず。どこ迄行つても恐るべきものにあ
らず。免職と増給以外に人生の目的なくんば天下は或は恐ろしきものかも知れず。天下の士、一代の學者

はそれ以上に恐ろしき理由を口にせずんば耻辱なり 勉旃勉旃

七月二十五日

芳太郎様

金

三三八

三七七

明治三十九年七月二十八日 使ひ持参 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區久堅町七十四番地五十二號菅虎雄氏へ
拜啓昨夜紀元會に出席々上君の奥さんの病氣の由をきゝたり随分御大事御攝養可然候小生只今さしかゝりたる用事あり見舞にあがらず。

毎月御返却の金子は君が避暑に出掛けたかと思つて今日迄控へて居た。遅延の段失敬。
金貳十圓は七八月兩月分なり御查收を乞ふ 頓首

二十八日

金

虎雄様

三七八

明治三十九年八月三日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ
御手紙拜見昨日来てあれ文話した上今日六錢印紙を張つて手紙をよこす人は減多にあるまいと思ひながら読んで見ると第一が猫の攻撃は多数決だから已を得んとあきらめて後世に知己を待つより外に仕方な

し

作文編輯につきての御注文は虚子へ文通致し置くべく墨汁一滴の著者へは申してやれぬからは是も虚子で間に合して置くと致す。猫に至つては悉く御取りになつても差支なし

夫から尊稿出版の件は其うち本屋がき次第談判にとりかゝるべく候何とも受合はれないが。来た奴を一人一人つらまへる事に可致然し内容をもう少し知らないと言明に困るがね。

君に御辭儀をしたものは正に僕の妻にして年齢は當年三十。二十五六に見えたと申し聞かしても喜びさうもないから話さずに置く。僕の妻にしては若過ぎるとは大に此方を老人視したものだ

寒月先生は神經質にして仙骨あるもの。彼は僕に向つてすら丁寧に御辭儀をしたる事なし況んや愚妻に於てをや

古語を復活せる新體詩人に付て大に激昂の體御尤も千萬の様なれど實は小生未だ同君の詩を讀まず従つて毫も癪にさはらず

今日春陽堂の本多嘯月先生催促かたゞ御來訪になる。僕唯々として汗をかいて原稿紙へ向ふ。中々苦しい。しばらくして春陽堂よりカクザトウ一罐暑中見舞として来る

今度の小説の一部分はあるひは御氣に召すかも知れず實は君位が御氣に召さないと天下氣に召し手がなくなるだらうと思ふ。漱石先生虚名を擁して毎月知己を後世に待つ様では惘然なり 艸々頓首

八月三日

金

白楊先生

三三九

三七九

明治三十九年八月三日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔封筒裏の署名に「なつめきむのすけ」とあり〕

拜啓岩梧桐の送別會へはついに知られず失敬致候。文學士森田白楊なるものあり小生の教へた男なるが今度作文の本を作るとかにて墨汁一滴のなかを二三滴君の文を一篇、僕の猫を一頁程もらひ度と申してきたり。どうか承諾してやつて下さい。

寒月來つて今度の猫を攻撃し森田白楊之に和す。漱石之に降る。
只今新小説の奴を執筆中あつてかけまへん。 艸々の頓首

八月三日

金 奴

虚 子 庵
二階下

三八〇

明治三十九年八月五日 午前十時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より上野區伊香保温泉蓬萊館野間眞綱へ〔はがき〕

むかし伊香保へ行つて人の家根ばかり見てくらした事あり。君は今雲を見てくらして居るだらう。今小説をかいて居る 多忙

三八一

明治三十九年八月五日 午前(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より名古屋市西瓦町百〇五番戸中川芳太郎へ

おとつさんが御病氣で血を吐かれたさうな嘸御心配の事である其うちどうにかよくなるだらうから安心して越路でも聞いて心配せずに御出でなされ。色々卒業していやな事ばかりでくさくさするだろが其うち面白い事も出て来るだろ長い手紙を上げたいが今新小説の小説をかきかけて期限がせまつてひまがないから是丈にします 艸々

八月五日

金

よ た さ ま
御許

三八二

明治三十九年八月五日 午前十時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓
虚子の返事に云く拙文おやくに立てば冥加至極に存じ上げ奉ります。墨汁一滴も差支無いことと信じます
生田先生は現代の知己なり先生の朗讀四十點猫の文章二十點併せて六十點にて及第の事と存候
新小説未だ脱稿せずあつてかけまへん

中川の芳太郎君の御とつさんが咯血をしたと云ふて寄こした。不相變心配して居る事だらうさうかと思ふと越路太夫をきゝに行つたとある 艸々の頓首

八月五日

金

ナツール・ゲシヒテ様

三八三

明治三十九年八月六日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

早速御返事をかく也漾盧集の評はすぐさま拜見どうもあゝ長くかいてくれた御親切は甚だかたじけない天下の評中あの位詳細なのはないと深く感銘仕る譯である。今少し何とかわかる口をかく方がよからうと存候人格論は僕も至極賛成に候。然し僕のばかりが必ずしも人格を發揮した作物でもあるまい。但主義はいつも御話する通り文章を作るのは腹藝で筆藝ではないから腹をこしらへてかゝらねば駄目といふ也君と同論の様に思ふ如何

ほかの人の評と夜雨君の作は新小説をかいてからのりと讀む積りなり。手紙が來ても邪魔にはならず。生田先生の辯解とくと拜承。序に申候漾盧集は春水漾盧碧といふ句より來る。御三君の文集の名は頗る洒落たものなり

小生千駄木にあつて文を草す。左右前後に居るもうろくども一切氣に喰はず朝から晩迄喧嘩なり此中に在つて名文がかけぬ位なら文章はやめて仕舞ふ考なり。此間にあつて學問が出來なければ學問はやめて仕舞ふなり。手紙の十本や二十本來たつて詩想が妨げらるゝ様なデリケートな文章家にあらず。喧嘩をしつ

つ、勉強をしつゝ、文章をかきつゝ、もうろくどもがくたばる迄は決して千駄木をうつらずして、安々と往生仕る覺悟なれば君が夜中遊びにくる位の事は何でもなく候。
いゝ年をしてこんな事を云ふと笑ふなかれ僕の妻は御覽の如く若きが故に亭主も中々元氣がある也 先は其丈

八、六

金

白楊先生

三八四

明治三十九年八月七日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳郡太郎氏へ

拜復商業學校はどの邊なりや又學士でなくてはならぬにや實は一二年前の卒業にて久しく周旋をたのまれたる男あり然し是は撰科なり語學は比較的本年の卒業生のあるものよりも出来る也。新學士の地方行は先達迄一名ありし所只今長岡へ交渉中なりもしまともらずば此方へ相談してもよろし但し語學が特別えらいと受合かね候

東風君苦沙彌君皆勝手な事を申候夫故に太平の逸民に候現實世界にあの主義では如何かと存候御反對御尤に候。漱石先生も反對に候。

彼等の云ふ所は皆眞理に候然し只一面の眞理に候。決して作者の人世觀の全部に無之故其邊は御了知被下度候。あれは總體が諷刺に候現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ猫中に收め候。もし小生の個性論を論

文としてかけば反対の方面と雙方の働らきかける所を議論致し度と存候

來九月の新小説に小生が藝術觀及人生觀の一局部を代表したる小説あらはるべく是は是非御讀みの上御批評願度候。是とても全部の漱石の趣味意見と申す譯に無之其邊はあらかじめ御斷はり申候未だ脱稿せず十日切迄に是非かきあぐる積夫故どこへも行かず夏籠の姿御無沙汰御ゆるし可被下候

八月七日

金

芥舟先生

三八五

明治三十九年八月(日附不明) 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より鹿兒島縣肝屬郡高山村野村傳四へ (はがき)

傳四さん田舎は面白いだらう。東京も面白い。此年の土用は存外涼しい。毎日眠氣さましに近所の下等野郎を罵倒してやる。是から十年もかゝるうちには彼等は少々は上品の何物たるを解するに至るだらう。ほくは慈悲の爲めに千駄木に永住する也 艸々。執筆多忙。九月に逢ひましょ

三八六

明治三十九年八月十日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ (はがき)

先達は手紙をありがたう。牛の胃袋の話を二三行かりました。九日迄連日執筆この兩三日休養夫から講義をかく。人生多忙。

八月十日

三八七

明治三十九年八月十日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ (はがき)

先刻はありがたう存じます。其節の馬の鈴と馬子唄の句は

春風や惟然が耳に馬の鈴

馬子唄や白髪も染めでくる、春

と致し候、矢張り同程度ですか

三八八

明治三十九年八月十一日 午前十時—十一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ (はがき)

拜啓昨日の駄句花嫁の馬で越ゆるや山櫻を、花の頃を越えてかしこし馬に嫁と致し候が御賛成下さい。是は几董調です。前のと伯仲の間だと仰せられては落膽します。

『御前が馬鹿なら、わたしも馬鹿だ。馬鹿と馬鹿なら喧嘩だよ』今朝かう云ふうたを作りました。此人世觀を布衍していつか小説にかきたい。相手が馬鹿な真似をして切り込んでくると、賢人も已を得ず馬鹿になつて喧嘩をする。そこで社會が墮落する。馬鹿は成程社會の有毒分子だと云ふ事を人に教へるのが主意です。先づ當分は此うたつてゐます。小説にしたらホト、ギスへ上げます

三八九

明治三十九年八月十二日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より山口縣玖珂郡由宇村三國屋鈴木三重吉へ (はがき)

君は一人で大きな屋敷に居るよし。御大名の様でよからうと思ふ。僕例の如く多忙長い手紙をかく餘暇なし。君文章をかきたいならどん／＼御かきなさい。書いてくれるければ其時修養がたりないとか何とかはじめてわかる也。かゝないうちはどんな名作が出来るかわからん。何でもどんどんやるべしと存候

三九〇

明治三十九年八月十五日 午後零時—二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市大手町二丁目井原市次郎氏へ

拜啓廣島の寫真種々御惠送にあづかり本日落掌難有御禮申上候、あの寫真は皆面白くながめ暮らし候新聞の井原氏は大兄の御舎弟のよしそれはちつとも知りませんでした尼子さんは四郎と云ふ名です同町内に居ていつでも厄介になります。先日逢つたら飛んだ所へ引合に出されたと申されました。迷亭と云ふ男は定てありません。苦沙彌は小生の事だと世間できめて仕舞ました。寒月といふのは理學士寺田寅彦といふ今大學の講師をしてゐる人ださうです。是も世間がさう認定したのです。尤も前齒は缺けて居ます。寫真拜受難有候。御顔を見て始めて思ひ出しました。全くあなたとは固と御話しをした事がありますね。然し銅貨を落したのは慥かにあなたではありません。もつと脊の高い瘠せた人の様に思ひます。あなたは寫真では大變色が白いが小生の記憶ではもつと黒いと思ひますどうですか。尼子さんに逢つたらあなたの御話しをしませう。斗作先生に御文通の時小生の事をきいて御覽なさい。倫敦の時の事で何か面白い事を御話しなさるかも知れません 頓首

八月十五日

夏目金之助

井原様

三九一

明治三十九年八月二十六日 午前十時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ (はがき)

先達ては久々に御出での處生憎用談中にて失敬あの晩は十時半頃迄かゝつた夫から森田に飯を食はせたら十二時少し前になつた君等は引きとめられた上飯を食ひそくなつて定めし空腹であつたらう返子の様子御しらせ被下難有候先「は」御禮迄 草々

(以下行間に朱書)

昨日傳四瓢然歸來。大島紬を二反もつてくる。但し御見やけにあらず。暴風雨にて垣愈危うし。講義は一頁もかゝず。北郷先生はもう歸りましたか

三九二

明治三十九年八月二十七日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より大分縣臼杵町平清水野上豊一郎へ (はがき)

御自製の繪端書難有存候江渺々一帆を張つて行きたい方へ行つて見たく候。休暇中毎日來客是でも中々多忙なるには驚き候。書生、青年、雜誌屋、本屋を除いては全く蝸廬を訪問するものなし妙な生活に候。夫で澤山に候。夫も多過ぎる位に候。

三九三

明治三十九年八月二十八日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ



大坂ノ滑稽新聞所載
の寫し。
學生がキリヌキを送
つてくれた

夏だから客はないと思ひの外毎日々々繁昌で樂々晝寐も出來ず閉口してゐるうち八月も御仕舞になつて大に驚ろいて弱つてゐる實は講義を一ページも書いてゐない。然し而して十月一日發行の中央公論にかく約束がある進退に窮する譯であつて見れば講義は容易には始まりさうにもない。まづ以て十五日以後二十以内と見當をつけて御出京可然候。今日狩野亨吉先生に京都の模様をきいたら京都の法科大学杯は十月中旬から開講するさうだ随分のんきなものである。僕も其うち東京の文科大学で十二月位に開講して見様と思ふ。

猫の批評こま／＼難有候苦沙彌と迷亭の比較御尤に候。あれで一段落ついてまづ安心致し候。然し出來るならばあんな馬鹿氣た事を生涯かいてゐたい。それでないと。腹へつめたものがもたれて困る。猫の十一を非難せるもの二人ばかりありたりその一人の曰く終りの方の文明の議論が人によつて調子が變つてゐない。迷亭が喋舌つても苦沙彌が述べても同じ語氣であると。御尤もなる攻撃に候。

今度は新小説にかいた。九月一日發行のに草枕と題するものあり。是非讀んで頂戴。こんな小説は天地開闢以來類のないものです(開闢以來の傑作と誤解してはいけません) 今度の中央公論へは何をかゝうと思ふてゐる。今日は久し振りで朝から晩迄外出方々あるいてくたびれた。 艸々

八月二十八日

なつめ金

小宮豊隆先生

三九四

明治三十九年八月三十日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區翠平町二番地朝陽館野間真綱へ 「はがき」
拜啓草枕を明治文壇の最大傑作といふてくれる人はたんとあるまい。普通の小説の讀者は第一つまらな
いと云ふて笑ふだらう。だから新小説に氣の毒である。謹んで高評を謝す

三九五

明治三十九年八月三十一日 午前十時—十一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より總町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
先生驚ろきましたね僕の第三女が赤痢の模様で今日大學病院に入院したといふ譯ですがね。ことによる
と交通遮断になるかも知れませんが。小供の病氣を見てゐるのは僕自身の病氣より餘程つらい。しかも死ぬ
かも知れないとなるとどうも苦痛でたまらない。もしあの子が死んで一年か二年かしたら小説の材料にな
るかも知れぬが傑作杯は出來なくても小供が丈夫でゐてくれる方が遙かによろしい。到底草枕の筆法では

行きません。

猫の代正に頂戴難有候漠然會なるものが出来るよし出られ、ばい、が。
新小説は出たが振假名の妙癡「奇」林なものには辟易しました。ふりがなは矢張り本人がつけなくては駄目ですね。

もう九月になる講義は一頁もかいてない。中央公論は何をかいたものやら時間がなさ、うだ。是で小供の病氣がねるれば僕は何も出来ない。中央公論には飛んだ不義理が出来る。
然し交通遮断は一寸面白い。あまり人がきすぎて困るからたまには交通遮断をして見たいと思ひます。
野間先生が草枕を評して明治文壇の最大傑作といふて来ました。最大傑作は恐れ入ります。寧ろ最珍作と申す方が適當と思ひます。實際珍といふ事に於ては珍だらうと思ひます

八月三十一日

金

虚子先生

三九六

明治三十九年九月二日 夕 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地中野村傳四へ
拜啓別紙の通り通知有之候處拙宅では三女が赤痢で入院中交通遮断なり（尤も内々では出る）然し棄てて置いてもわるいと思ふから若し時間の餘裕があるなら君僕の代理に會葬してくれ玉へ。右用事迄 艸々
病人は助かりさうである。金は入りさうである。講義はかけさうもないのである。中央公論はか、ねばならぬ様である。

九月二日

夏目金之助

野村傳四様

三九七

明治三十九年九月二日 夜 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十番地寺田寅彦へ

嵐拜見先づ面白い方に候

結末の五六行は大家に候。あれ位短かくしてしかもあれを仕舞に置く所が尤もよろしく候。短篇は是で持つものに候。ドーデ杯はこの呼吸を心得た人に候。君もこの呼吸を心得た人に候。

嵐の前の景色よろしく候。あとの景色もよろしく候。只肝心の嵐が一向引き立たぬ氣が致し候。今少し何とかしたら凄くなつたらう。又熊公の嵐後の様子が反映してよろつたらう。

「海は地の底から重く遠くうなつて来る」の一句既に時間を含んで居るのみならず。既に嵐の経過を豫期せしむる如き書方である。此好句を冒頭に置きながら其つぎの節から一節毎に嵐の吹き募る模様を漸深く切り込む様に書か（即ち時間的に）ないのは残念だと思ふ。

嵐の一篇はホト、ギスに透つてよければ僕から送ります。虚子は不相變贊辭を呈する事と存候

草枕については大部諸方から贊辭を頂戴した。大概は端書でほめてくれる。碧梧桐も旅行先から端書をよこした。同人の事だから必ずあとにわる口がついてゐる。曰く警句は多いが皆川の流れの如く同傾向であるから仕舞には警句の用をなさぬと。説明を承はらんから意味が分らない。

昨夜巡查と衛生員と東京市の醫員と小使が二人來て清潔方を施こして行つた。今日は警察醫が健康診断

をしに來た。六日迄外出を禁ずるのださうだ。四方太が來て話して行つた。僕は病院へ見舞に行つた妻は湯に入つた。是ならどことが交通遮斷か分らない。

病人は大分よろしいまあ助かりさうだ。其代り大分金が入る。今日一日何もせんで中央公論の趣向を考へてやつたが別段名案も浮ばない一寸したもので御免蒙らうと思ふ。

一昨日新小説の男が來て今度の號は二十七日に出て二十九日に賣り切れたから廣告をやめたと云ふた。おどされて買つたものゝうち讀んでつまらんものだと思ふたものが大部あるだらうと思ふと氣の毒だ。覇王樹の處は虚子が大にほめて呉れた所だ 以上

九月二日夜

金

寅 彦 様

三九八

明治三十九年九月三日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ

拜啓御手紙ありがたく候病人は存外よろしく候此分にては一命丈はたすかる事と存候只今の處交通遮斷なれど好加減に出たり這入つたり致し居候

寅彦嵐と題する短篇を送りこし候例の如く筆を使はないうちに餘情のある作物に候十月分のホト、ギスに御掲載被下べくや。御郵送申上候。今日中央公論の末尾に小生等の作を讀者に吹聴する所を觀て急に中央公論へかくのがいやになり候。何ほほめられるのがいゝと申してあゝ云はれて一生懸命に十月號に書いてやらうと云ふ氣にはなれなく候が如何。今度瀧田に逢つたらあまり廣告が商賣的だと申してやらうと存

候 以上

九月二日夜

金

虚 子 庵

三九九

明治三十九年九月三日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ (はがき)

二返讀んでもらふのは恐縮だ。女が崖の上へ出る譯はかいてない。従つて只出たと思へばいゝのです。出た風情が面白ければ夫丈で苦情を云はずに置いて下さい。僕の家に赤痢がびよこりと出て公向きは交通遮斷なり。内々は交通自在なり。一寸昔しの侍が閉門になつた様な氣がして面白い。患者は大學病院にゐる。助かりさうだ

四〇〇

明治三十九年九月六日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ (はがき)

病人は漸く快方此分にては大丈夫に候。下痢のよし。御大事になさい。寐て粥を食ふがよからう。僕はいそがしいのにぶら／＼して何もせぬ。文章を二三枚かいていやになる。客はくる。

四〇一

明治三十九年九月六日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

御歸京のよし小生宅には三女赤痢にて大學醫院へ入院今日迄交通遮断なり。遮断にも關はらず方々出るのみならず來客無暗に至る。學校の講義は一ページも書かず。十月發行の中央公論からは催促をうけるいやはやのはやいやで困却中なり

草枕を讀んで下された由難有い。其上あつと感心してくれた所などは尤も難有い。あれはどうしても君に氣に入る場所があると思つた。今日迄草枕に就て方々から批評が飛び込んで來る。來る度に僕は喜んでよむ。然し言語に絶しちまつたものは君一人だから難有い。今日迄受取つた批評のうち尤も長く且つ眞面目なものは深田康算先生のものである。尤も驚も感情的なものは君のである。多少けちをつけたものが二三人ある。いづれもうれしい。僕はまとめて持つてゐる。今日中川君が來たから其事をはなしたら出版したらどうですと云ふた。草枕批評一斑として出版したら早速僕は草枕の原稿料の上へ幾分か持ち出さなければならなくなる。

僕今日中川先生に倫敦製フロックコート一着を献上仕つた。着せて見たらよく似合つた。先生大きな風呂敷へたゝみ込んで歸つて行つた。君あやめ會では詩體詩人が喧嘩をしてゐるよ。昔は詩人が喧嘩杯をと云つたものだ。今ぢや詩人だから衆に先つて喧嘩をするのだ
いづれ其うち 左様なら

九月五日

金之助

森田米松様

明治三十九年九月十日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ

拜啓先日來御約束の小説どうかかうにかかき上げ候。まことに杜撰の作にて御耻づかしき限なれど誤つて違約をしては大變な御迷惑になる事といゝ加減にかき了り申候四五枚との御約束の處とくく六十枚程になり候是も御ゆるし被下度候御序の節はいつにても御渡し可申候先は用事迄 草々頓首

九月九日

金之助

瀧田様

明治三十九年九月十一日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より豊町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓來る二十六日の能に御招き被下難有奉深謝候西洋人も定めてよろこぶ事と存候尤も通辯を仕るのは少々閉口に候。あの番組のうち一つも見たものも讀んだものもありません橋口は兄の方ですか弟の方ですか小兒病氣は日にまし快方小生見舞に参り候へども未だ一度も語を交せたる事なし草枕の作者の見丈ありて非人情極まつたもの也すると今度は妻のおやぢが腎臓炎から腦を冒かされたとか何とか申す由世の中も多忙なものに候。小生も御客の相手で一人を暮らして居る様也驚ろいたのは今日女記者の中島氏とか申す人が参られたる事也此女猫を愛讀して研究する由草枕でも讀んでくれ、ばい、のに。二六をすぐ買つてよみました。あの人は面白い考を持つて居るがあまり學問のない人と思ひます。然しよく趣味を解する人であります。今度の中央公論に二百十日と申す珍物をかきましたよみ直して見たら一向つまらない。二度よみ直したら随分面白かつた。どう「いふ」ものでせう。君がよんだ「ら」何といふだらう。又どうぞよ

んで下さい。左様なら

九月十日

金

三五六

虚子庵

悟下

四〇四

明治三十九年九月十一日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地反倉社内瀧田哲太郎氏へ

拜啓小説二百十日原稿御渡し申候間御落手被下度候試験にて御多忙のよし御勉強專一に候娘病氣大分よろしく候

二百十日は昨日また読み直して見た處始めてよんだ時より少しは面白く存候不相變殺風景な女向きのせぬものに候善惡ともに御批評被下候は、幸甚先は用事のみ 草々頓首

九月十一日

金之助

瀧田哲太郎様

四〇五

明治三十九年九月十三日 午後零時―一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

西洋人にはまだ逢はんから逢つて椅子が欲しいかどうか聞いて見ませう。日本ずきだから坐るといふか

も知れない。三崎座で猫をやる由成程今朝の新聞を見たら廣告があつた。寺田も知らせて来ました。然も忠臣藏のあとだから面白いと書いて来ました。猫が芝居にならうとは思はなかつた。上下二幕とはどこをやる氣だらう。僕に相談すれば教へてやるのに

四〇六

明治三十九年九月十四日 午前十一時―十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

今夜三崎座の作者田中霜柳といふ人が来て猫をやるから承知してくれといひました。仕組もきゝました。一三助言をしました。苦沙彌が喧嘩をする所がある呵々。

見に来いと云ふた。どうです

四〇七

明治三十九年九月十四日 午前十一時―十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區中六番町五十七番地中根重一氏方夏目鏡へ

昨夜電報にて御病人御危篤の由承知致候嘸かし御心配の事と存じ候。いつ迄もそちらに御逗留の上御看病可然と存候

當方はどうにで〔も〕相成候今日宮田とか申すものゝ妻親類に取り込みある由にて歸宅致候。又くる積りか、來ぬ積りか知らず。來なくとも差支無之候。今居るキツとかキチとか何とか申す妙な名の女も歸り候ても決して御心配に及ばず。矢張りそちらにて御看病御大事と存候

私學校の方いそがしく且つ例の如く神經衰弱にて御見舞にも参りかね候皆様へよろしく御申傳へ願候
金錢上の事につき御相談も有之候は、遠慮なく御申聞相成度候。あるものはある丈御用立可申候 以上

三五七

九月十四日

金之助

三五八

鏡 どの

昨夜緒方氏の書生参り病院の都合如何と相尋ね候故御蔭にて入澤氏の方都合つきたる旨答へ置候。
混雑すみ次第御禮に御出向可然と存候

四〇八

明治三十九年九月十八日 午後零時―一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より豊町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
ほくの妻の父死んで今週は學校を休む事にした。その外用事如山。三崎座を見たいが行けるかしら。もし行けたら御案内を仕る積りなり

四〇九

明治三十九年九月十八日 午後零時―一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ
拜啓學校へ出やうと思つて居る所へ親類のものが急病で死んだから今週はやすむ事にした。小供はまだ病院にゐる然しもはや全快にちかい。閉門はとくに御ゆるしになつた。實は閉門中から出てあるいた。學校へ出ないた〔め〕出るのがいやだ此儘するくりに辭職したい。君は學校へ出たくなる方だから結構だ。
先達て三崎座の作者の田中霜柳といふ人が來て猫を芝居にするから許諾してくれといつた。女がやるんだから面白い然かも忠臣藏のあとだから猶面白い。猫をやるなら猫的な人間がよらなければ出來る筈はな

い。女役者杯がやれば妙なものにして仕舞ふばかりだ

キンチエスターは僕も讀んだ事がある面白かつた。今は大部分忘れて仕舞つた

近來來客で食傷の氣味なり。先日突然一個の青年が來て小説の弟子にしてくれと云つたのには驚いた。

其前には一人の女記者が來て一時間ばかり話したにも珍らしい心持ちがした

草枕の畫工見た様になつて一ヶ月ばかり遊びたい。いづれそのうち御目にかゝります 艸々以上

九月十八日

金

芥舟學兄

四一〇

明治三十九年九月十九日 午前八時―九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より豊町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓先日頂戴仕つた能の番組も時間も御手紙を紛失仕つて忘れて仕舞つた。どうぞ今一返知らせして下さい。實は今週中休むから手紙で西洋人へきゝ合せてやらうと思つた所が時間も何も分らず夫が爲め又々御面倒をかける甚だ相濟まん。夫で入口では高濱さんの座ときゝますかな。もし西洋人がさしつかへたなら誰か連れて行つて見ませうか夫とも君の方にだれかかりますか又は御互に知り合のうちを御指名被下れば引き張り出します 以上

九月十九日

金

虛子庵

三五九

置二階下

四一一

明治三十九年九月二十二日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ
拜啓先日御面倒をかけ候藏書符の義兩三日前モリス氏に送り候處大満足の由にて篤く御禮を述べてくれ
る様にとの事に御座候ほめて来た手紙のうちには色々な言葉あれども面倒故略して追て御尊來の節御目に
かけ可申候御蔭にて小生も約束を終へ寔に難有奉謝候 以上

九月二十二日

夏目金之助

橋口清様

四一二

明治三十九年九月二十二日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ
拜啓西洋人は大に感謝の意を表し来り候椅子は入らぬ由何だか日本服をきて出陣する模様なり是でなく
ては能杯は見られぬ事と存候

十月號には面白いものが出ますか僕も何か書きたいが當分いそがしくて駄目である
三重吉が来て四方太の文をほめて居た。御互に惚れたものでせう 頓首

九月二十二日

金

虚子先生

四一三

明治三十九年九月二十五日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區高輪車町四十八番地皆川正禧へ 「往復はがき返信用」
風ガ「ジベット」へ當ツテ鳴ルデハナイカ。彼等（即チ「ジベット」カラブラ下ガツテ首ヲ釣ラレテ居
ル死人等）は皆躍を躍ツテゐるデハナイカ（on nothing トハ「空デ」ト譯スベシ。普通ノ踊ヲオドル者
ハ床ノ上トカ地ノ上トカ足ノ踏まへる所ガアレテ、首ヲ釣ツタ所刑人が踊ヲオドルトスレバ空ヲ踏ンデ踊
ルヨリ外ニ仕方ガナイノデアル）御前方（即チブラサガツテゐル連中ニ話ス様ニモテナス）ハイクラ空
中デ踊ツテモ暖カニハナラナイヨ。——イヒドイ風ダ。ソラ、ダレカ落チタ様ダ（ジベットカラ風デ繩ガ
切レテ地へ落チタ音ヲ想像サセルナリ）メドラーの木（二本足ノメドラーダ。——即チジベットノ事大體
ハ two-legged tree ト云フガコ、ハ二本足トアル）カラ、メドラーガ一ツ落チテ木ニナツテ居ルノガ一
ツ減ツタ（所刑人ヲメドラーニタトヘタルナリ）

〔以下行間に赤インキにて記しあり〕

アダムス・アツプルとは生理學上咽喉ノ所ニアルグリ／＼ヲサス。字引ヲ引イテ見給へ。呼吸ガ此所デ
ツマツタト云フ意ナリ。決シテ酒杯ノ意味ニアラズ

四一四

明治三十九年九月三十日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

草枕の主張が第一に感覺的美にある事は貴説の通りである。感覺的美は人情を含まぬものである（見る人から云ふても見られる方から云ふても）

(一)自然天然は人情がない。見る人にも人情がない。雙方非人情である。只美しいと思ふ。是は異議がない。

(二)人間も自然の一部として見れば矢張り同じ事である。

(三)人間の情緒の活動するときは活動する人間は大に人情を發揮する。見る人は三様になる

(a)全く人情をすてゝ見る。松や梅を見ると同様の態度（是は一ト二ト同じ事に歸着する）

(b)全く人情を棄てられぬ。同情を起したり。反感を起したりする。然し現實世界で同情したり反感を起したりすると異なる場合。即ち自己の利害を打算しないで純粹なる同情と反感の場合。（吾人が普通の芝居を見る場合）

(c)現實世界で起す同情と反感を起して人間の活動を見る場合（此場合が芝居杯へ切り込むと時々見物人が舞臺へ飛び上がつて役者をなぐつたり杯する。フランスで兵士の見物がオセロを拳銃で打つた事がある）

草枕の畫工の態度で異議のある所は第三であるからして第三の(a)か(b)か(c)かをきめて見ればよい。(c)では無論ない。畫工は可成(a)で見やうとする。よし(a)丈で見られないでも全然(b)になつてはもういやだといふ男である。だから、一步を譲つて(a)を離れても(b)迄は飛ばない。(a)と(b)の中間位である。

(い)「憐れ」が表情になつて女の顔にあらはれるのが(a)で見居られぬ事はない。「憐れ」の表情が感覺的に畫題に調和するか。又はそれ自身に於て氣持がいゝ表情かわるゝ表情か 換言すれば單に美か美でないかかと云ふ點からして觀察が出来る。（畫工が此態度で居れば「憐れ」といふのが人情の一部でも、觀察

の態度は矢張り純非人情である）

(ろ)女の顔に憐れが出て夫が亭主の爲めに出了のだから感心である。大に同情を寄すべき女である。見上げたものである。従つて畫工も思はず憐れを催した。——かうなると普通の芝居の心持ちである。（草枕の畫工は多分こゝ迄ば人情的になつて居るまいと思ふ）

(は)憐れが出たので矢張り亭主に未練がある。未練があるとすれば畫工にはそれ丈冷淡であつた。なんだ馬鹿々々しい。今迄はおれに惚れて居たのと思ふのが現實界の態度である。此場合には自己の利害の爲めに亂さるゝからして結構な女の心行きが却つてにくらしくなる。（草枕の畫工は無論こゝには居らぬ）

沙翁がハムレットをかく時の了見は分らないが(い)ではないに極つて居る。(は)でもあるまい。恐らくは(ろ)であらう。（即ちハムレットを見る觀客の起す了見と同一であつたらう）

従つて草枕の畫工の態度と沙翁とは違ふ。截然として區別がつかぬかも知れぬが傾向が違ふ。沙翁は(ろ)に住する傾向がある畫工は(い)にもどる傾向がある。(いとろ)をなべて矢で方向を示すと沙翁の態度は(ろ)である。畫工の態度は(い)である。兩方とも離れたがつつて居る。

畫工は非人情的である。沙翁は純人情的である。而して吾々日々夜々パンに汲々として喧嘩をしてくらす人間は俗人情的である

作家は作家の考がある通り批評家は批評家の見識がある。君の云ふ事は僕の考で毫も曲ぐべき必要はない。只考丈を云ふ迄である。

畫工は紛々たる俗人情を陋とするのである。ことに二十世紀の俗人情を陋とするのである。否之を陋とするの極純人情たる芝居すらもいやになつた。あき果てたのである。夫だから非人情の旅をしてしばらく

でも飄浪しやうといふのである。たとひ全く非人情で押し通せなくても尤も非人情に近い人情（能を見る
ときの如き）で人間を見やうといふのである。」

御能拜見の事承知致候。今度行く折があつたら誘つて上げませう。

此間メレヂスの事をかいた人がある此本を取り寄せる積りの處まだ取り寄せない。ハーデーの事もかいたものがある様に記憶する。記憶がわるいから忘れて仕舞ふ。調べて置いて上げやう。

九月三十日

夏目金之助

森田米松様

四一五

明治三十九年十月一日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

拜啓先日は御能拜見仰付られ難有仕合に存じ奉り候。西洋人大喜にて今度ある時も知らせてもらひたい
杯と申し居候 以上

僕の後ろに居た西洋人ハ下等ナ奴ダ。アンナ者ガ能ヲ見ニ來タラ斷ハルガイ、

四一六

明治三十九年十月二日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

御手紙拜見人情から非人情にうつる所が面白いとの議論面白く候。儲かねて御依頼の三名家文集の義本

日服部主人参り候につき談合致し候處ともかくも原稿を拜見致し度との事なり。よつていつでも御序の節
御三君の名文をあつめたものを一寸御見せ下さい先は用事のみ 草々不一

十月一日夜

夏目金之助

森田白楊様

四一七

明治三十九年十月四日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

尊書拜見毎々御懇篤なる御褒辭を賜はり却つて慚汗の至に存候草枕はある一部の人には大受にて小生も
大にうれしく存候三度讀んだ人は大兄を入れて是で三人目に候。尤もある人は小兒を失ひて引き籠り中毎
毎草枕をよんだと書いて参り候が是は少々御まけの様に候。今日明星と申す雑誌を見たら議論が多くて文
章にも穴があると一三行程かいてあり候

二百十日はかねての約束にて不得已執筆夫故可成骨の折れぬ様會話に致し候あれを例の流義で長くか
いたら依然として冗長なものになり可申か呵々 右は先づ御挨拶迄 草々頓首

十月三日

金之助

繞石兄

四一八

明治三十九年十月四日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稲田鶴巻町一番地坂元(當時白仁)三郎へ

拜啓先日相願候妹尾福松氏教員檢定試験免狀の件其後如何相成候や實は本人より聞き合せ参り候。是は本人へ去月十一三日に至ればわかる由を申し聞け置きたるによる事に候。甚だ御迷惑ながら會議の結果一應御令兄へ御き、合せ被下間敷候や右願用迄 艸々不一

十月三日

夏目金之助

白仁三郎様

四一九

明治三十九年十月八日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十番地寺田寅彦へ (はがき)

本日は留守へ御出失敬。「二百十日」の評ありがたく拜見。大に辯護致し度候。今度から木曜の三時か
らを面會日と致すにつき御來遊被下度候
令甥も時々つれて成されたく候 以上

四二〇

明治三十九年十月八日 午前(時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ (はがき)

拜啓小生是から毎木曜日三時よりを面會日と相定め候につき時々遊びに御出下さい

十月七日

四二二

明治三十九年十月八日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓ホト、ギスの豫告は驚ろきましたね。小生來客に食傷して木曜の午後三時からを面會日と定め候
妙な連中が落ち合ふ事と存候。ちと景氣を見に御出被下度候

四二三

明治三十九年十月八日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ (はがき)

拜啓本日は娘を難有く存候小生今度から木曜日の午後三時からを面會日と定め候故遊びに御出被下度候
以上

十月七日

四二三

明治三十九年十月九日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

二百十日を御讀み下さつて御批評被下難有存じます。論旨に同情がないとは困ります。是非同情しな
ければいけません。尤も原因が明記してないから同情を強ひる譯にゆかない。其代り原因を話さないでグ
／＼寐て仕舞ふ所などは面白いちやありませんか。そこへ同情し給へ。碌さんが最後に降参する所も辯護
します。碌さんはあのうちで色々に變化して居る然し根が香氣が人間だから深く變化するのぢやない。圭
さんは香氣にして頑固なるもの。碌さんは陽氣にして、どうでも構はないもの。面倒になると降参して仕

舞ふので、其降参に愛嬌があるのです。圭さんは鷹揚でしかも堅くとつて自説を變じない所が面白い餘裕のある逼らない慷慨家です。あんな人間をかくともつと逼つた窮窟原なものが出来る。又碌さんの様なものをかく「と」もつと輕薄な才子が出来る。所が二百十日のはわざと其弊を脱してしかも活動する人間の様に出来てゐるから愉快なのである。滑稽が多過ぎるとの非難も尤もであるが、あゝしないと二人にあれだけの餘裕が出来ない。出来ないと普通の小説見た様になる。最後の降参も上等な意味に於ての滑稽である。あの降参が如何にも飄逸にして拘泥しない半分以上トボケて居る所が眼目であります。小生はあれが掉尾だと思つて自負して居るのである。あれを不自然と思ふのはあのうちに滑稽の潛んで居る所を認めないで普通の小説の様に正面から見ると見るからである。

僕思ふに圭さんは現代に必要な人間である。今の青年は皆圭さんを見習ふがよろしい。然らずんば碌さん程悟るがよろしい。今の青年はドツチでもない。カラ駄目だ。生意氣な許りだ。以上

十月七日 「封筒の裏に」

金

虚子先生

能の事難有存じます。矢張九段であるのですか。いつあるのですか。一寸教へて下さい。正月は何かかいて上げたいと思ひます。然し確然と約束も出来かねます。まあ精々かく方にして置ませう

四二四

明治三十九年十月九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓只今服部主人來訪「はなうづ」出版致し度旨申候。夫については川下先生の長詩は少々困るから他の美文とか小説と「か」いふものと取りかへて頂きたい由。如何なものにや 劇詩戯曲は差支なけれど長詩は營業上駄目のよし。江村先生には氣の毒なれど君の取計でどうかして貰ひ度候。夫から製本は念を入れて充分美裝する由。原稿料は印税として壹割（ドコ迄行つても）にしたき由。夫から「はなうづ」と云ふ名の外にもつといゝ名はないかと申候。夫から僕に序をかくれと申候。是は君がたの方で御迷惑でなければ折角周旋したものだから何かかゝうと思ふ。出版は目下活版屋非常の多忙故本年中に手をつけかねる故來年一月着手の由

右至急御報知申候。どうか長詩の所文をよろしく願たい 以上

十月火曜日夜

金之助

白楊先生

四二五

明治三十九年十月十日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎へ

二百十日についての御批評拜見随分思ひ切つてわる口を承はり大に面白く候。所であれば傾向小説でも象徴小説でも何でも構はない。そんなものは讀んだ人が勝手につけるのである。アート・フォー・アート杯は是亦どうでもよい。アートが下手ではいけない。然しアート丈がいゝのではない。剛健趣味は結構だ。文部大臣がどんな主義でも構はない。中央公論に適しない事はない。別に中央公論むきは柔弱主義といふ譯はない。筆蹟をまづいと云ふが外の大家は僕よりまづい。僕はあの二百十日 夏目漱石が甚だうまいと

思つてゐる。大家揃ぢやない小學生揃だ。君はあれを餘所行の筆蹟でないといふが、僕の筆蹟には餘所行も不斷着もない。いつでもあの通りうまいのである。

猫を女役者がやる。本郷座だつて女役者だつて同じ事だ。猫をやつて面白い芝居が出来ゐる爲めには僕自身も身がやらなくつちやいけない。中川芳太郎が見て来て極めて愚なものだといつた。愚は始めから切れ切つてゐる。

猫を圖書館に献上するなんて随分人を馬鹿にしたものだ。尤も僕も高等學校へ献上した。此次は皇室と宮家へ一部宛獻上しやうかと思ふ。宮様杯はちと猫を御覽になつたらよろしからうと思ふ。

モリエルの事に關した寫真や何かは一枚もない。先達てマンチウスの四卷目を誂へて置いたがまだ來ない。だから駄目だらう。兎に角に活動あらん事を希望する。明治の文學は是からである。今迄は眼も鼻もない時代である。是から若い人々が大學から輩出して明治の文學を大成するのである。頗る前途洋々たる時機である。僕も幸に此愉快な時機に生れたのだからして死ぬ迄後進諸君の爲めに路を切り開いて、幾多の天才の爲めに大なる舞臺の下ごしらへをして働きたい。さうかうしてゐるうちに日は暮れる急がなければならん。一生懸命にならなければならん。さうして文學といふものは國務大臣のやつてゐる事務杯よりも高尚にして有益な者だと云ふ事を日本人に知らせなければならん。かのグイタラの金持ち杯が大臣に下けル頭を文學者の方へ下ける様にしてやらなければならん。

皇太子や宮様が文學を御讀みになつて其主意がわかる様に書いて上げなければならん 左様なら

十月十日

夏目金之助

若 杉 兄

四二六

明治三十九年十月十一日 夜 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

花うづの内君の分と生田君のある部分とを見直した。君のに就て極遠慮のない事を云へばいづれも物足らない。何だか要領を得ない感じが多い。君は出来る丈悲酸で深刻で皮肉な問題を捕へてくるにもかゝらず。よんだあとの感じが悲酸でも、深刻でも皮肉でもない。

其解決はどう云ふ點にあるか一寸考へた所を参考に述べる。

(一)事件に發展がなくて、比較的長い事を一二枚でかいてしまふ。だから讀者は君につり込まれる程作中の人物に同情がない。

是が大源因だらうと思ふ。換言すれば長くかくべきものを短かくかいて然も長くかいたものと同様の感

を起し得るものと假定して居るらしい
(二)君は文章に骨を折る。然し其骨折はレトリックに骨を折るのである。レトリックは無論必要であるが。白粉の如きものである。眞の文章は女の營養や心的状態から來る表情の如くベニや白粉とは違ふ。文章のうまいにかゝはらず感じが乗らぬのは口調や文字に許り骨を折つて、敍出するもの、ベゼールンクが出来ぬ爲ではあるまいか。

(三)所々に奇警な句がある。ハット思はせる程のものがある。(重に人世上の觀察)是程の急所をつらまへて居る人が何故此句をもつと活かして使はないかと思ふ。たとへば夫れ自身が一句で慥かに一短篇の主意となり得るにも關はらず君は君は惜氣もなく好い加減な所へ使つて仕舞ふ。而して全篇から云ふと左程奇警でない。ある時は幼稚である。すると何だか妙な氣がする。此作者は時々老成な觀察をする點から云

へば四十前後であるが若い方から云ふと二十を多く越してゐない。二十三四の男と四十位な男が合併して居る様だ。夫がうまく調和すればいゝが片手丈が四十位であつたり何かする。

僕の遠慮のない批評は正にこゝである。要するに花うづ中にある君の作は決して未來に君を重からしむるものではない。もし君に大作があればそれは未來である。是から愈奮發して立派な作物を苦心せられん事を希望する。もし餘暇あらば正月迄に是非兩三篇を新作せられん事を希望する

寅彦の嵐は彼の作としてあまり秀逸ぢやない。嵐の前後丈かいて肝心の嵐をかゝないなんてする男だ尤も最後の二三行「あの人も御かみさんの居る時分云々」は君と絶對的反對で大賛成である。あの下女の言葉があつて始めて熊さんの長い間の變化やら歴史やらが一句のうちに纏められて、讀者はうんさうかと云ふ氣になるのである。短篇でも長い歴史を感じしむる爲めにはああ云ふ筆法でなければいかぬ。あれが短篇の落ちである。あれがあるから畫龍點睛の妙を覺えて全篇が活動してくるのである。もし是を不贊成といふなら大に議論がしたい。

委細は面語に譲る。花うづはいゝ名だと僕も本屋に教へてやつた。
本屋へは川下氏の稿さしかへの義通知可致か否や 草々
十月十一日

白楊先生

四二七

明治三十九年十月十二日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

夏目金之助

拜啓昨日は失敬本日學校でモリスに聞いて見た所二十八日の喜多の能を見に行くから升を一つ(上等な所。あまり舞臺が鼻の先にない所を)とつてもらひたいと云ふ事でありませう。どうか願ひます。夫から時間には午前八時頃から五時位迄ですか。喜多の番地はどこでしたか鳥渡教へて下さい。今度の木曜にも入らつしやいな。四方太も来るかも知れない。小生元來のん氣屋にて大勢寄つて勝手な熱を吹いてるのを聞くのが大好物です。

森田が千鳥をよんで感心して來ました。森田は一頁五十錢で翻譯をして食つてゐる。シヤポテン黨は此味を知らないからシヤポテン派なんだらうと云ふてゐます。今日も三人來ました。然し玄關の張札を見て草々歸ります。甚だ結構です。以上

十月十二日夜

金生

虚子先生

四二八

明治三十九年十月十三日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稲田南町三十番地大澤方片上伸氏へ

拜啓御手紙にて恐縮實は先達から御依頼甚漠然と何かかゝねばなるまい位は考へてゐたものゝ、そんな程度のものは外にも大分あるので御手紙がくる迄は明かに責任も感ぜずに打過候。ホト、ギス、藝苑。東亞の光。も同様の體に候。まあ出來たら。可成かゝう位に候。然る所君の方の雑誌は大分大仕懸故かけるかも知れない位では御困りになる事と存じそこで大に閉口致し候。實は近來色々多忙に相成不得已木曜の午後三時からを面會日と定めたる位の有様。よしかくとしてもやつと來年迄に一つ位と存候。到底三つも

四つも出来る程のひまはなからうかと存候其一つも氣が向かなければ出来ぬ事と相成るべく御依頼の方も御困りなら引き受ける方も困る事に候。まあ精々書いて見る事にして出来たら上げる事に致しませう。尤もホト、ギスは従來の關係ありて此方は斷はりかね候故。ことによると早稲田へ出なくてもホト、ギスへは出るかも知れず。夫から帝國文學も少々恐れて居り候。かうかち合つては小生も迷惑君の方も御迷惑ではありますまいか。一寸伺ひます。

本月の早稲田文學の彙報中小生の事を御書き被下たのは君だらうと思ひます。あれは今迄出た日本の批評のうちで尤も精細な眞面目な系統のある。勞力の入つたものと思ひます。小生の作の様なものに對してあれ文の勞力を費やされた好意を深く感謝し度と思ひます。是はあながち小生を賞めて下さつたから難有く思ふのではありません。あれが批評家の態度として堂々として然も落ち付いて居て奥床しい上に餘程ヒマが懸つて居るから、そんな事を今の世に敢てする批評家の手にかゝつた小生を名譽と思ふから感謝の意を表する譯であります。今の世の批評といふものは通りがりに「アテコスリ」をちよつと残して逃げて行く様なのが多いぢやありませんか。作物に立派なのがない所爲かも知れんが批評のやり方もわるいです。あれぢや雙方進みつこない。

先は右御返事旁御禮迄 草々頓首

十月十四日

夏目金之助

片上 伸様

四二九

明治三十九年十月十四日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

大に議論を上下したいが手紙を何本も書かねばならんのと校正を無暗にしなければならんのと夫から色色な用事があるのでどうも長い手紙がかけない。いづれ今度の木曜日にも來たら大に議論をやる。

今夜服部が用事で來たから川下君承知の旨を話して置いた。服部の野郎は「猫」をやつてくれと本郷座の連中にたのんだのださうだ。人間も是程營利的に傾けば世話はない。芝居でやりたければさせてはやるが役者に頼んでしてもらふ杯といふ見がどうして出来るだらう。たのむ場合には役者の方が作者の方より上手な場合だ。今の役者輩に猫がわかるものは一人も居やしない。

君ともかくも正月迄に今一篇かき添へ玉へ 草々以上

十月十四日夜

なつめ金

森田白楊様

四三〇

明治三十九年十月十五日 (以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ

喜多の番組難有候。一寸この文壇五名家といふ奴を御覽なさい。僕の鼻が曲がつてゐるから妙だ。鼻の穴の片ツ方が餘計に見えてゐる。是で文學者もすさまじいものだ。然し他の四名家も文學者らしくもありませんね。中には泥棒の様なものもある 草々

十月十五日

金

三七五

高濱先生

四三二

明治三十九年十月十五日 午後十二時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間真綱へ〔はがき〕
久しく御無沙汰をした。此間フロックコートを誂へたから出来たら着て見せに行かうと思ふ。野村も冬服を作つた。僕の古いフロックは中川にやつた。高田文學士が草枕を評してくれた。近頃の批評には随分アヤシイのがある中學生位ナ青二才ガ生意氣ヲ云ツテ六號活字ニスル。ヨムトエラサウダガ逢フト根ツカラ下ラナイ。木曜ニ遊ビニキ玉へ。高田ニ御禮ヲ云フテクレ玉へ

四三三

明治三十九年十月十六日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より鹿兒島市第七高等學校寄宿舎行徳二郎氏へ
拜啓其後は御無音如何なされし事かと存居候處先日御手紙にて鹿兒嶋の高等學校へ御入學のよし承はり安心致し候
カゴシマは何かにつけて不便なるべけれども久留米に近いから便利かと存候時候を厭ひ御勉強專一と存候

當方別段の變りもなく無事に暮らし候
筆は大分大きくなり只今は小學の一年生に候。筆のあとに娘が三人生れ候。皆女にて厄介なる事に候。御令兄には時々御面會申候。
君は醫學をやる事と存候多分福岡大學へ入學の事と存候。段々世の中に住みなれると思ふ事許り笑ふに

も笑はれず怒るにも怒られぬ愚な事ばかりに候。其なかに住んで居る自分がさう思ふ位だから後世から見れば嘸馬鹿氣て居るだらうと思ひ候。是だから後世に名の残る人は滅多にない者だと合點が行きます。
高等學校生杯といふと日本では教育のある部類の人であるが、あのうちで未來に名の傳はる様な人は何人あるか、考へて見ると大抵は平凡で愚劣なものに相違ないといふ事がすぐに分る。ここに氣がつけば世の中に恐ろしい人は滅多に居ない事になる。カゴ島の果でも東京の真中でも同じ事である。天下は太平である。ユツクリと鷹揚に勉強してエライ者になつて、名前を後世に御残しなさい 以上

十月十五日

夏目金之助

行徳二郎様

四三三

明治三十九年十月十七日 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
拜啓喜多の番づけを難有う存じます。早速モリスにやりました。先達て御話しのあつた二十日に關する拙翰をホト、ギスへ掲載の義は承知致しましたと申しましたが、少し見合せて下さい。近々「現代の青年に告ぐ」と云ふ文章をかくか又は其主意を小説にしたいと思ひます。すると其前にあの手紙は出して貰はない方がよい。どうでせう。あの主意をあなたが布衍して、さうしてあなたの意見も加へてあなたの文章とかきかへてホト、ギスへ出して下さつては。あの手紙のうちで困るのは現代の青年はカラ駄目だと云ふ事と「普通の小説家なら……」と云ふ自贊的の語である。自分が小説をかいて、人の小説を自分のに比べて攻撃するのはいやな心持ちだ。夫から現代の青年に告ぐと云ふ文章中には大に青年を奮發させる事を

かくのだから「カラ駄目」ぢやちと矛盾してしまひます

まづ用事丈にして置きます

森田流の人には當分シヤボレン主義は分りません矢張りロシヤ主義で進歩するがよからうと思ひます

十六日

金

高濱様

四三四

明治三十九年十月十八日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓手紙は國民新聞へ御出しのよしちつとも構ひません。出したら出したで小説でも論文でも出來ますから決して御心配には及びません。本當は現代の青年の一部のものにあの手紙を見せてやりたいのですから大に結構であります。今日松根が來ました。今度の日曜に散歩をする約束をしました。早稻田から正月といふ注文が來ましたが是は延ばす事に仕つてホト、ギスへ何かかいて見ませう尤も他にも約束もあるがどうかします。尤もホト、ギスへ出來なければ外へも出來ないのですから御勘辨なさい 左様なら

十月十六夜

金

虚子大人

座下

四三五

明治三十九年十月二十日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區寒平町二番地朝陽館野間真綱へ

拜啓伊香保の紅葉を貰つて面白いから机の上へのせて置いたら風がさらつて行つて仕舞つた。どこをたづねてもない。

近頃は久しく逢はない。昨日の面會日には四五人來て十時頃迄文學談をやつて愉快であつた。

近來世の中に住んで居るのが小便壺のなかに浮いて居る様な氣がする。周囲が小便だから自分も嘔臭い事だらうと思ふ。

高等學校杯へ出ても尤も簡單で尤も純潔なるべき書生が大分アトフルである。眞正に書生らしいものは十分一位だらう。こんなものに教へるのだからどうでも構はないと云ふ氣で居る。昔し小便壺のうちに居る事に氣がつかなくつた時はもつと熱心であつた。天下の人が戯れて居るのに自分丈眞面目で居るのは醉漢の中に窮屈にかしこまつてゐる様なものだ。未來の日本を作る青年が自己の責任もエライ事も何も知らずにワー／＼して居るのは天子様の爲めに御氣の毒である。

今日曜には遠足をする。近日猫の中巻と鶉籠と夫から今少しすると文學論が出来る。出來たら一部あける。今の青年共は猫をよんで生意氣になる許りだ。猫さへ解しかねるものが品格とか人柄とかいふ事が分り様筈がない。困つたものだ。 左様なら

十月十九日

金之助

眞綱様

四三六

明治三十九年十月二十日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區高輪車町四十八番地皆川正禧へ

拜啓久しく御目にかゝらない先日野間が手紙をよこして君の今度の家はいゝ所だ是非行つて見ろとあつた。是非行きたいが何だか忙がしくて行かれない。近頃は世の中に住んで居るのが夢の中に住んでゐる様な気がする。どこを見ても眞面目なものが一つもない。悉く幻影と一般タワイなものである。こんな世界に住んで眞面目に苦しい思ひをして暮らすのは馬鹿氣てゐる。眞面目になり得る爲めには他人があまり滑稽的である。

僕明治大學をやめやうと思ふ。先日高田が来て報知新聞へ何かかいてくれと云つたから明治大學をやめて新聞屋にならうか知らん國民新聞でも讀賣でも依頼されてゐる。明治大學は土曜の四時間であるから、土曜を四時間つぶして何かかいてさうして夫が同じ位の収入になれば新聞の方が色々な便宜がある様に思ふ。

明日は大森の方へ遠足をするが東洋城といふ青年と一所だから君のうちへは寄れない。此東洋城君なるものは頗る眞面目な青年である。青年は眞面目がいゝ。僕の様になると眞面目になりたくてもとでもなれない。眞面目になりかける瞬間に世の中がぶち壊はしてくれる。難有くも、苦しくも、恐ろしくもない。世の中は泣くにはあまり滑稽である。笑ふにはあまり醜惡である。

あまり御無沙汰をしたから手紙を一寸あける。土曜の晩だからこんな下らない手紙をかくひまがある。來客は皆木曜にまとめて仕舞つた。壹週間丸つぶしにして人の爲めに應接をしてやつたつて自分が疲勞する許りである。 草々

十月二十日

夏目金之助

皆川正禧様

四三七

明治三十九年十月二十一日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓君の所から白い状袋の長い手紙が來ないと森田白楊なるものが死んで仕舞つたかの感がある。今日曜早起きるや否や白状があつたので矢つ張り生きてゐるなと思つた。

草枕の評は多大の興味を以て拜讀した面白かつた。草枕を評すると云ふ點より君がどんな考を以て書よみつゝあるか分るからである。あの理窟を云ふ所が面白い。普通の新聞屋杯のいふ評は何を云ふのだから分らない。さすがに森田先生丈あつて何か云ふ事があるから感服だ。一體君は評論をして理窟を云ふ方が筋の立つた事を云ふ。又譯の分つた事を云ふ。だから創作が其主義を應用する様に出來るかと思ふとさう旨く行つてゐない。君は不平かも知れないが慥かに行つてゐませんよ。

君のいつもよこす手紙は何だかどこかに愚癡つほい所があつたが今度のはサラ／＼したものだ。甚だ我意を得てゐる。愚癡を並べても愚癡に拘泥してゐない。滔々と愚癡が出て來て來て平氣である。是が甚だ愉快だ。凡て愚癡でも何でも拘泥した奴は厭味だね。いくらスキのない服装でも本人が夫に拘泥してゐると厭味が出る。凝つた身装をしてさうして凝つた所を忘れてゐるのがいゝぢやないか。今度の手紙は是に近い。君の創作もどうかこの格で行きたいと思ふ。今度の手紙の結末にある「是から洗湯に參らうかと存候敬具」杯は振つたものだ。あれを稱してサボテン趣味と名づけるのである。サボテン趣味と云へば君がラ

ウムレーレからサボテン趣味を呪詛する事を虚子に報知したら、虚子大に激して——大學を卒業して机上で人生觀を作つてゐるからサボテン趣味が分らないのだ杯と氣箠を吐いて來た。さうして森田君にサボテン趣味を説いてくれといふから僕は森田は當分サボテン趣味は分らない、矢つ張り露西亞主義でいゝのであるとかいてやつた。すると今度は虚子先生の返事に「實は私も社會學や心理學方面が嫌なのではない、出來れば此方へも興味を持ちたい、其代り森田君もサボテン趣味を研究して貰ひたい」とあつた。

木曜日にはサボテン黨の首領は鼓の稽古日だとか云つて來なかつた。香氣なものである。其代り中川のヨ太公。鈴木三重吉。坂本の四方太、寺田の寒月諸先生の上に東洋城といふ法學士が來た。此東洋城といふのは昔し僕が松山で教へた生徒で僕のうちへくると先生の俳句はカラ駄目だ、時代後れだと攻撃をする俳諧師である。先達て來て玄關に赤い紙で面會日杯を張り出すのは甚だ不快な感がある。「僕の爲めに遊びにくる日を別にこしらへて下さい」と駄々つ子見た様な事を云ふから、そんな事を云はないで木曜に來て御覽といつたからとうとう我を折つて來たのである。又松茸飯を食はせてやつた。今日此東洋城と大森の方へ遠足をするのである。」

僕は明治大學の文學部の方を御免蒙る様に辭表を提出して置いた。君を後釜に据ゑてやりたいが内海月杖翁が承知しまいから駄目だ。文學部の方をやめると米櫃に影響する。夫から色々な所へ微震を起す。妙な事だ。

近頃は小便壺の中に浮いてゐる様な氣がする。小生も臭いが傍から見ても臭いだらう。去りとて小便壺から飛び出す程の必要も認めない。昨日ある人に手紙をつかはして曰く「世の中は泣くにはあまり滑稽である、笑ふにはあまり暗黒である」「今の世で眞面目になる事は到底不可能だ。眞面目になりかけると世の中がすぐぶち壊してくれる」

こゝに於て僕はサボテン黨でも露西亞黨でもない。猫黨にして滑稽的十豆腐屋主義と相成る。サボテンからは藝術的でないといふは露西亞黨からは深刻でないといふはれて、小便壺のなかでアプアプしてゐる。是からさき何になるか本人にも判然しない。要するに周圍の状況で色々になるのが自然だらう。西洋人の名前杯を擔いで此人の様なものをかゝう杯といふのは抑も不自然の甚しきものである。君オイランの寫眞を見てアタイもこんな顔にならうたつてなれやしないぢやないか。今の文學者は皆此アタイ連である。僕の事を英國趣味だ杯といふものがある。糞でも食ふがいゝ。苟しくも天地の間に一個の漱石が漱石として存在する間は漱石は遂に漱石にして別人とはなれません。英國趣味があるなら、漱石が英人に似てゐるのではない。英人が漱石に似てゐるのである。

君英譯をやるつてそりや少々無理だよ。英文で立たうと思ふなら今から五六年其方の丁稚奉公でもしな
けりやいけな。それより英文を日本に譯す方がいゝ。尤も何を譯していゝか僕にも一寸わかりかねる。
もうかくのが厭になつたから是にて擱筆

十月二十一日

夏目金之助

森田白楊様

四三八

明治三十九年十月二十二日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

君の夜中にかいた手紙を見てゐると東洋城が誘ひに來たから手紙は洋服のカクシへ入れて品川の先の鮫州の川崎屋といふ料理屋で飯をくふ時さき棄てゝしかもさいたくずは未だにカクシの中に丸めてある。

余は滿腔の同情を以てあの手紙をよみ滿腹の同情を以てサキ棄てた。あの手紙を見たものは手紙の宛名にかいてある夏目金之助丈である。君の目的は達せられて目的以外の事は決して起る氣遣はない。安心して余の同情を受けられん事を希望する。

余の知る人のうちに二三君と同様の境遇の人あり。否境遇の人なりときく。去れど彼等は皆相應に成功の人なり。君も相應に成功の緒を得ば此不幸を忘るゝを得んか。余は君が此一事を余に打ち明けたるを深く喜ぶ。余を夫程重く見てくれた君の真心をよろこぶ。同時に此一事を余に打ち明ければならぬ程君の心を苦しめたる源因者(もしあらば)を呪ふ。同時に此一事を余に打ち明くべく餘義なくさるゝ程君の神經の衰弱せるを悲しむ。男子堂々たり。這般の事豈君が風月の天地を懊惱するに足らんや。君が生涯は是からである。功業は百歳の後に價値が定まる。百年の後誰か此一事を以て君が煩とする者ぞ。君若し大業をなさば此一事却つて君が爲めに一光彩を反映し來らん。只眼前に汲々たるが故に進む能はず。此の如きは博士にならざるを苦しし、教授にならざるを苦しむと一般なり。百年の後百の博士は土と化し千の教授も泥と變ずべし。余は吾文を以て百代の後に傳へんと欲するの野心家なり。近所合壁と喧嘩をするは彼等を眼中に置かねばなり。彼等を眼中に置けばもつと慎んで評判をよくする事を工夫すべし。余はその位な事がわからぬ愚人にあらず。只一年二年若しくは十年二十年の評判や狂名や悪評は毫も厭はざるなり。如何となれば余は尤も光輝ある未來を想像しつゝあればなり。彼等を眼中に置く程の小心者にはあらざるなり。彼等に余が本體を示す程の愚物にはあらざるなり。彼等が正體を見あらはし得る程な淺薄なものにあらざる也。余は隣り近所の賞賛を求めず。天下の信仰を求む。天下の信仰を求めず。後世の崇拜を期す。此希望あるとき余は始めて余の偉大なるを感ず。君も余と同じ人なり。君の偉大なるを切實に感じ得るとき這般の因果は紅爐上の雪と消え去るべし。勉旃々々

十月二十一日夜

十一時池上より歸りて

夏目金之助

森田白楊様

〔以下餘白に朱書〕

人若し向上の信を抱いて事^原をなす時貴キ事神人ヲ超越シテ蓋天蓋地に自我ヲ觀ズ。天子様ノ御威光デモ是許リハドウモ出來ン。漱石ハ喧嘩ヲスル度に此域に出入ス。白楊先生ハ如何

四三九

明治三十九年十月二十三日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稲田鶴卷町一番地坂元(當時白仁)三郎へ

拜啓妹尾福松氏件につき色々御手数^原を煩はし難有候今日の御手紙にて同人も希望通り愈教員免狀下附の運に至り定めし滿足の事と存候

御序の節御令兄へよろしく御禮願上候。小生も是にて同人の爲め安心致候是から早速通信してやらうと存候

先達中から餘り來客が多いので木曜日の午後三時からを面會日に定め申候すると木曜日には色々な人がやつて來て愉快に候タシブの觀有之候、時々御出陣^原の上模様を御覽になつては如何 以上

十月二十二日

夏目金之助

白仁三郎様

三八六

四四〇

明治三十九年十月二十六日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區彌生町三番地小林第一支店鈴木三重吉へ〔封筒表左側下に「第一信」あり〕

君の夜中にかいた手紙は今朝十一時頃よんだ。寺田も四方太もまあ御推察の通の人物でせう。松根はアレデ可愛らしい男ですよ。さうして貴族種だから上品な所がある。然しアタマは餘りよくない。さうして直むきになる。そこで四方太と逢^原はない。僕は何とも思はない。あれがハイカラならとくにエラクなつて居る。伯爵ノ伯父や叔母や、三井が親類でさうして三十圓の月給でキュキュしてゐるから妙だ。さうしてあの男は鷹揚である。人のうちへ来て坐り込んで飯時が来て飯を食ふに、恰も正當の事であるかの如き顔をして食ふ。「今日も時刻をハヅシテ御馳走ニナル」とか「どうも難有う御座います」とか云つた事が無い。自分のうちで飯をくつた様にしてゐるからい。

君は森田の事丈は評して來ない。恐らく君に氣に入らんのだらう。あの男は松根と正反對である。一舉一動人の批判を恐れてゐる。僕は可成あの男を反對にしよう／＼と力めてゐる。近頃は漸くの事あれ丈にした。それでもまだあんなである。然るにあゝなる迄には深い原因がある。それで始めて逢つた人からは妙だが、僕からはあれが極めて自然であつて、而も大に可愛さうである。僕が森田をあんなにした責任は勿論ない。然しあれを少しでもつと鷹揚に無邪氣にして幸福にしてやりたいとのみ考へてゐる。

君をしかるつて、夫で澤山だ。そんなにはめる程の事も無いが叱られる事もなからう。僕の教訓なんて、飛んでもない事だ。僕は人の教訓になる様な行をしては居らん。僕の行爲の三分二は

皆方便的な事で他人から見れば氣違ひである。それで澤山なのである。現在状態がつゞけば氣違ひである。死んでから人が氣違ひときめて仕舞つたつて少しも耻とも思はない。現在状態が變化すれば此狂態もやめるかも知れぬ。さうしたら死んでから君子と云はれるかも知れん。つまり一人の人間がどうでもなる所が自分ながら愉快で人には分らないからい。氣違ひにも、君子にも、學者にも一日のうちにはより以上の變化もして見せる。人が學者といふも、氣違ひといふも、君子と云ふも、月給さへ渡つてゐればちつとも差支ない。だから僕は僕一人の生活をやつてゐるので人に手本を示してゐるのではない。近頃の僕の所作を眞似られちや大變だ。 草々

十月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉様

四四一

明治三十九年十月二十六日 (時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區彌生町三番地小林第一支店鈴木三重吉へ〔封筒表中央下に「第二信」あり〕

只一つ君に教訓したき事がある。是は僕から教へてもらつて決して損のない事である。僕は小供のうちから青年になる迄世の中は結構なものと思つてゐた。旨いものが食へると思つてゐた。綺麗な着物がきられると思つてゐた。詩的に生活が出來てうつくしい細君がもて。うつくしい家庭が〔出〕來ると思つてゐた。

もし出來なければどうかして得たいと思つてゐた。換言すれば是等の反對を出来る丈避け様としてゐた。

三八七

然る所世の中に居るうちはどこをどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く正反對の現象でうづまつてゐる。

そこで吾人の世に立つ所はカタナイ者でも、不愉快なものでも、イヤなものでも一切避けぬ否進んで其内へ飛び込まなければ何にも出来ぬといふ事である。

只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅小な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではないけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてははいけない。

此點からいふと單に美的な文字は昔の學者が冷評した如く閑文字に歸着する。俳句趣味は此閑文字の中に逍遙して喜んで居る。然し大なる世の中はかゝる小天地に寐ころんで居る様では到底動かさない。然も大に動かさざるべからざる敵が前後左右にある。苟も文學を以て生命とするものならば單に美といふ丈では満足が出来ない。丁度維新の當士勤王家が困苦をなめた様な了見にならなくては駄目だらうと思ふ。間違つたら神經衰弱でも氣違でも入牢でも何でもする了見でなくては文學者になれまいと思ふ。文學者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相遠かる様な小天地ばかりに居ればそれぎりだが大きな世界に出れば只愉快を得る爲めだ杯とは云ふて居られぬ進んで苦痛を求めなくてはなるまいと思ふ。

君の趣味から云ふとオイラン憂ひ式でつまり。自分のウツクシイと思ふ事ばかりかいて、それで文學者だと澄まして居る様になりはせぬかと思ふ。現實世界は無論さうはゆかぬ。文學世界も亦さう許りではゆかまい。かの俳句連虚子でも四方太でも此點に於ては丸で別世界の人間である。あんなの許りが文學者ではつまらない。といふて普通の小説家はあの通りである。僕は一面に於て俳諧的文學に入ると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい。

十月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉様

四四二

明治三十九年十月二十九日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町四番地蓋平館薄井秀一氏へ

拜啓先日來日曜文壇に何か執筆を御依頼の所何かと存じ候へど小生近刊の文學論に自序を認め候。是は二十四行二十四字詰めにて十二三枚のものに候が、もしそれにてよろしければ此次の附録に差し上げてもらしく候。少しながすぎるならばやめてもよろしく候。御望みならば下女に持たせて上げます。但し一度に出して下さらなくては困ります夫から表題は近刊「文學論」序と云ふのです 草々

十月二十一日

夏目金之助

薄井様

四四三

明治三十九年十月二十九日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町四番地蓋平館薄井秀一氏へ

御返事拜見原稿如貴意御送申候表題は

文學論序(近刊) 夏目漱石

位に願ひ候。右用事迄餘は拜眉萬縷

十月二十九日

夏目金之助

薄井秀一様

四四四

明治三十九年十一月三日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜啓先夜は御立寄被下候處何の風情も無之不本意千萬に存候儲其翌日は御親父様わざ／＼見事なる菊花御持贈被下意外の幸福早速瓶中に挿み朝夕眺入居候何卒御老人へよろしく御鳳聲願度候先は右御禮迄 草草以上

十八(一)月二日

天長節の前夜

夏目金之助

大谷繞石様

四四五

明治三十九年十一月六日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

二十一圓なながし御落手の由結構に候。そこで手紙をかく元氣が出た所猶更結構に候。君が手紙をよこさないか顔を出さないと何だか存在を疑ふ様になる外の人にはそんな心配がない。是は君が氣まぐれに浦和の安宿り杯へ行つて考へ込む病氣がある所爲だらうと思ふ。生田先生が金港堂へ這入つたので何か書いてくれといふて来た。二十五圓だから君より三圓なながし多い事になる。先生の来た時は親類のものがある相談に來てゐた最中でしかも其上に今一人來訪中であつた。其來訪中の御客は驚ろいて逃けて歸つた。アंकワを讀んださうだが僕もよんだ。通篇西洋臭い。君どう思ふ。あれは焼き直しぢやないか。然し田園の光景が面白かつた。夫から田舎言葉のせるか厭味がなくよまれた。僕は初めて小説をかいてあれ丈出來れば大成功の方と思ふ。

文章一口談は例の東洋城が池上の山門で藝者を見ながら筆記したもの何だか怪しいものだ。不折のイムプレッションニストの論は亂暴なものだ。大將曰く感興そのものをかくからイムプレッションニストだと無學もこゝに至つて極まる。本人畫工ぢやないか。而して印象派なる名目の由來を知らないで馬鹿な事をいふ。

文學論の序は文章を見てもらふのでも何でもない。あの通りの事を讀んでへーと云つてもらへばいゝ。讀賣へのせる必要もなかつた。何かくれといふからやつた。

生田先生の戀愛文學が癪に障つたと思つて片上天絃が早稲田文學へかいた。夫を白鳥が賛成した。白鳥はチョツカイを出す事を家業にしてゐる。云ふ事は二三行だ。夫で人を馬鹿にして自分がエラサウな事ばかり云ふ。厄介な男だ。

正月には何か純人情的即ちシャボテン式ならざる物をかきたいと思ふ。 以上

十一月六日